

# Ronsard 研究 序 説

——恋愛詩集の用語と文体を中心にして——

## 本 城 格

### 序 論

#### I. Ronsard の死後の運命

Gilbert Gadoffre は大略次のような意味の言葉でその Ronsard<sup>1</sup> 論を書き始めている。一人ならずさまざまな Ronsard がいる。1550年の、一派の首領としての若い気負いたった Ronsard。1570年の、詩王と仰がれた Ronsard。Malherbe と Boileau によって伝えられた面目を失った Ronsard。Sainte-Beuve によって半ば名誉を回復した、Sainte-Beuve 的な Ronsard。リセやコレージュで教わる、いわば Sainte-Beuve の私生児とも言うべき Ronsard。それはマリーへの清澄なソネのためにもてはやされ、古典派大作家の先駆者たるの役割を背負わされた Ronsard である。Gadoffre のこの言葉は Ronsard その人<sup>2</sup>と彼が死後た

1. Gilbert Gadoffre: Ronsard par lui-même.

2. Pierre de Ronsard は1524年9月11日、Vendôme の西方約7里、Loir 河の左岸、Couture 村の la Possonnière の館で生れた。父 Louis は Louis XII, François 1<sup>er</sup> に従って、イタリアに転戦、後に王宮の Premier maître d'hôtel に任ぜられた。彼はイタリアで文芸復興の姿に接し、自らも新しい学芸を嗜んだが、息子が詩作に興味を持つことを好まず、軍人、外交官の華々しい将来を期待していた。かくて Ronsard は王太子 François の小姓となる。François は、彼が仕えて3日目に急死。第3王子 Charles の小姓となる。Ronsard は、王女 Madeleine がスコットランド王 Jacques V と結婚、かの地に渡るのに随行。病身の Madeleine は到着後2ヶ月にして死亡。彼は、1538年、イギリス経由にて帰国。1540年、著名な helléniste で外交官の Lazare de Baif が Haguenau の会議に出席するのに秘書として同行。彼はドイツの碩学たちに接し、自分の教養不足を痛感。帰国後、高熱を発し、慢性耳炎を併発、半聾となる。郷里にて療養中、詩作を試みた。最初はラテン詩を試みたが、それを放棄し、フランス語にて Horatius の自然な優美さを模倣しようと努めた。父も、息子が半聾となった今では、息子が学問の道に入るのを許し、剃髪を受けさせることにした。

1543年3月、Le Mans において司教 René du Bellay から剃髪を受けた。その際、司教秘書の Jacques Peletier du Mans (1517-1582) に出会った。この出会こそ、Pléiade 派の出発点を劃する。フランス詩の顕揚を志していた Peletier は Ronsard に共にフランス詩の改革に立上るよう勧めたらしい。ここで Ronsard は将来の進路をはっきり自覚した。翌年父が死去、彼は勉強を基礎からやり直そうと Paris に出る。彼は Lazare de Baif 家に入入りし、その子息 Antoine が Jean Dorat (1508-1588) を招いて古典語の教授を受けている席に彼も同席するようになる。1547年 Lazare が死去。Dorat は Baif 家を去り、コクレ学院の院長になる。Ronsard と Baif は同学院に入学、ひきつづき師の薫陶を受ける。やがて Joachim du Bellay (1522-1560) も

どらねばならなかった運命とをみごとに要約している。

Ronsard は死後、17世紀になって、フランス古典主義の立法者 Malherbe (1555—1628), Boileau (1636—1711) などによって、さんざん叩かれたことは有名である。Malherbe はその所有する Ronsard 詩集や Desportes<sup>3</sup> 詩集の、自分の気に入らない詩句を抹消し、欄外にその理由を書きこんでいたことも有名な事実である。Malherbe の弟子 Racan は次のような逸話を伝えている。ある日、Yvrande, Racan, Colomby などが Malherbe の机にあった例の Ronsard 詩集を繰っていた。Racan は Malherbe に、Ronsard 詩集の抹消していない部分は、これをよしと認めているのかとたずねた。抹消した部分同様認めていないと Malherbe は答えた。そこで Colomby は彼に言った、あなたの死後この詩集を手にする人は、あなたが抹消していない部分を是認していたものと考えるに相違ないと。Malherbe はそれを聞き、即座に残りの部分を抹消してしまったと言うのである<sup>4</sup>。

Malherbe の手で抹消された Ronsard 詩集は今日失われているが、Desportes 詩集の方は幸い残されていて、容易にそれを手にすることができる。この詩集の欄外に記された抹消の理由即ち *commentaire* は、Desportes, Malherbe 二人の詩に対する考え方の相違を知る上に重要であるばかりでなく、Malherbe 自身古典主義の立法者の一人にかぞえられながら、自己の詩論的なものを何一つ書き残していないため、彼の詩の理論を知る上に貴重な資料を提供している<sup>6</sup>。

---

コクレ学院に入学、かくて若い詩人のグループが形成されて行く。

彼らの師 Dorat は古典語、殊にギリシヤ語に長じ、講義に際しては、たえず両古典文学を対照させ、ラテン文学が如何にギリシヤ文学の影響を受けて育ったかを示そうと努めたと言われる。若い人たちはかかる教育を受けて、ローマの例に鑑み、たとえ貧弱な国語、文学であっても、優秀な文学に接してそれから養分を吸収すれば、立派な作品を生むようになると思えるのは当然である。この信念が後の改革の原動力となる。

1548年の半ば頃、突然彼らの静かな勉学の生活をかき乱す事件が起った。パリ高等法院の弁護士 Thomas Sebillet (1512-1589) が詩論を出したのである。詩とは天上の神秘界につながる神聖な芸術であり、神の靈感にふれた者のみが詩人の名に値する。だから単に技巧の端に遊ぶような詩作は排さるべきであり、かかる傾向に陥りがちな在来のジャンルを捨て、新しいものを育成しなければならない。このためには、範を古代あるいはイタリアに求め、ode や sonnet を開拓しなければならない。このように Sebillet の掲げる原則は、後日 Pléiade 派が宣言するものとはほぼ同じである。しかし Sebillet は Clément Marot, Mellin de Saint-Gelais, Hugues Salel などのフランス詩人を古代の詩人たちと並べて模範として推し、しかも引用している例文は、これらの詩人たち、殊に Marot のものが大部分を占めている。要するに彼は、古代の詩人を崇める人たちと Marot 派との妥協をはかったのだ。Dorat 門下の熱烈な humanistes たちには、この妥協の試みが我慢できなかった。ここから彼らの宣言書「フランス語の擁護と顕揚」が生れるのである。cf. Chamard: Histoire de la Pléiade.

3. Philippe Desportes (1546-1606) は Ronsard の流れを汲むが、彼の Petrarca 風の恋愛詩は軽妙にして宮廷の人気を集め、その声名は晩年の Ronsard のそれを脅かすものがあった。

4. Vie de M<sup>r</sup> de Malherbe par M<sup>r</sup> de Racan, Oeuvres de Malherbe par Lalanne, Tome 1, LXIII-LXXXVIII.

5. Oeuvres de Malherbe par Lalanne, Tome 4 に収録されている。

こうした攻撃によって言えば、事実を余りにも単純化することになるが<sup>7</sup>、とにかくフランスの詩王と仰がれ、国内はもとより国境を越えてその名をとどろかせ、作品が夥しく版を重ねていた Ronsard は、1630年の綜合作品集第15版を最後に、その作品集が刊行されなくなり、およそ2世紀にわたって忘却にも等しい誤解の中に陥ってしまったのである。Ronsard は、16世紀において、いかに高く評価されていたかは、たとえば彼とほぼ同年輩で、当時法曹界で活躍していた著名なユマニスト Etienne Pasquier、あるいは Montaigne が Ronsard に呈した讃辞を見ても明らかである<sup>8</sup>。それほど高く評価されていた Ronsard が、何故 Malherbe によってあれほど徹底的に否定されねばならなかったのか。両者の作品、詩作態度の間に如何ともしがたい対立が見られるのであろうか。

前述の、Malherbe 自身が抹消し、欄外に *commentaire* を書きこんだ Ronsard 詩集が現存しておれば、何故 Malherbe があれほど Ronsard を否定したかを探る直接的な資料となりえたであろう。今日残されている直接的な資料は、Katz も指摘しているように<sup>9</sup>、いずれも無意味に近く、Malherbe の Ronsard 観を知るのにほとんど役立たない。そこで残るのは、前述の Racan の伝える挿話など間接的な資料のみで、それらから知りうることは、彼が Ronsard の作品を抹消し、全的にそれを否定したという事実だけである。かくて Malherbe 自身の口から、Ronsard 否定の理由を具体的に聞くことはできない<sup>10</sup>。

6. Ferdinand Brunot (1860-1938) は、Malherbe の *commentaire* によって、Malherbe の理論を構成し、*La Doctrine de Malherbe d'après son commentaire sur Desportes* (1891) を書いた。Brunot はその序文において、この *commentaire* は Malherbe が理論的な書を書き残していないが故に、彼の理論を知る上に貴重な資料である所以を強調している。Malherbe は理論の書を書かず、しかも古典主義の形成に寄与したについては、当時興りつつあった文学サロンのものの影響を考慮しなければならない。

7. こうした攻撃となって現われたその背景の地盤が重要なのである。

8. Etienne Pasquier (1529-1615) は次のように Ronsard を称讃している。「Il (Marot) fut le premier Poète de son temps, Ronsard est celui que je mets devant tous les autres, sans aucune exception et reserve. Car ou jamais notre poésie n'arriva et n'arrivera à sa perfection, ou si elle y est arrivée c'est en notre Ronsard qu'il la faut telle reconnoistre.» (*Recherches de la France*, VII, 714, cité par Katz dans son *Ronsard's French Critics*, p. 27.). Montaigne: «Quant aux François, je pense qu'ils l' (la poésie) ont montée au plus haut degré où elle sera jamais; et, aux parties en quoy Ronsart et du Bellay excellent, je ne les treuve guieres esloignés de la perfection ancienne.» (*Essais*, II, XVII, cité par Maury dans son *Ronsard: Poésies Choiesies*)

9. 今日残されている直接的な資料は、Katz によると、次の3点につきる。Katz: *op. cit.*, p. 66.

1) Ronsard 綜合作品集第14版 (1623年) において、恋人 Cassandre の肖像の下に掲げられた «Pour le portrait de Cassandre» と題する Malherbe 作の4行詩。

2) Malherbe の «*Commentaire sur Desportes*» の中に時たま見出される Ronsard への言及。

3) Malherbe の *commentaire* が書き込まれた Desportes 詩集には、Desportes の恋人 Cléonice を讃える Ronsard のソネ «*En faveur de Cléonice*» が掲げられていて、Malherbe がそのソネにも書きこんでいる *commentaire*。

10. *Commentaire sur Desportes* を Ronsard の場合にも利用できることは言うまでもない。

少し時代が下がるが、Malherbe と Boileau の中間時代の有力な Ronsard 反対者 Guez de Balzac<sup>11</sup> には、比較的整った Ronsard 批判が見出される。それを読めば、17世紀が Ronsard を手きびしく否定するに至った理由をある程度つかむことができよう。

「あれほど名声をはせ、賞讃されたこの詩人 (Ronsard) は、彼自身の欠点とその時代の欠点とを有している。<sup>12</sup>」Balzac は、Ronsard 自身が欠点を持っているばかりでなく、彼の生きた時代も悪かったと分けて考えている点に注目したい。Balzac は他の場所で、「しかし運命が彼をわが時代に生活させたなら、間違いなくよりよい模範により啓発され、彼の作品から多くのものを消し去り、自分の作品がすっきりした性格になるのを見たことだろう。<sup>13</sup>」(高田勇氏訳) と言っているのは、Ronsard が悪い時代に生きたとする Balzac として当然の発言であろう。この発言こそ、16世紀と17世紀との間の距離の自覚を示すものに他ならない。

「それは (Ronsard) は一人の全き詩人ではなく、詩人の萌芽であり、素材なのだ。彼の作品には、形づくられ、生育はしているが、全き姿となるにはほど遠い肉体の、生れたばかりの、半ば生命を与えられた各部が見出される。なるほどそれは大きな泉ではあるが、濁った、どろどろの泉である。水より泥が多いばかりか、塵芥が水の流れをせきとめている泉なのだ。<sup>14</sup>」Balzac はさらに続けて、Ronsard には詩人としての天分、想像力、自在さがあるが、用語、内容の両面にわたって秩序、調和はほとんど見られず、選択にいたっては皆無であると言う。Ronsard には天分、想像力、自在さがあると言うのは、彼が大きな泉である所以であり、秩序、調和、選択がないのは、彼の泉が濁りきっている所以であろう。「我慢のならない不敵さですべてを変革し、刷新しようとし、驚くべき放縦さで粗悪な語や言いまわしを製造し、慣用に反しようが、俗悪、晦渋であろうが頓着なく、心に浮ぶものを手当り次第に使用する。」<sup>14</sup>したがって、Ronsard の泉は塵芥にせきとめられているのだ。

ついで Balzac は Ronsard には判断力が不足していることを指摘する。「Ronsard には判断力が欠けていると断言しないにしても、彼の詩作品の大部分にあっては、判断力が主導権を握って他を支配する位置を占めていないと言うにとどめるなら、彼にとって寛大な見方になるのだ。<sup>14</sup>」Balzac のこの手きびしい Ronsard 批判は、とりもなおさず16世紀の奔放さ、豊饒さに対する17世紀の形成されつつあった古典主義の秩序、選択、判断力の対決であることが明瞭に看取される。

Malherbe, Balzac といった反 Ronsard 派ばかりではなく、当時 Ronsard を讃美し、擁

11. Jean-Louis Guez de Balzac (1594-1654) 書簡作家、17世紀散文の形成に大きな役割を果たした。

12. Trente-unième Entretien de Balzac, cité par Goujet dans sa Bibliothèque française, Tome 12, p. 245.

13. 高田勇氏「ロンサール研究史」(文芸研究第4号) Balzac が Jean de Silhon に宛てたラテン語の書簡。

14. Trente-unième Entretien de Balzac.

護する人たちもいたことは言うまでもない。Katz によれば<sup>15</sup>、1600年から1630年頃までは、Ronsard の敵と味方の勢力はほぼ伯仲していたが、その後は味方の勢力が衰えていく。Ronsard 讃美を高らかに奏でていた人たちも、敵方の攻撃が激しくなるにつれ、讃美から強い Ronsard 擁護の調子に移っていったと言う。

ここで、やはり Katz のあげている次の事実に注目したい。<sup>16</sup>1627年、詞華集《Le Sejour des Muses, ou la cresse des bons vers ...》がルアンで刊行されたが、その中に Ronsard の詩が10篇掲げられている。編者は、「過去の文体と現在のそれとの差異を明らかにするため、Ronsard のこれらの詩篇を組み入れた。」と言っている。編者は Ronsard と17世紀の間の距離を明瞭に指摘し、Ronsard を過去の代表者として提出しているのだ。I. M. という頭文字だけで編者名は明らかでないが、反 Ronsard 派であることは言うまでもない。

ここで注意すべきは、反 Ronsard 派に限らず、Ronsard 派といえどもこの16世紀と17世紀間の距離を認めざるをえなかった事実である。Ronsard 擁護者と見られる le Père François Garasse の、もし Ronsard にしてこの世に戻って来たなら、彼の詩篇の多くを消し去り……という Balzac 的な発言もさる<sup>17</sup>ことながら、この問題の Ronsard の詩句の改訂、Ronsard 自身企てるすべのない改訂を当時の最も熱烈な Ronsard 擁護者 Marie de Gournay が自ら手を下して敢てやってのけた事実に注目したい。<sup>18</sup>この驚くべき事実は、時代の好みが大きく変化したのを彼女自身認めざるをえなかったことを物語るものではなからうか。

当時形成されつつあった古典主義の潤いのない規則正しさよりも16世紀の自由さを愛した彼女は、Ronsard に熱烈な讃美を捧げ、機会あるごとに彼を擁護して来たが、自分の努力が効のないのを見て、遂に Ronsard の改作を思いついたのである。Ronsard の偉大さを理解させるには、まずその作品を理解させなければならない。それには、Ronsard の作品を若返らせる必要があるのではないか。かくして、彼女は Ronsard の歴大な作品の改作に手をつけ、Guillaume Colletet の忠告にもかかわらず、2・3の作品を実際に改作したらしい。そ

---

15. Katz: op. cit., p. 40.

16. ibid., p. 66.

17. le Père François Garasse (1585-1631), jésuite, 激烈な論争家。Doctrines curieuses des beaux esprits de ce temps ou prétendus tels (1624) の著者。

18. Marjorie H. Ilsley: Marie de Gournay's revision of Ronsard's "Harangue du duc de Guise." P. M. L. A., volume LXVII, p. 1054. Marie de Gournay は Montaigne に傾倒し、Montaigne の死後、Essais の校訂版の刊行に努めた。彼女は Ronsard にも熱烈な讃美を捧げていた。彼女は改作した Ronsard の作品を、1624年、ルイ13世に献じ、王宛ての書簡の中で、Ronsard の傑作約20篇がある人から贈られたが、贈主の言うには、それらの作品は Ronsard 自身晩年に手を入れ、彼の書齋で発見されたものであることをほのめかしていると言う。これこそまさに supercherie である。きびしい倫理観を表明している彼女が敢てこうした改作に手をつけたことに注意しなければならない。

のうち、*La Harangue de tres-illustre et tres-magnanime Prince François, duc de Guise, aux Soldats de Metz* の改作が今日残されている。

彼女は Ronsard の本文 291 行のうち、159 箇所を訂正している。訂正箇所を仔細に検討した Ilsley によると、彼女の訂正は種々の面にわたっているが、やはり訂正の中心は用語の面に置かれている。Ilsley は次のような意味のことを言っている。Rabelais, Ronsard, Montaigne の豊かな語彙を形づくる数かずの語を熱烈に擁護していた Marie が、《*Harangue du duc de Guise*》の中で Ronsard の華麗な用語を数多く削り取っているのを見ると、いささか感なきをえないと<sup>19</sup>。彼女はある程度時代の傾向に譲って、古びた語、余りにも大胆な語を除いたのである。このように、Ronsard と17世紀との間の距離が問題になる時、前面に出て来るのは Ronsard の用語なのである。

Ronsard に関する Chapelain と Balzac の論争もよく引き合いに出される<sup>20</sup>。しかし、両者の意見は根底においてさほど異ならない。Chapelain 自身もそれを認めている。Chapelain の主張を要約すれば、Ronsard は、フランス、スペイン、イタリアをとわず、現代のいかなる詩人に比しても、同等あるいはそれ以上の天分を有していたが、彼の生れた時代が悪かったのだ。国語がより完成し、規則立てられた時代に彼が生れていたら、現在・未来にわたってフランスのいかなる詩人にも優っていたであろう。このように、Ronsard を擁護する Chapelain も、大胆な新造語の使用、古代詩の盲目的な模倣など Ronsard の欠点を認めている。しかし彼は、それらの欠点を有しない者即優秀な詩人とは考えず、欠点を有しながらも優れた詩人でありうると考えたのである。要するに Balzac と Chapelain の相異は、一方が Ronsard の欠点を重視するのに対し、他方がその長所に力点を置く、力点の置き方の相違にすぎなくなる。

Ronsard 擁護派の努力も空しく、17世紀も半ばを過ぎると、その勢力は急速に衰える。そこへ、1674年 Boileau の有名な「その後に従った Ronsard はまた格別の方法で、総てを規則立てつつ総てを乱脈に陥れ、……仏蘭西語の中で希臘語や羅典語をあやつった彼の詩も…<sup>21</sup>」(丸山和馬氏訳)という決定的な判決が下されるのである。

19. *ibid.*, p. 1059.

20. Katz: *op. cit.*, p. 89. Jean Chapelain (1595-1674) は最初の Académie 会員の一人で、Académie の形成に重要な役割を果たすと同時に古典主義の形成にも寄与した。彼と Balzac の論争は、Katz によれば、1640年4月29日付の彼の Balzac 宛の書簡に始まる。

21. Ronsard, qui le (Marot) suivit, par une autre méthode,  
Réglant tout, brouilla tout, fit un art à sa mode,  
Et toutefois longtemps eut un heureux destin.  
Mais sa muse, en français parlant grec et latin,  
Vit dans l'âge suivant, par un retour grotesque,

この Boileau の判決は以後長い期間にわたって支配し、人びとは Ronsard 一派の真価を認めようとしなばかりか、その真価を探る努力をもせず、その努力に値しないものとして顧みなかったと言っても過言ではない。

たとえば、18世紀の碩学 l'abbé Goujet はその著 *Bibliothèque française ou Histoire de la littérature française*<sup>22</sup> において、57頁にわたって Ronsard を論じているが、その見解は Balzac, Boileau を一歩も出していないと言えよう。彼はまず Ronsard の生涯をたどっている。Ronsard が師 Dorat から受けた古典語の教育は、彼の趣味形成に役立つどころか逆にそれを損う結果になった。彼はギリシヤ人を模倣するだけで満足せず、フランス語をギリシヤ語の言いまわしに隷属させようとしたのだ。彼は、盟友 du Bellay とは逆に<sup>23</sup>、フランス語を頗る貧弱であるとし、ギリシヤ・ラテンの語彙でそれを豊富にすべきであると考え、フランスの詩神<sup>ミューズ</sup>をしてアテネ・ローマの言葉を語らせる結果になった。そのうえ彼は好んで作品に博識を持ちこんだが故に、詩を贈られた恋人たちはその詩を理解するため注釈が必要になったと、「恋愛詩集」第2版に著名なユマニスト Muret の注釈が付されたことを皮肉っている。

しかし Ronsard の初期の作品は好評を博し、人の妬みを買いもしたが、やがて王の支持が彼の方に傾いて来た。かくて彼は征服者のように詩壇に君臨し、すべてを破壊して新しい掟を制定する権利を有するかのようにならした。Ronsard はこれほど欠点を持ちながら、16世紀において彼ほど報われ、称讃された詩人はいない。

ついで Goujet は Ronsard の手がけた各ジャンルの批判に移っている。中でも「恋愛詩集」に対する彼の舌鋒はきびしい。まず、恋愛詩は聖職者であり、聖職禄をはむ者にとってまことに相応しい主題であると皮肉っている。その恋愛詩は、彼の生存中、もてはやされたが故に、彼は後世もそれに興味を持つものと信じていたが、それは彼の誤算であった。久しい以前からもはや誰もそれを読む者はいない。今もそれを思い出す人があるとすれば、それは Ronsard が自己の才能の使用をかくも誤ったのを惜しむためにすぎない。あれほど愚劣な作品に真面目に注釈を施した Muret の忍耐力と単純さにあきれるとまで言っている。

なるほど Goujet は Ronsard のよい点は一応よいと認めはするが、すぐつづいてそれに対してきびしい批判をつらねるのである。最後に彼は次のように結論している。Ronsard が

Tomber de ses grands mots le faste pédantesque. (L'Art poétique, Chant premier, 123-128).

22. l'abbé Claude Pierre Goujet (1697-1767) の18巻よりなる文学史 *Bibliothèque française ou Histoire de la littérature française* (1740-) は、今日普通の文学史に出ていない作家を知るうえに貴重な資料を提供している。

23. Du Bellay は、フランス語があらゆる主題を取扱い、微妙な思想を表現するのに十分豊富であり、美しいと主張したと Goujet は言うが、これは彼の誤解である。

大きな天分を有していたことは否めないが、彼はその天分をある種の詩に対する誤った熱意によってまげてしまったのだ。ギリシヤ・ローマの詩の魅力と豊かさをなす所以のものに心を奪われた彼は、それらの古典語に通じてはいたが、いまだ揺籃にいるフランス語の本質を弁えず、趣味をも欠いていたがため、フランス語を真に雄大な調子に高めるには、ギリシヤ・ローマの詩に見られる奔放さを見習えばよいと考えたのである。この結論は Balzac の見解を一步も出ていないと言わざるをえない。

Sainte-Beuve の努力によって、<sup>24</sup>Ronsard 一派の名誉がある程度回復され、人びとの関心が次第に16世紀に向けられ始めてからも、こうした Balzac・Boileau 的な見解が、殊に古典主義的な立場に立つ文学史家の中に、根強く残っていることに注意しなければならない。たとえば Nisard の文学史に見られる<sup>25</sup>Ronsard の評価は全く Boileau のそれと変りがない。

「Ronsard と Pléiade 派」と題する章の冒頭に、彼は Boileau の例の一節を引用し、この詩節こそみごとに Ronsard とその奇妙な運命と転落とを性格づけている。したがって Malherbe に至るまでのフランス詩の歴史は、Boileau のこの詩節の注釈以外のものではありえないと言う。事実、彼の文学史の Ronsard の項は Boileau の詩節を順を追って具体的に説明し、敷衍したものに他ならないと言っても過言ではなからう。<sup>26</sup>

当時 Nisard の影響下にあった大学は、<sup>27</sup>Chamard が指摘しているように、16世紀詩復興の動きに背を向けていた。大学において16世紀研究が盛んになるには、19世紀末、高等師範学校における Brunetière、ソルボンヌにおける Faguet の指導を待たねばならなかった。<sup>28</sup>

Ronsard 研究が復活して以来今日に至るまで Ronsard 研究者たちの主な努力は、Sainte-

---

24. 1826年8月、Académie Française が《Discours sur l'histoire de la langue et de la littérature françaises depuis le commencement du XVI<sup>e</sup> siècle jusqu'en 1610》という題で、翌年度の雄弁賞の論文を公募した。Sainte-Beuve は応募しようと、16世紀詩を読み進むにつれ、興味につられて研究を深めていった結果、応募期限に間にあわなくなった。そこで彼はその成果を1827年7月7日から28年4月30日まで、Globe 紙に Poésie française au XVI<sup>e</sup> siècle という題で連載。これが土台となって《Tableau historique et critique de la poésie française et du théâtre français au XVI<sup>e</sup> siècle, 1828》ができた。彼はこの書によって、16世紀詩をその占めるべき正しい位置に引きもどそうとしたのである。cf. Chamard: Les origines de la poésie française de la Renaissance.

25. Nisard: Histoire de la littérature française, tome 1, p. 361. Désiré Nisard (1806-1888) は高等師範学校、ソルボンヌなどの教授を歴任。

26. 一例をあげると、「古代人の模倣は、Ronsard とその一派にあっては、多くの場合原文にのぼせ上った翻訳に他ならない。訳語がない場合は、原文の語にフランス語の語尾を与えるにとどめている。だから、その詩は《フランス語の中でギリシヤ語やラテン語をあやつる》ようになり、Boileau の嘲笑を買うのである。」

27. Chamard: op. cit.

28. Brunetière は1886年高等師範学校の講壇に、Faguet は1891年ソルボンヌの講壇に、それぞれ16世紀に関する講義によってデビューした。Brunetière 門下から、Pléiade 派の代表的研究者 Henri Chamard が、Faguet 門下からは、Ronsard 研究の第一人者 Paul Laumonier が出ている。(Chamard: ibid.)



Beuve によって明らかにされた Ronsard の美点のみならず、Sainte-Beuve によって半ば名譽を回復した Ronsard と Gadoffre も言うように、彼の爛眼をもってしても見落した、あるいは見抜きえなかった Ronsard の価値を探り、<sup>29</sup> 彼を全的に再評価してその真の姿を認識するにあった。この目的達成のための様ざまな基礎研究の一つとして、Ronsard の死後の運命に関して従来一般に信じられていた見方を修正しようとする努力がなされて来た。

a) Ronsard の失墜は Boileau の言うほど急激ではなく、17世紀前半はおろか、17世紀後半あるいは18世紀においても Ronsard を語り、ごく少数ながら彼を擁護する人を見出される。彼の作品も、綜合作品集こそ1630年以後刊行されていないが、少数ながら詞華集に散見し、Ronsard は全的に忘却されたのではない。

b) Sainte-Beuve によって初めて Ronsard が復活したのではなく、彼以前にもそうした試みがなされていた。

c) Ronsard は死に至るまで詩王の榮譽を保ちつづけたが、晩年にはこの榮譽にある実質的な変化が見られるのではないか。

Katz の Ronsard's French Critics は、今日に至るまでのかかる努力の総決算であると言えよう。この種の研究によって種々細部の実相が明らかにされたが、大局的には Ronsard がおよそ2世紀にわたって忘却にも等しい運命に陥れられていたことは否めない事実である。

ところで、Ronsard が Malherbe, Balzac, Boileau などによってあれほど攻撃され、否定されるのを見ると、後者は前者から何も受け継がず、両者の間に断絶があると考えたくなる。従来ともすればそのように考えられていた。この問題も多くの研究者の関心と呼び、彼らは Ronsard 一派と Malherbe ひいては17世紀古典主義との間に断絶があるか否か、両者の関連を究明しようと努力して来た。

## II. Ronsard 一派と Malherbe との関連

René Fromilhague はその著 Malherbe, technique et création poétique の序論において、Pléiade 派と Malherbe との間に断絶があるか否かの問題をめぐっての諸学者の説を3つのグループに分け、それぞれの説を概観している。仮にこの3つのグループを断絶派、非断絶派、中庸派と名づけると、

1) 断絶派 (Fromilhague は、同書巻末の目次において、この派を *thèse* と置いている): 彼はこ

---

29. Sainte-Beuve は Ronsard の中に二人の詩人を認めている。一人は努力を重ねて崇高な Pindaros 的な ode にまで高まろうとし、それだけにしばしばつまづきもした詩人であり、今一人は、もっと率直で自然で、Marot を受けつぎ、これを完成した詩人である。Sainte-Beuve は Ronsard の第一の側面は理解せず、第二の側面を手ばなしで称讃している。

の派に属する者として、Boileau, Sainte-Beuve の二人をあげている。

2) 非断絶派 (antithèse): Ferdinand Brunot, Gustave Allais, Philippe Martinon,  
Paul Laumonier, Joseph Vianey

3) 中庸派 (synthèse): Marcel Raymond, Theodosia Graur, Jacques Lavaud, Raymond  
Lebègue

以下これら諸学者の説とそれに対する Fromilhague の解釈とを検討しながら、筆者自身の問題のありかを探ることとする。

1) 断絶派 上述のように Fromilhague は断絶派の代表として Boileau, Sainte-Beuve をあげている。彼によれば、Boileau は Malherbe を革命的な創始者、先進者に何ら負うところのない全的な革新者として提出している。しかし、「この豪然たる詩人 (Ronsard を指す) がかくも高い所から失墜したのを見て、デポルトやベルトーは一層おのれを慎んだ。<sup>1</sup>」(丸山和馬氏訳) という詩句から判断すると、「Boileau は、Ronsard のあと節度の方向への発展が見られることを意識していた。だが Boileau はそこから何ら結論を引出さず、これら兩人 (Desportes, Bertaut)<sup>2</sup> と Malherbe との間の断絶をきっぱり肯定している。<sup>3</sup>」と言う。

上掲の詩句から考えると、Boileau は、Malherbe の改革の端緒が既に Desportes, Bertaut の中に看取されるとは言わないまでも、Fromilhague の言うように、少くとも Ronsard 以後16世紀詩が節度の方向へ内的に発展する萌しを呈しているのを意識していたと言えよう。ところが Boileau は Desportes・Bertaut を Ronsard と Malherbe との間の過渡的な存在として彼らと Malherbe との連関を考えるとどこか、遂に Malherbe 来たれりと Malherbe を真の革新者として提出しているのであって、両者と Malherbe との間に断絶を認めていたとする Fromilhague の見解は妥当であろう。

Sainte-Bueve は Ronsard 一派を長い忘却から甦えらせた功労者であるが、この功労者を断絶派の代表とすることに奇異の感をいだく人があるかも知れない。Fromilhague によれば、Boileau の下した判決が一世紀半を経過して Sainte-Beuve によって初めて再審理されたが、それは部分的な再審理にすぎず、Malherbe に関する Boileau の thèse がかえって強調された観がある。Sainte-Beuve は Desportes・Bertaut を Ronsard に結びつける子弟関係を強調<sup>4</sup>し、彼はこの点に関し Boileau の犯した誤りを指摘している。「Ronsard の失墜はそれ

1. Ce poète orgueilleux, trébuché de si haut,

Rendit plus retenus Desportes et Bertaut. (Boileau: L'Art poétique, Chant 1<sup>er</sup> 129-30)

2. Jean Bertaut (1552-1611), Grenoble 高等法院参事などを経て、Séze の司教。彼は Ronsard, Desportes を模倣して恋愛詩を書いたが、後には専ら宗教的な主題の詩に打ちこんでいる。

3. Fromilhague: Malherbe, technique et création poétique, p. 13.

ほど急激ではなく、ことに Desportes, Bertaut の出現以前に起きたのでは断じてない。<sup>5</sup> Sainte-Beuve はこのように Desportes・Bertaut を Ronsard により強く結びつけた結果、Desportes・Bertaut と Malherbe との間を更により深く切り離してしまったのであり、彼はこの点に関して Boileau の見解を全的に受入れているのだと Fromilhague は言い、更につづけて、Sainte-Beuve は、Tableau historique et critique de la poésie française の1842年の献辞においても、少しもその意見を変えていないと言う。「Henri 3世治下にあっては、Desportes と Bertaut は Pléiade 派に結びついていて切れ目が見られない。カトリック同盟の争乱が断絶を準備する。そこへ Malherbe が来て Ronsard と同様 Desportes と断絶するのである。」<sup>6</sup>

Sainte-Beuve の所説には時に曲折、矛盾があるが、とにかく彼は、上に引用した Tableau の1842年の献辞におけると同じ意味のことを繰返し述べている。「宗教内乱は、Ronsard によって置かれた基礎の上にフランス文学が打建てられるのを妨げた大きな原因の一つであることは明らかだ。」<sup>7</sup> これによっても、Sainte-Beuve は、Fromilhague の言うように、断絶を認めていたと考えられよう。

2) 非断絶派 Fromilhague は、上述の断絶派の見解に対して疑いが向けられるようになるには、19世紀末を待たなければならないと言って、Boileau・Sainte-Beuve の thèse に対する antithèse の最初の表明者として Brunot をあげ、彼の La Doctrine de Malherbe d'après son Commentaire sur Desportes (1891) から次の言葉を引用している。「この問題は今まで明確にされなかったし、恐らく将来も明らかにされないであろう。十分な資料がないからである。しかし次のことは確かであるように思われる。既に17世紀の初頭、16世紀の末以来、即ち Malherbe が宮廷に姿を現わす以前に、新しい文学の傾向が現われていたことである。それらの傾向を明確に規定するのは困難であろうが、とにかくそれらをとらえることは可能なのだ。」<sup>8</sup>

これだけの指摘なら Brunot を待つまでもなく、既に Darmesteter, Hatzfeld の両氏は

---

4. Sainte-Beuve は、Desportes・Bertaut と Ronsard との間には「調子の相違が見られるところから、人びとは Desportes と Bertaut が1550年の改革者たち (Ronsard 一派) の従順な弟子でありうることに最初気づかなかったであろう。Boileau 自身もこの点に誤りを犯し、彼の誤りが長く世人の意見を支配したのである。しかし、この両者間の文学的血縁関係ほど明白な事実はなく、これほど容易に説明できる事実もない。」と述べている。Sainte-Beuve: Tableau historique et critique de la poésie française, p. 104; Fromilhague: op. cit., p. 15.

5. cité par Fromilhague, Fromilhague: ibid., p. 15.

6. Sainte-Beuve: ibid., p. 1. Fromilhague: ibid., p. 15.

7. Sainte-Beuve: ibid., p. 72, note 1.

8. Brunot: La Doctrine de Malherbe, p. 563. Fromilhague: ibid., p. 18.

その共著になる *Le Seizième siècle en France, tableau de la littérature et de la langue* (1878) の中で、次のような見解を表明している。「Ronsard と共に近代詩が始まる。Pléiade 派は真に卓越した作品を残さなかったにしても、Malherbe, Boileau, 17世紀, 18世紀が歩むことになる道を開いたのである。……Malherbe は Ronsard の遺産の一部を投げ棄てたが、その重要な部分を保存している。彼のあと17世紀は Pléiade 派が輪郭づけた仕事を再び取上げ、より優れた技術と才能とをもって、それをより狭い範囲に閉じ込め、完成にもたらし<sup>9</sup>すのだ。」「Ronsard は Malherbe を準備した。Malherbe は17世紀の不朽の作品を準備する<sup>10</sup>のだ。」これらの引用によっても明らかのように、両氏は Pléiade 派と Malherbe との間の断絶を否定し、古典主義は16世紀を受けつぎ、これを整理し、完成したものと考えているのである。

Brunot につづいて、Gustave Allais は *Malherbe et la Poésie française à la fin du XVI<sup>e</sup> siècle* (1892) において、詩のジャンルを中心にして、Philippe Martinon は *La Genèse des règles de Jean Lemaire à Malherbe* (1909) において、作詩上の法則を中心にして、Ronsard 派から発した詩の動きが、Desportes, Bertaut を経て、徐々に変化しながら、Malherbe に連続していることを明らかにしている。

ところで、Laumonier の *Ronsard poète lyrique* (1909) に至って、初めて Ronsard 自身の内的な発展が強く打出されて来たことに注目したい。Laumonier は、Ronsard が既に発表した自己の作品に死の直前まで筆を入れつづけた事実に注目し、何故 Ronsard がかくまで執拗に訂正しつづけたかの理由を探ってみた。その結果、Ronsard は *correction, clarté, plénitude, harmonie, élégance, noblesse, sobriété* を目指して自作を訂正したことが明らかとなった。これらの目標の大部分は、後に Malherbe の改革が目指したものと一致する。したがって、Ronsard は古典主義の方向、少なくとも Malherbe 的な方向を目指して自己の作品を訂正したと言えよう。Laumonier は次のように結論している。「頑固な Malherbe の徒は次の事実に気づかなかった。Malherbe の行なった *réaction* の方向そのものに向って Ronsard はたえず自己を改良していること。博学なユマニスムから純粋な古典主義への趣味の名によってなされた発展は、既に Ronsard の中に存在していること。Ronsard 以後フランス詩がたどった道筋を Ronsard 自身規則と実例とによって示したこと。Desportes, Bertaut をして一層己を慎ませたものは、Ronsard の示した規則と実例とであって、彼の失墜のためではないこと。……Marot の単純さと Ronsard のピンダロス詩風との中間を守る

9. Darmesteter et Hatzfeld: *Le Seizième siècle en France*, p. 125.

10. *ibid.*, p. 146.

折衷的な詩が Malherbe と共に勝利を占めるが、Ronsard は既に1555年頃この中庸の道を見出し、それを踏みはずさなかったこと。内容、文体、韻律に関して、古典詩の持つ特性はすべて Ronsard の遺産であること。Pléiade 派の首領によってなされた貢献は、彼の与えた損害よりも百倍も大きいこと。<sup>11</sup>これを一言にして言えば、Ronsard は実は Malherbe の先駆者であるということである。Laumonier はこの一見逆説的な事実に着目したのである。

Laumonier のあとを受けて、Vianey は Les Odes de Ronsard (1932) の第8章において、Ronsard が Malherbe の先駆者であるという命題を、Ronsard の処女詩集「オード4部集」に Ronsard 自身が後に加えた訂正箇所を検討することによって実証しようと試みたのである。Fromilhague も言うように、第8章の表題——Dans l'édition de 1555 Ronsard inaugure la réforme de Malherbe. De 1560 à 1584, il précise la réforme.——そのものが著者の意図を明瞭に示している。彼は第8章の冒頭で次のように言っている。「《遂に Malherbe がやって来た。》 Malherbe が来た時には、最初の Malherbe が久しい以前から Malherbe に先立って現われていて、この先駆者こそ Ronsard その人であることを Boileau は知らなかったのだ。……Ronsard の裡にあった Malherbe は、同じく Ronsard の裡にいた Pindaros と Horatius のあとに寄り添って歩いていたが、5年を要せずして、Ronsard の裡なる Pindaros と Horatius を分別の道に立返らせたのだ。1550年に出した自作を訂正している1555年の Ronsard を眺めてみよう。彼は正確に言って何をしているのであろうか。1605年頃になって彼の影響を根こぎにしようとする改革者 Malherbe の作業をそれと気づかずに準備していたのだ。……Ronsard が1555年に出したオード集第3版は、余り知られていないが、文学史上の重要事件である。ここに Malherbe の改革が始まるのだ。<sup>12</sup>」ついで Vianey は Ronsard の訂正箇所の検討に移っている。

「Malherbe 的な眼鏡をかけて」<sup>13</sup>1550年の「オード4部集」を読み返した Ronsard は、まず archaïsme を追放していると Vianey は言う。彼は Ronsard の訂正をその動機によって次の7項に分類している。1) archaïsme の追放 2) latinisme の追放 3) diversité grammaticale の排除 4) 曖昧さの追放、明晰と論理性の要求 5) bon sens の要求 6) 不適切さ、平凡さ、冗語、滑稽な誇張の追放 7) 耳障りな語の排除である。これらの項目は、Laumonier の項で述べたように、Malherbe の改革の目標と一致する。Vianey は Ronsard の改訂をこれらの諸項目にわたって検討し、その改訂が Malherbe の改革の方向と一致することを示そうとしたのである。

11. Laumonier: Ronsard poète lyrique, p. 724. Fromilhague: ibid., p. 20.

12. Vianey: Les Odes de Ronsard, p. 122. Fromilhague: ibid., p. 21.

13. Vianey: ibid., p. 123.

ついて Vianey は Ronsard の有名な Ode 2 篇——A la Forest de Gatine, A la Fontaine Bellerie——を取上げ、如何に Ronsard が少しの欠点をも見逃さず自作に徹底的な訂正を加えたかを示している。殊に A la Fontaine Bellerie については、Vianey は Malherbe 流の Commentaire を自ら創作し、Commentaire de Malherbe と銘うって1550年の本文の次に掲げ、訂正があたかもこの commentaire に則ってなされたかのように装っている。この commentaire は実に傑作で、Malherbe 自身の今日残されている Commentaire de Malherbe sur Desportes を彷彿させるものがあるから、一例を紹介しておく。

1550年の本文

改訂後の本文

Strophe III	A tout jamais puisses-tu estre	Strophe III	Ainsi toujours puisses-tu estre
	En honneur, et religion		En religion à tous ceux
	Au boeuf, et au bouvier champestre		Qui te boiront, ou feront paistre
	De ta voisine region.		Tes verts rivages à leurs boeufs.

Commentaire de Malherbe (Vianey 作)

Strophe III—*Honneur et religion*: deux mots pour dire la même chose

—*Bouvier champestre*: est-ce qu'il y a des bouviers citadins?<sup>14</sup>

—*Le bouvier de ta voisine region*: n'est-il pas évident que ce sont les bouviers du pays qui vont s'abreuver là?<sup>15</sup>

Vianey の Les Odes de Ronsard は学生の manuel 的な書物で、それに対して次のような批判を加えるのは当を失したことも知れないが、この書の第 8 章を文学史上の重大な問題に関する論証と考えるなら、たとえ Fromilhague がテキストの厳密な、鋭い検討に立脚した論証と称讃していようと、そこにいくつかの欠点を指摘せざるをえない。<sup>16</sup>

1550年の「オード 4 部集」に対して1555年に加えた訂正箇所は約 678 箇所ある。678 の訂正箇所のうち、Vianey が取上げているのは22箇所にすぎない。では、彼が取上げていない約 650 の訂正箇所では、ことごとく Malherbe 的な方向への訂正がなされているのであろうか。Vianey が latinisme 追放の項で取上げている例:

1550年: Tu seras faite sans cesse

→1555年: Iô, tu seras sans cesse

Des fontaines la princesse. (livre II, IX)

Des fontaines la princesse.

14. Malherbe は物貰いが施しを求めて、noble gentilhomme と言うのを聞き、gentilhomme であれば noble であるのは当然で、noble は余計だと言ったという逸話には、極度に冗語を嫌った彼の面目がよく表われている。(Vie de M<sup>e</sup> de Malherbe par M<sup>e</sup> de Racan).

15. Vianey: op. cit., p. 135-7.

16. Fromilhague: op. cit., p. 21.

なるほどラテン語 *fies* の直訳である *Tu seras faite* という *latinisme* が追放されたが、その代り *Iö* というギリシヤ語が新たに導入されている。Vianey はこの点にはふれていない。たまたま彼があげた例の中にさえ、ギリシヤ語の導入という、Malherbe 的方向とは逆のマイナス的な訂正があることから、彼がふれていない 650 数箇所の訂正はすべて Malherbe 的な訂正とは考えられない。マイナス的な訂正、あるいは Malherbe 的方向に何ら積極的につけ加えないゼロ的な訂正も数多くある筈である。それらに関しては何もふれていない。それのみならず、プラスの訂正箇所は全体でいくつあるのか、総訂正箇所 678 の何パーセント位を占めているのか、それらには全然ふれず、ただ 22 の例をあげているにすぎない。このように考えると、Vianey はたまたま Malherbe 的な規準に合いそうな例を行き当たりばつりに 20 余り選んで来たにすぎないという印象をも与えかねないのである。<sup>17</sup>

こうした欠点はとにかくとして、Fromilhague によれば、この Vianey の見解は Boileau のそれを逆転したもので、*thèse* に対するまさに *antithèse* であるが、Vianey の結論は少し行きすぎであると考えざるをえない。Vianey の結論が正しいとすれば、Malherbe の *originalité* がすべて否定される結果になり、彼の改革と個性は影がうすれてしまう。Malherbe は単に Ronsard の正系相続人にすぎず、Ronsard の始めた改革を受けついにすぎないのなら、何故 Malherbe があれほど Ronsard を攻撃したのか、また Malherbe の同時代人は Malherbe が改革を断行し、彼と共にフランス詩の新時代が始まったと考えていたのか理解しがたくなる。Fromilhague はここに *synthèse* が現われる必然性がある<sup>18</sup>と考える。

3) 中庸派 前述のように Fromilhague は、*synthèse* の立場に立つ者として Raymond,<sup>19</sup> Graur,<sup>20</sup> Lavaud,<sup>21</sup> Lebègue の 4 人をあげているが、ここでは最も明瞭な形で *synthétique* な見解を表明している Lebègue 教授を代表者として、彼の意見を聞くにとどめよう。教授は *La poésie française de 1560 à 1630* (1951) の第 1 部 *De Ronsard à Malherbe* の結論において、次のような意味のことを言っている。Malherbe は、今日物の一面しか見ない人たちが考えているような残酷な改革家ではなかった。彼のきびしい教理は 16 世紀後半におけ

17. Vianey は既に 1910 年、Vaganay 編の「Ronsard 恋愛詩集」に付した *Préface* において、「恋愛詩集」の *Variantes* を取上げ、Ronsard が同詩集に加えた訂正の目指す方向を探っている。この方は周到な、すぐれた論証である。なお、「ユゲに捧げられた記念論文集」に掲げられている A. Feugère の «*Le goût de Ronsard d'après les variantes des <Amours> de 1552*» という論文は、方法的に周到な配慮がなされていて、Vianey 的な方法の一つの到達点を示すものと言えよう。

18. Fromilhague: *ibid.*, p. 22.

19. Marcel Raymond: *L'influence de Ronsard sur la poésie française*, 1927.

20. Theodosia Graur: *Un disciple de Ronsard Amadis Jamyn, sa vie, son œuvre, son temps*, 1929.

21. Jacques Lavaud: *Un poète de cour au temps des derniers Valois Philippe Desportes*, 1936.

る詩の発展の帰結であり、完成なのである。この発展は、Ronsard が自己の作品に加えた訂正の中に看取されることが Vianey によって確認されたのであり、当時の主な詩人には、程度の差こそあれ、等しく認められるものである。しかしだからと言って、Malherbe は新しく何も作り出しはしなかったとか、彼がいなくとも、フランス詩の発展に変わりがなかったなどと主張して、逆の行過ぎに陥らないよう慎まねばならない。高慢で粗暴な彼はこの発展の速度を速めたのである。彼の実例と教訓によって、如何に多くの若い詩人が Desportes や Du Bartas を模倣するのを差控えたことか。<sup>22</sup> 要するに、Lebègue 教授は他の場所でも言うように、Malherbe の originalité は掟の新しさにあるのではなく、厳格に掟を適用し、かつその掟を論理的な教理に凝結させた点にあると考<sup>23</sup>えている。

以上、序論として、Ronsard の死後彼に浴びせられた非難の概略をたどり、ついでそれに関連して、Ronsard 派と Malherbe ひいては17世紀古典主義との間に断絶があるか否かに関する諸学者の説を概観し、Ronsard につづく Desportes, Bertaut におけると同様 Ronsard 自身においても Malherbe 的な方向に向っての発展のあとが見られ、この Ronsard の発展をとらえる方法として、主に彼の作品の variantes を検討する方法がとられていることを明らかにして来た。前にも指摘したように、Ronsard に対する非難は、まず第一に、彼の用語の面に向けられていた。用語は一番眼につき易いが、だからと言って、用語の問題は外面的な問題にすぎないのではなく、深く Ronsard の詩の本質につながっている。しかも、Ronsard を首領とする Pléiade 派が運動の旗印として掲げたのは、まずフランス語の語彙を豊富にし、フランス語の表現力を豊かにすることであった。したがって、Ronsard 研究においては、用語の問題は殊に重要な位置を占めるべきものと考えられる。

ところで、Ronsard あるいは Pléiade 派の用語を専門に扱った書物には、Mellerio の Lexique de Ronsard,<sup>24</sup> Marty-Laveaux の La Langue de la Pléiade<sup>25</sup> がある。Mellerio の Lexique de Ronsard は表題の示す如く、Ronsard の用語辞典であるが、巻頭には Etude sur Ronsard と題する introduction があって、Ronsard の用語、綴字法、文法の解説がなされている。用語に関しては、Eléments grecs, Eléments latins, Eléments espagnols et

22. Raymond Lebègue: La poésie française de 1560 à 1630, première partie, p. 210-212. Fromilhague: ibid., p. 27.

23. Lebègue: Malherbe correcteur de tragédie, R. H. L., 1934, p. 169, cité par Fromilhague. Fromilhague: ibid., p. 25.

24. Lexique de Ronsard, précédé d'une étude sur son vocabulaire, son orthographe et sa syntaxe, par L. Mellerio, Paris, Plon, 1895.

25. La Pléiade française avec notices biographiques et Notes, par Ch. Marty-Laveaux の Appendiceとして、La Langue de la Pléiade (2 vol.), Paris, Lemerre, 1896.



italiens, Emprunts aux vieux français, Emprunts aux dialectes de la France, Termes de vénerie, Termes de métier, Mots nouveaux formés par Ronsard, Diminutifs, Adjectifs composés の各項目にわたって若干の説明と実例が並べられている。Mellerio はおよそ次のようなことを言っている。Ronsard は今なお不当な偏見に苦しめられているが、果して彼はそうした非難に値するであろうか。彼はフランス語においてギリシャ語やラテン語をあやつったのではないことを確実な方法で、いわば数学的に証明を試みることは可能であろう。<sup>26</sup> 要するに、Mellerio の意図の中には、Ronsard は一般に信じられているほど奇妙な語を濫用してはいないという事実を示すことが含まれていたと言えよう。

かつて筆者は Ronsard の作品に接する以前に、入門の意味で Mellerio のこの書を読んだことがある。その時の印象では、著者の意図にもかかわらず、上記の各項目に列挙された実例を読み進むにしたがい、Ronsard がこれらの語をふんだんに用いているとすれば、大それたことに思われた。その後実作にふれるにつれ、そうした風変りな語は、ある特殊な作品にはある程度集中して用いられてはいるが、一般には決して頻繁に用いられていないことが分かって来た。それにつけても、Mellerio が単に実例を列挙するにとどめず、少くともそこに列挙されている語は Ronsard の如何なる作品で幾度使用されているかが示されていたなら、筆者が最初いだいたような誤解はある程度防げるのではなかろうか、したがって Ronsard の用語の実態を調べる必要があるのではないかと考えた。Ronsard の用語の実態が明らかになれば、少くとも彼が一般に信じられているほど無謀であったかどうか、あるいは上述の Ronsard の内的発展、ひいては Ronsard 一派と Malherbe との間に断絶があるか否かの問題を考えるうえに何らかの手がかりをうることになるのではなかろうか。

そこで小論においては、Ronsard の用語の実態——用語の問題には必然的にある程度文体技法の問題がからんで来ると思われる<sup>27</sup>——を調べることにする。まず第一段階として、調査の範囲を恋愛詩、特に「恋愛詩集」(Les Amours)、「続恋愛詩集」(Continuation des Amours)、「エレーヌへのソネ」(Sonets pour Helene)に限ることにする。「恋愛詩集」は1552年、「続恋愛詩集」は1555年、「エレーヌへのソネ」は1578年に出版されたもので、Ronsard の詩作活動の初期、中期、後期に属する。ジャンルが異なれば、前述のように、用語に多少の差異が予想されるが、これらはいずれも恋愛詩集であり、ソネ集であるから、各詩集の用語を相互に比較するのに好都合である。まずこれらの詩集における用語の実態を明らかにし、ついで初期の「恋愛詩集」から中期の「続恋愛詩集」を経て後期の「エレーヌへの

26. Mellerio: op. cit., XVI.

27. 次の Pléiade 派の主張の項参照。

ソネ」に至るまで、用語の面において何らかの変化が認められるかどうかを調べることにする。かくして、Ronsard と Malherbe との連関の問題に何らかの手がかりを提供できればと考えるのである。

## 第 1 章

### I. Pléiade 派の主張

「フランス語の擁護と顕揚」<sup>1</sup>は Du Bellay の手になるものではあるが、これは当然 Ronsard 一派の宣言書であると言えよう。この書は 2 部からなり、第 1 の書では、詩作にあたって自国語であるフランス語を用いるべき所以を説いて、フランス語を擁護し、第 2 の書では、前篇において擁護されたフランス語を如何に顕揚すべきか、その方法がやや具体的に述べられている。

一体フランス語は今更仰々しく擁護されねばならない必要があったのだろうか。中世以来フランス語による作品が豊富に制作されて来たではないか。しかし、やはり中世を通じてラテン語の強い伝統がフランス語の発達を妨げて来たことも事実である。文芸復興期に入り、humanisme の勃興につれ、ラテン語による文学も勃興する状態にあった。古代の学芸が復興するにしたがい、優れた古代の作品が古代の言葉に盛られて立ち現われる。人びとは、それらの優れた作品は古代語というみごとな器を離れてはありえない、したがって優秀な作品を制作しようと思えば古代語による外ないのではないかと考えるようになる。かかる気運の中であって、愛国心と王室の政策とがからみ合った国語擁護運動の一環として、若い Ronsard 一派の運動が芽ばえるのである。

「フランス語の擁護と顕揚」が書かれた直接の動機は、前述のように、Sebillet の「詩論」<sup>2</sup>に対する若い一派の反撥にあったと言われる<sup>3</sup>。Dorat 門下の熱烈なユマニストたちには、Sebillet のはかった古代詩と Marot 派の詩との妥協の試みが我慢できなかったのだ。彼らは考えた。フランス詩を本格的な位置に高めなければならない。過去のフランス詩の凡庸さは国語そのものの欠陥によるものではない。フランス語にはそうした本質的な欠陥はなく、十分成長しうる素質を有している。適切な育成方法をさえとれば、短時日にして優れた表現力を獲得できるのである。したがって、ラテン語によらなければ本格的な詩が書けないとす

---

1. La Deffence, et illustration de la Langue françoise, par I. D. B. A., 1549. (I. D. B. A.: Joachim du Bellay Angevin).

2. Art Poétique François, pour l'instruction des jeunes studieux, et encor peu avancez en la Poésie Française. この詩論は、1548年の半ば、匿名で出された。Thomas Sebillet (1512-1589) には、この外、エウリピデスのイフィゲネイアの訳などがある。

3. cf. Chamard: Histoire de la Pléiade, Tome 1.

る謬見を打破しなければならない。フランス人にとっては、古代語は努力して習得した外国語であって母国語ではない。如何にそれに巧みであっても、到底古代人に並ぶことはできない。いたずらに古代詩の *pastiche* を作って才能を浪費する代りに、これを自国語の育成と自国詩の顕揚に用いるなら、どれほど有意義であり、後世に名をなす所以でもあろう。<sup>4</sup>

では如何にしてフランス語を育成し、フランス詩を顕揚すればよいか。それには手引きとなる模範が必要である。フランス詩を墮落に追いやったフランス在来の詩人など模範とすべきでなく、彼らの使用した古い詩型 *rondeau*, *ballade*, *virelai* などをも捨てなければならない。フランス語、フランス詩を高める第一の要件は、フランス在来の詩と断絶することであると彼らは考える。そして、ギリシヤ・ローマの、あるいは現代イタリアの詩人たちを模範とし、彼らの詩型 *ode*, *élégie*, *églogue*, *sonnet* などを取入れるべきである。新しい詩人たるものは、各自の性格と選ぶ題材とにしたがって最も優秀と思われる詩人を模範として選び、その美点をよく観察し、それを呑みこんで十分消化し、自己の血と肉に化せしめる、いわばそれを自己の国語に「接木」しなければならない。<sup>5</sup> 以上が「擁護と顕揚」に見られる *Ronsard* 一派の主張の大要である。

では、彼らはフランス語を育成し、フランス詩を顕揚するため具体的に如何なる方策をとったであろうか。「擁護と顕揚」第2の書第6章以下に、そのために取るべき方策が言語・文体・韻律の三方面にわたって説かれている。

*Du Bellay* はまず第6章の冒頭で次のように言う。「偉大な作品を企てる者にかう忠告したいと念じてゐる。即ち恰もキケロが自己の国語に於いて新語の発見を自負する如く、彼等もギリシヤ人に倣つて、若干のフランス語を新たに見出して、これを採用し、作り上げることを懼れてはならない。而して若しギリシヤ人、ローマ人にして此の点に関して小心翼翼たりしならば、現在彼等が、自己の国語の中に現存するか<sup>6</sup>の豊富をいと高らかに誇示するに足るものがあつただらうか。」(加藤美雄氏訳)。*Du Bellay* は国語を育成するには、まずその語彙を豊富にすることが第一の要件であり、語彙を豊かにするには、その一つの方策として躊躇せず新語を採用しなければならないと考えていたことは、上の引用によっても明らかである。

この考え方は *Ronsard* にあっても同じである。彼にとっては、「わが国語にあつて語彙<sup>7</sup>が豊富であればあるだけ、国語は全きものとなる」のであり、「わが国語が今日あるよりも

4. 古代語を軽視せよと言うのではない。古代の作品を味読し、養分を吸収できるよう十分古代語を学び、しかる後自国語にて作詩するよう勧めているのである。

5. *La Deffence et illustration*, Livre I, Chapitre VII. 接木するは *enter* という語を用いている。

6. *ibid.*, Livre II, Chap. VI. ジョアンシャン・デュ・ベレエ：フランス語の擁護と顕揚，加藤美雄氏訳，白水社。

更に豊富なる語彙と言いまわしを有するのでなければ、国語にて巧みに書くことは頗る困難なわざである。<sup>8</sup>」彼にあっては、更に「詩法要略」において、次のようにやや理論的な説明が見られる。文体 (élocution) とは巧みに選ばれ、厳かで短い金言で飾られた言葉の適切さと華麗さに外ならない。したがって文体は当然言葉の選択を前提とする。選択を可能ならしめるためには、語彙を豊富にするよう努めなければならない。<sup>9</sup> 要するに Du Bellay, Ronsard のいずれにとっても、フランス語は甚だ貧弱であり、貧弱な国語をもってしては偉大な作品を生み出すことはできない。だからまず語彙を豊かにすることから始めなければならない。

では、如何にして語彙を豊かにするのであろうか。その方法として Du Bellay が語っているのは、上に引用した「ギリシヤ人に倣って、若干のフランス語を新たに見出 (inventer) して、これを採用 (adopter) し、作り上げる (composer) ことを懼れてはならない。」という言葉である。Du Bellay はそこではただそれだけ言っているにすぎず、如何にして inventer し、adopter するのか、また如何にして composer するのか、何ら説明が加えられていない。Chamard はこの箇所に注をつけて、「ここで composer が如何なる意味に用いられているかを決定するのは容易ではない。複合語 (mots composés) を作れという意味か、それとも単に créer, forger という一般的な意味で用いられているのか、自分はむしろあとの解釈をとり、inventer, adopter, composer をほとんど synonyme と解し、synonyme 的な語を繰返した点に雄弁調の誇張法を見てとり<sup>10</sup>。」と言っている。とにかく、この3語の意味内容は明らかではない。

Du Bellay はこれ以外に語彙を豊富にする手段として「擁護と顕揚」の中で具体的に述べているのは、フランスの古語を復活させて使用すること、各種の労働者、職人と交わり、彼らの使用する道具や材料の名称、術語などを知ってそれを利用することの二つである。Du Bellay は技術用語の借用に関して次のように言っている。あらゆる種類の労働者、職人、たとえば船頭、鋳物師、画工、彫刻師などと交わり、彼らの造り出す物、材料、道具の名称、彼らの技術面に用いられる語などを知り、そこからみごとな比喻やいきいきした描写を引出すべきである。<sup>11</sup> この言葉からすれば、技術用語の借用は文体の高揚を目的とすることは明らかである。Ronsard 一派にとっては、フランス語の語彙を豊富にするとは、フランス語に豊

7. Ronsard: Abbregé de l'Art Poétique François. Oeuvres complètes, S. T. F. M., Tome 14, p. 29.

8. Ronsard: Préface de la Franciade (1587), Oeuvres complètes de Ronsard par Vaganay, Tome 6, p. 547.

9. Ronsard: op. cit., p. 15.

10. La Deffence et illustration, Livre II, Chap. VI, S. T. F. M., p. 137, note 3.

11. ibid., p. 172.

かな詩語を与えることを意味する。したがって、技術用語の借用も文体高揚の一方策として揚げられていても、事実上語彙を豊かにする手段の一つに他ならない。語彙の問題は密接に文体のそれに結びついているのである。

Du Bellay の挙げている語彙を豊かにする具体的方策は、上述の古語の復活と技術用語の採用の2項目にすぎないが、Ronsard はこれ以外に地方語の採用と彼の所謂 *provignement* とを取上げている。*provignement* は「取り木」を意味する。Ronsard の説明によれば、「いかなる単語であれ、現に使用されているもの、廃れたものを問わず、それらの単語のある形、即ち名詞、動詞、副詞、分詞いずれの形であれ、今日なお残っているものがあれば、それを *analogie* によって成長させ、増殖させるよう心がけねばならない。わが国語は未だ貧弱なるが故に、その増殖をはからねばならない。」<sup>12</sup>このようにすれば、古語も古い幹から新しい若芽を出すであろう。Ronsard が *provignement* と呼ぶ方法は、要するにある語からその派生語 (*dérivés*) を造り出す方法に他ならない。<sup>13</sup>なお *provignement* は、Chamard によれば、*dérivation* のみならず、複合語 (*mots composés*) を造ることをも意味する。<sup>14</sup>

Ronsard 派は派生語と並んでさかんに複合語を使用している。Ronsard は「詩法要略」の中で、「ギリシヤ人、ローマ人に倣って、その語が耳に心地よいことを条件に、大胆に語を *composer* し、民衆が何を言おうと意に介してはならない。」<sup>15</sup>と言っているが、前述の Du Bellay の *composer* 同様、Ronsard がこの語を如何なる意味に用いているか明らかではない。Chamard は、前述のように、「擁護と顕揚」の注においては、*composer* を *créer* の意味に取りたいと言いながら、ここでは複合語を造るという狭い意味に解しているようである。<sup>16</sup>Ronsard の使用した複合語には、たとえば *la toux ronge-poumon* のようになかなか面白い語が見られる。<sup>17</sup>

12. Ronsard: op. cit., p. 33. Ronsard はここでは *provignement* という語を使っていない。Franciade の1587年の *Préface* で、*«Oultre plus si les vieux mots abolis par l'usage ont laissé quelque rejetton, comme les branches des arbres coupez se rajeunissent de nouveaux drageons, tu le pourras provigner, amender et cultiver, ...»* のように *provigner* という動詞を用いている。cf. Brunot: *Histoire de la langue française*, Tome 2, p. 187.

13. Brunot によれば、*«C'est, en somme, à peu près la théorie de la dérivation.»* Brunot: *ibid.*, p. 187.

14. Si longue qu'elle soit déjà, cette étude pourtant resterait incomplète, si l'on ne tenait compte encore d'une autre forme de *provignement*, et si l'on n'ajoutait à l'ample série des mots *dérivés* l'ensemble des *mots composés*. Chamard は、この言葉から、複合語を造ることも *Provignement* に入れているのは明らかである。Ronsard は、Franciade の1587年の *Préface* では、古語に関連して *provigner* を用いているが、小論では *provignement* を広く派生語および Chamard に従って複合語を造る意味に用いる。

15. Ronsard: op. cit., p. 31.

16. Chamard: op. cit., Tome 4, p. 69.

17. Hymne de l'Autonne, vers 206.

古代語に関しては、フランス語の中でギリシヤ語、ラテン語をあやつったと非難された Ronsard にしろ、あるいは Du Bellay にしろ、あれほどギリシヤ・ローマの作家を模倣すべしと説いていながら、ふしぎなことにギリシヤ語・ラテン語から語彙を借用せよとはほとんど言っていない。「擁護と顕揚」においてこれに多少とも関係ある発言としては、「外国語から思想や語を借りて自国語にあてはめることは咎めるべきでなく、大いにほめるべきことである。」<sup>18</sup>と言うのと、今一つフランス語の文中でギリシヤ・ラテンの固有名詞を用いる際には、それをフランス語化して用いるべきであると説いていること<sup>19</sup>の二つである。この古代の固有名詞借用に関する心得を拡張解釈すれば、一般にギリシヤ語・ラテン語から語彙を借用する際には、それをフランス語化して使用すべきであると説いているとも考えられよう。

Ronsard においては、古代語からの語彙の借用を戒める言葉が目につく。彼は、Agrippa d'Aubigné が Les Tragiques の序文で Ronsard の言葉として伝えているところによれば、むやみにラテン・イタリヤの語彙をふりまわし、それらの語彙でなければ *élégant* としないならず者から、良家の子女とも言うべき固有のフランス語を守るべきであると説いている。<sup>20</sup> Ronsard はそれらの連中をにがにがしく思っていたのであろう。

更に Ronsard は「詩法要略」の中でおよそ次のように言っている。フランス語にそれに匹敵する語がある限り、愚かにもローマ人からむやみに奇妙な語を引出した先人たちのようにラテン語から語彙を借りることのないよう注意したい。ただし、既に受け入れられ、使用されている語は斥けるには及ばない<sup>21</sup>と。しかし Ronsard のこの注意には、フランス語にそれに匹敵する語がある限りという但書がついている。この但書は当然、フランス語にもし匹敵する語がない場合には、借用が許されると解すべきである。したがって、彼らの主張する新語使用の中には、古代語その他外国語からの借用語も含まれていると解すべきであろう。

事実、彼らはギリシヤ語、ラテン語、イタリヤ語、スペイン語などからの借用語を使用している。ただし、それらの借用語を未熟な形のまま使用することを禁じていた。それは、Du Bellay の説く古代の固有名詞使用の際の注意から考えても明らかである。また新語の使用一般に関する注意、控え目、類推、聴覚判断をもってすべきであるという注意も当然適用されるものと思われる。要するに、Du Bellay, Ronsard の説くフランス語の語彙を豊富に

18. Deffence et illustration, Livre I, Chap, VIII.

19. *ibid.*, Livre II, Chap. VI. フランス語の文中で古代の固有名詞をそのままの形で用いるのは、ラテン語の文中にフランス語の固有名詞を用いるのと同様、滑稽なことである。ローマ人も Herakles を Hercules とラテン語化している。フランス文においては、よろしく Hercule, Thésée, Ulysse と言うべきである。

20. Agrippa d'Aubigné: Les Tragiques, S. T. F. M., Tome 1, p. 7.

21. Ronsard: *op. cit.*, p. 31.

する具体的方策は、古語の復活使用、専門技術用語の導入、地方語の採用、派生語・複合語の使用、それに古代語、外国語からの語彙の借用をも加えれば、5項目となる。

次に、Du Bellay が「擁護と顕揚」第2の書第9章で述べているいわば文体の高揚に関する方策にもふれなければならない。前述のように、語彙を豊富にすることと文体の高揚とは相互に密接に関連する問題であり、小論においてもそれら両面にふれるからである。

- 1) 不定法を名詞的に用いること。(後に取上げる項目については、ただ表題を掲げるにとどめる。)
- 2) 形容詞を名詞的に用いること。
- 3) 形容詞を副詞的に用いること。
- 4) 本来不定法を伴わない動詞あるいは分詞を不定法と共に用いること。 *craignant de mourir, se hatant d'y aller* の代りに *tremblant de mourir, volant d'y aller* などと言う場合がそれである。
- 5) 換喩法 (*antonomase*) などを用いること。
- 6) *épithètes* について。フランス詩にあっては、*épithètes* は大部分生彩に乏しく、効果のない、不適切なものである。だから *la flamme devorante, les soucis mordans* のように、それなくしては言わんとすることが表現できないという用い方でなければならない。
- 7) 職人の技術用語の採用。

以上、Ronsard 一派が掲げたフランス語の語彙を豊かにし、文体を高揚する方策を概観したが、本論では概ねこれら方策の各項目について、恋愛詩を中心にして Ronsard の用語を調べることにする。

## II. Ronsard のテキストの問題

Ronsard の用語の検討に入るに先立ち、彼のテキストの問題にふれておかなければならない。それには二つの理由がある。第一の理由は、彼の作品には、後に加えられた訂正の箇所が非常に多いことである。彼は死の直前に至るまで、既に発表した自己の作品にたえず筆を入れつづけて来た。これは自己の芸術に忠実ないかなる詩人にも見られることであって、Ronsard に限ったことではない。しかし彼の場合は、1語や2語の入替え程度ではなく、ソネのように短い詩でさえ、その数行が改められているのが再々見られ、同じ箇所を何回か直している場合も珍しくない。

Feugère によれば、「恋愛詩集」に収められている183篇のソネのうち、全く訂正を受け



ていないものは僅か3篇、しかもそのうちの2篇<sup>1</sup>は翌年の再版で削除されている。だから最後まで訂正を受けなかったのは156番のソネ唯1篇である。残りのソネ180篇の訂正箇所を調べると、平均各詩の2行につき1行強の割合即ち約55%の訂正を受けていると言う<sup>2</sup>。だから、序論で述べたように、Ronsardの加えた訂正をたどって彼の発展をとらえようとする試みが出て来るのである。

第二の理由は、生前 Ronsard は幾度か自らの手で全集を編んでいることである。彼は1560年に自己の作品を集めて綜合作品集を編んだが、これを第一回として、彼の生存中に版を改めること6回、死後遺言執行人によって、彼の書き残した指示に基づいて出されたものを合わせると、彼の手になる綜合作品集が7回<sup>3</sup>出たことになる。だから1560年以前の作品には、少なくとも7回訂正の機会があったことになる。したがって、Ronsardの作品集を編むに際して、どの版を底本にするかが編者にとって大きな問題となる。

一般の常識では、作者生前最後の版は作者の到達点を示すものとして、それに拠るのが最良と考えられる。しかし Ronsard の場合には、Pasquier のように、Ronsard の精神力が晩年衰えを見せ、訂正が改悪になっている場合が多いとの考えが一部<sup>4</sup>にある。逆に、1560年の綜合作品集第一版にはそうした心配はなく、Odes に関する限り最も完全な形で示されていて、抒情詩人としての Ronsard の頂点を示すものであるとの考え方もある<sup>5</sup>。また1578年の第5版においては、訂正箇所が著しく増加し、この版に対して Ronsard は今までにない努力を傾けている事実をも考慮しなければならない。

19世紀になって Ronsard が復活して以来、彼の全集は6種類出ている。年代順に列挙すると、

- a) Blanchemain 編の8冊本(1857—1867)。1560年の綜合作品集第1版<sup>6</sup>を底本にしている。
- b) Marty-Laveaux 編の6冊本(1887—1893)。Ronsard 生前最後の1584年版の綜合作品集<sup>7</sup>に拠っている。

---

1. ソネ61, 157。

2. A. Feugère: Le goût de Ronsard, d'après les variantes des «Amours» de 1552. (Mélanges offerts à Edmond Huguet, p. 148-160)

3. Ronsard の手になる綜合作品集は、1560年, 1567年, 1571年, 1572年, 1578年, 1584年, 1587年の7回出ている。

4. cf. Laumonier: Ronsard poète lyrique, p. 271.

5. Ronsard: Oeuvres complètes, par Laumonier, S. T. F. M., Tome I, Introduction 参照。

6. Oeuvres complètes de P. de Ronsard, Nouvelle édition, publiée sur les textes les plus anciens, avec les variantes et des notes par M. Prosper Blanchemain, 8 vol., P. Jannet, 1857-67. この全集はエルゼヴィル叢書に組み入れられている。

7. Oeuvres de P. de Ronsard, avec une Notice biographique et des Notes par Ch. Marty-Laveaux, Le-

c) b) の Marty-Laveaux 版を Laumonier が校訂、増補し、批評版として出したもの (1914—1919)<sup>8</sup>。したがって、1584年版に拠っている。

d) Hugues Vaganay 編の7冊本 (1923—1924)。1578年版を底本にしている<sup>9</sup>。

e) Gustave Cohen 編の2冊本 (1938)。1584年版を底本にしている<sup>10</sup>。

f) Laumonier の原典批評版 (1914— )。この全集は各作品をそれが最初に発表された版に拠り、発表の年代順に配列している<sup>11</sup>。

これらの全集は、あるいは1560年の第一回綜合作品集を底本にし、あるいは1578年の第5回綜合作品集を、あるいは生前最後の1584年版を底本にしている。Laumonier によれば<sup>12</sup>、Ronsard の精神機能が晩年衰えていたとは考えられず、しかも Ronsard は如何に苦心して最後の作品集を編んだかは人びとの伝えるところであり、常識としても1584年版に拠るのが最も Ronsard に忠実であるとも言える。詩の愛好者が Ronsard に接するには、初期の未熟さを切り捨てたこの版によるのがよい。しかし Laumonier は単なる詩の愛好者ではない。文学研究者としての彼は、1584年版に拠る全集の校訂だけでは満足せず、f) の原典批評版全集編纂という困難な仕事に取りかかったのである。

Laumonier は言う<sup>13</sup>。1584年版あるいは1560年版の綜合作品集では、それらの時期における Ronsard, 即ち静的な Ronsard をとらえるのみであって、動的に彼をとらえることはできない。一作家の全作品をあたかもある時期に全部が同時に制作されたかのように一つのブロックとしてそれに接する立場からは、「ただ信用の置けない、独断的な、印象的な評価が生れるにすぎない」<sup>14</sup>。学問として文学を研究する者は、各作品、各作家をその発生において見、その発展を最後の到達点に至るまで段階的に検討しなければならない。この原則はいずれの場合にも適用さるべきであるが、一大変革期である文芸復興期、新しい芸術上の表現力が獲得され、それが急速の進歩をとげる時代に生きた作家の場合には尚更である。この要

merre, 6 vol., 1887-93. これは Marty-Laveaux 編の La Pléiade française 叢書 (Du Bellay 全集 2 vol., Baif 5 vol., Belleau 2 vol., Jodelle 2 vol., Dorat と Pontus de Tyard で 1 vol., Ronsard 6 vol., La Langue de la Pléiade 2 vol.) の一部である。

8. Oeuvres complètes de P. de Ronsard. Nouvelle édition, révisée, augmentée et annotée par Paul Laumonier, 8 vol., Lemerre, 1914-19.

9. Oeuvres complètes de Ronsard. Texte de 1578, publié avec compléments, tables et glossaire par Hugues Vaganay, Garnier, 7 vol., 1923-24.

10. Ronsard: Oeuvres complètes. Texte établi et annoté par Gustave Cohen, N. R. F., 2 vol., 1938.

11. Pierre de Ronsard: Oeuvres complètes. Edition critique avec introduction et commentaire par Paul Laumonier. Société des Textes Français Modernes, 1914-

12. Ronsard: Oeuvres complètes, S. T. F. M., Tome I, Introduction 参照。

13. ibid.

14. ibid.

求を満たしうるのは、f) の全集に他ならない。初版を底本とする本文はその作品の発生時の姿を示し、Variantes はその発展を示す。また各作品をジャンル別に分類するのではなく、発表の年代順に配列することによって、その作家の発展をとらえうると言うのである。

序論においてふれたように、Ronsard は1553年頃から急に自由な、率直な表現に変わり、この傾向が年と共に強くなって行く。綜合作品集においては、この転機を経たあとの立場で以前の作に仮借なき筆を入れているのであるから、初期の「Odes 集」、「恋愛詩集」はかなり初めと異なった姿を呈して来て、Pléiade 派の首領として改革に突き進んだ Ronsard の姿が見失われる可能性がある。Ronsard がフランス語の表現力を豊かにするため強行した方策にしても、後日の訂正でかなり削り取られている。だから、これらの方策の実態を明らかにしようとするならば、Laumonier の原典批評版による他ないのである。この小論における Ronsard の用語の調査も Laumonier 版によることは言うまでもない。

Ronsard のテキストの問題に関連して、いま一度、Ronsard の語彙を専門に扱った Mellerio の *Lexique de Ronsard* と Marty-Laveaux の *La Langue de la Pléiade* の二書にふれておかねばならない。Mellerio の *Lexique de Ronsard* は、今日の読者から見て難解と思われる約1630語を A, B, C 順に配列し、その意味と各語に一ないし数個の例文を掲げている。この *Lexique* のまず指摘すべき欠陥は、Chamard も指摘している如く、この書の<sup>15</sup> 抛って立つ土台がゆらいでいることである。エルゼヴィル叢書の一卷をなすこの *Lexique* は、同じく同叢書中の Blanchemain 編の Ronsard 全集、即ち前述のように、1560年の第一回綜合作品集を底本とする Ronsard 全集に抛っているのである。以前の作品に相当筆を入れた第一回綜合作品集を底本とする Ronsard 全集に抛る限り、Mellerio の *Lexique* には、1560年以後の作品に関することは今は問わないにしても、少なくとも Ronsard の初期の語彙が相当数もれている可能性がある。事実もれているのであって、1・2例をあげると、

Ces deux yeulx bruns, deux flambeaulx de ma vie,

Dessus les miens fouldroyans leur clarté,

*Ont esclavé ma jeune liberté.* (Les Amours, XXV)

この esclaver という動詞が Mellerio の *Lexique* に出ていないのである。Laumonier はこの語に注をつけて、esclaver は「Ronsard の造語。Muret は1553年この語に《captivé, asservi》と訳語をつける必要を感じたのだ。同年 Magny は恋愛詩集でこの語を用い、ついで1554年 Tahureau は *Sonnets, Odes et Mignardises* において、1555年には Baïf が *Francine* の中で用いた。」<sup>16</sup> と、この語が Ronsard の造語である所以を強調している。とこ

15. Chamard: *Histoire de la Pléiade*, Tome 4, p. 53.

ろが Ronsard は1560年に *Ont esclave* を *Ont arrêté* と改め、*esclaver* を除いている。Ronsard における *esclaver* の今一つの用例……*N'ont esclave ma libre affection* (Les Amours 1553, XLIX) も1560年に *N'ont asservy* と訂正され、*esclaver* が削られている。Laumonier があれほど強調し、しかも現代の辞書には出ていない *esclaver* がどうして Mellerio の *Lexique* に見出されないのであろうか。その理由は、この語の意味はおのずと明らかだとして Mellerio が意識して省いたのでなければ、1560年におけるこの語の削除以外には考えられない。

今一つ例をあげると、*Se desoyfver d'une amere liqueur* (Les Amours, XXII) は、1567年に *Boire tousjours d'une amere liqueur* と改められている。*se desoyfver* が削られたのは1567年であるから、この語は当然 Mellerio に出ている筈であるが、それが出ていない。念のため、Mellerio の拠った Blanchemain 版 Ronsard 全集を調べたところ、そこでは既に *boire* に改められている。Blanchemain 版は1560年版綜合作品集を底本にしたと称しながら、同版を忠実に再現せず、このように他の版の要素を混入しているのである。以上の1・2の例によっても、Mellerio の *Lexique de Ronsard* は初版を底本とする Laumonier の原典批評版によって書き直されねばならない理由が理解されよう。

同様に Marty-Laveaux の *La Langue de la Pléiade* も Laumonier の原典批評版によって書き直されねばならない。この書は Marty-Laveaux 編の *La Pléiade Française* 叢書20巻中の2巻を占めていて、同叢書中の Ronsard 全集に拠っている。この Ronsard 全集は1584年版の綜合作品集を底本にしているから、同全集においては、訂正により削られた語は、1560年版に拠る Blanchemain 版全集の場合より遙かに多い。したがって *La Langue de la Pléiade* においても、Ronsard が初期に用いた語の脱落の可能性は多いのである。

脱落の可能性——上述のように、依拠するテキストの関係でその語が脱落したのか、著書が不用として意識的に除いたものか断定し難い——の問題に関連して、*Lexique de Ronsard*, *La Langue de la Pléiade* のいずれにおいても、収録されている語の選択基準が曖昧であることを指摘したい。殊に *La Langue de la Pléiade* の場合には、収録語数も多く、形式的に整っているだけに、逆に選択基準の曖昧さが目につく。同書には、たとえば語尾 *ment* の副詞144語が列挙されているが、この144語が如何なる基準で選ばれたのであろうか。必ずしも今日から見て特異な語のみが選ばれているとは思えない。*doucement*, *incessamment*, *splendidement* などが出ているのに、*journellement*, *meurtrierement*, *mielleusement* が出ていない。

---

16. Ronsard: Oeuvres complètes, S. T. F. M., Tome 4, p. 28, note.

選択基準が曖昧であるばかりでなく、一旦選択され、収録されている語にあっても、その語について Pléiade 派各詩人の用例をあたっているとは思われない。名詞 *mammelette* を例にとれば、同書には Belleau の用例が2例出ているだけで、Ronsard のそれはあがない。Ronsard には、少なくとも「続恋愛詩集」に *sus ses mammelettes* という用例が見られる。このようにある語についてある作家の用例が出ていなければ、読者にその作家はその語を用いていないという誤解を与えかねない。

なおまた、ある語についてたとえば Ronsard の用例が出ている場合でも、そこに出ている用例は必ずしも Ronsard のその語に関する用例を尽しているとは限らない。以上の概観によっても、Ronsard の語彙を扱った Mellerio, Marty-Laveaux の両書は今日から見れば種々欠陥を有していることは明らかである。

### III. Ronsard の 3 つの 恋愛詩集について

「恋愛詩集」<sup>1</sup>は1552年10月に出版された。1549年 Du Bellay が一派の宣言書「フランス語の擁護と顕揚」と同時にソネ集《Olive》とオード集《Les vers lyriques》とを発表したのにつづいて、Ronsard は翌1550年に新しい詩の進路を示すべき「オード4部集」<sup>2</sup>を世に問うた。「恋愛詩集」はこれにつづいて Ronsard の第2番目の詩集である。彼はこの詩集で、Clément Marot, Mellin de Saint-Gelais, Du Bellay, Pontus de Tyard などによって既に試みられた Petrarca 風のソネに手をつけ、Cassandre という女性をうたっている。これは実在の女性で Cassandre Salviati といい、彼女の父はメディチ家につながるフィレンツェの名家の出で、16世紀初頭からフランスに移り住み、王室銀行業者の一人になっていた。Ronsard は1545年4月21日、Blois における王室の舞踏会で彼女に出会った。翌1546年彼女は Jehan Peigné, seigneur de Pray と結婚、かくて彼女は Ronsard にとって、Petrarca に対す Laura と同じ立場になった。

「恋愛詩集」はいつ制作されたのであろうか。一部に、これらのソネはすべて1550年の「オード4部集」出版後に、Du Bellay の「オリーブ」の成功に刺戟され、1551年から52年の間に郷里 Vendômois で制作されたと主張する人がいるが、既に1547年から50年の間に手をつけられていたとする Laumonier の説が一般に受け入れられている。

翌1553年5月、Ronsard は「恋愛詩集」の第2版を出した。この版には、前述のように、

1. Les Amours de P. de Ronsard Vandomoys. Ensemble Le cinquième de ses Odes, 1552. 「恋愛詩集」と「オード第5部」は一緒に出版されたのである。

2. Les Quatre premiers livres des Odes de Pierre de Ronsard, Vandomois. Ensemble son Bocage.

当時の代表的なユマニスト Muret<sup>3</sup> の注がつけられ、晦渋な語や表現、古代神話などが説明され、時に source も指摘されている。

「続恋愛詩集」は1555年の8月頃出版された。これは Bourgueil の田舎娘 Marie をうたったものである。1555年の春、Ronsard は友人と旅に出た際、Bourgueil で15歳のかわいい娘と知り合い、彼女を愛するようになった。彼女に初めて出会ったのは1555年4月20日である。4月20日に会い、詩集が出版されたのが8月頃<sup>4</sup>であるから、Marie をうたったソネが制作されたのは、1555年の4月末から7月にかけての頃と考えられている。「恋愛詩集」と「続恋愛詩集」との間には僅か3年ほどの隔りがあるにすぎないが、その間には所謂 Ronsard の転機が介在している。

フランス語、フランス詩を顕揚しようとの意気に燃え、血気にはやる Ronsard の処女詩集「オード4部集」には、彼らの宣言書「フランス語の擁護と顕揚」以上に戦闘的で傲慢な序文がつけられている。「御身が私を最初のフランス抒情詩人と呼ぶ時、……御身は私への当然のせめを果したことになるであろう。」<sup>5</sup>とか、「わが国の作家たちを模倣することはまことに厭わしく、そのため彼らから離れ、彼らと別の文体、意味、作品を求め、かくもひどい誤りと何ら共通点を持たないよう願った。」<sup>6</sup>と大した自信のほどを示している。彼は Dorat 門下たるにふさわしく Pindaros を模倣し、この集に収められている94篇の odes のうち13篇が Pindaros 風 odes で、他はおおむね Horatius 風の odes である。彼は Pindaros 風の odes によって、彼以前には見られなかった本格的な高度の詩の姿を示し、詩に力と荘重さをもたらしたが、彼は Pindaros のオード構成を盲目的に模倣し、大胆にも Strophe, Antistrophe, Epode の三部詩節の形式を採用した。この合唱形式はフランス詩においては何らの存在理由がなく、単なる盲目的な模倣にすぎない。そのうえ古代神話の濫用、Pindaros 風の表現と比喻、新奇な造語、晦渋な表現、これらは一般の人びとには近づき難いものであった。後半の Horatius 風 odes にも同様の欠点が見られはするが、Horatius のやや哀愁を帯びた快樂主義的な面などは殊に Ronsard の気質に合致することもあって、Horatius のテーマ、技巧を模倣しつつも、それをわが物とし、自己の持味を出している。要するに彼はこの詩集において、多様な odes をフランスに移植したのである。

この詩集が出るや、新しい詩に味方する人びとは熱狂的な称讃を捧げたが、Ronsard がこの

3. Marc-Antoine Muret (1526-1585)

4. cf. Chamard: Histoire de la Pléiade, Tome 2, p. 152. Laumonier は早くて1555年の7月、おそくても9月と言う。(Ronsard: Oeuvres complètes, S. T. F. M., Tome I, p. 43)

5. Ronsard: Oeuvres complètes, S. T. F. M., Tome I, p. 43.

6. ibid., p. 45.

7. Lebègue: Ronsard, l'homme et l'œuvre, p. 26.

詩集につけた傲慢な序文と彼の大胆な試みは旧派の詩人たちを刺戟し、彼らは Ronsard 攻撃に立ち上がる。中でも、Mellin de Saint-Gelais は Henri 2世の面前で Ronsard の ode の最も晦渋な部分を朗読し、宮廷の物笑いに供した。幸い王妹 Marguerite と彼女の尚書である Michel de l'Hospital は新しい詩に深い理解を示し、Ronsard を強力に擁護した。ついに Michel de l'Hospital の努力によって、Ronsard と老詩人 Mellin de Saint-Gelais との間に和解<sup>8</sup>が成立、Ronsard もある程度自分の行き過ぎに反省を加えたのである。

「恋愛詩集」も、Petrarca 的な常套手法以外に、「オード集」の場合と同じく、古代神話や新造語の使用、学殖の披瀝などで晦渋なものとなっている。それで翌53年の再版には、著名なユマニスト Muret の注釈がつけられたことは前にふれたとおりである。しかし、この「恋愛詩集」は「オード4部集」以上の成功をおさめ、新しい詩人たちの首領として Ronsard の声価が定まったのである。

ところが、1553年に匿名で出した「遊楽集」<sup>9</sup>に至って、突如として日常的なだけで調子に移っている。Catullus ならびに現代の Catullus 風作家を学んだこれら作品のいくつかは、くだけすぎて猥褻に墮している。これらの作品はユマニストの遊び、気晴らしの類いにすぎないかも知れないが、これでは一つの行き過ぎから他の行き過ぎに方向転換したにすぎない。しかし以後の作品においては、これら両方の行き過ぎから脱し、1553年の「恋愛詩集」の再版に appendice としてつけ加えられた有名な《Ode à Cassandre》あたりから中庸の道を見出し、単純で率直な方向に進んで行く。どうしてこのような変化が起ったのであろうか。前述の旧派との和解、それに加えて「ギリシヤ詞華集」<sup>10</sup>の影響、さらに1554年に Henri Estienne によってラテン訳を付して出された「アナクレオン詩集」<sup>11</sup>の影響などによって、今まで余りにも本格的な詩を目指して自分の持前をためていた Ronsard は、持前の傾向に戻ったのだと考えられている。古代ギリシヤにおいても、生きる喜び、愛し、飲む喜びをうたった単純で明瞭な、自然でくだけた詩があったのだから、これに倣って自分たちも自由に<sup>12</sup>のびのびとうたったとしても、ユマニストの伝統に外れるものではないと考えたのであろう。

8. Mellin de Saint-Gelais が王の前で Ronsard の作を物笑いに供したのは、1550年の5、6月の頃であり、和解が成立したのは1553年1月の始めである。

9. Livret de folastries, plus quelques Epigrammes grecs: et des Dithyrambes chantés au Bouc de E. Jodelle, Poète Tragiq, 1553.

10. 当時知られていたのは、Planude (v. 1260-1310) 編の Anthologie grecque である。この Anthologie は Lascaris によって1494年フィレンツェで出版された。1531年にはパリで、1549年にはバーゼルで出された。

11. 大部分はアナクレオン模倣詩である。Estienne は1549年イタリヤ旅行中にこの詩集を見つけ、1554年の出版以前に身近の者にそれらの詩を伝えていた。Ronsard もそれを知っていたものと考えられている。Chamard: Histoire de la Pléiade, Tome 2, p. 56 および Nollac: Ronsard et l'Humanisme, p. 108.

12. cf. Chamard: Histoire de la Pléiade, Tome 2, p. 57.

1554年の「叢林集」<sup>13</sup>、「雑集」<sup>14</sup>ではいずれもアナクレオン、「ギリシヤ詞華集」、ネオ・ラテン詩人の Marulle<sup>15</sup>、Navagero などの影響が優位を占め、詩形も彼の命名にかかる odelette、あるいは chanson など軽やかなものが多くなり、彼の個性がにじみ出ている。フランス詩の革新を思いとどまったわけではないが、外国語、古語、新造語などの使用が慎重になり、晦渋さを避けようと努めたと言われている。はたしてどうであるか、その実態を調べるのが本論の目的である。1555年の「オード4部集」第3版においては、細心な訂正が行われていて、Vianey がこの点に注目し、訂正箇所を検討することによって、Ronsard が Malherbe の先駆をなしたことを実証的に明らかにしようと努めていることは、前述のとおりである。

「エレーヌへのソネ」<sup>16</sup>は1578年の綜合作品集第5版に初めて発表された。これらのソネが実際に制作されたのはいつ頃であるかは後にふれることにして、「続恋愛詩集」と「エレーヌへのソネ」との間には約20年の歳月が介在している。Ronsard は1555年「続恋愛詩集」につづいて、「讃歌集」<sup>17</sup>を出し、翌1556年には「新続恋愛詩集」<sup>18</sup>と「讃歌集第2部」<sup>19</sup>を出して、1554年から56年にかけては、Ronsard の最もみり豊かな、個性的な優れた作品が生み出された時代である。「新続恋愛詩集」は「続恋愛詩集」と同じく、Marie を対象にしたものではあるが、ソネよりは chansons などの数の方が多く、この小論での考察から除外する。

「讃歌集」は、国王はじめ有力者たちへの讃歌と、空、永遠、哲学などへの哲学的あるいは科学的な讃歌とに分けられる。Ronsard は哲学的な主題を扱った詩に対する好みをかねてから表明していたが、いよいよその主題に手をつけたのである。Laumonier が指摘しているように<sup>20</sup>、単純で率直な詩を追求する一方、高級な詩を放棄したわけではなく、くだけた恋愛詩と高級な哲学的な詩のテーマとを同時に追求している。1559年には、Ronsard は「雑集第2部」<sup>21</sup>を出し、前年に死亡した Mellin de Saint-Gelais のあとを受けて、王室顧問兼司祭に任ぜられた。

13. Le Bocage de P. de Ronsard, 1554.

14. Les Meslanges de P. de Ronsard, 1555. 日付は1555年になっているが、Laumonier によれば、1554年11月に出された。

15. Maroulos (v. 1453-1500), ギリシヤ出身のラテン詩人。Epigrammata (1493), Hymni naturales (1497) などの作がある。Navagero (1483-1529), イタリアのラテン詩人。

16. Sonets pour Helene

17. Les Hymnes de P. de Ronsard, Vendomois, 1555.

18. Nouvelle Continuation des Amours de P. de Ronsard, Vendomois, 1556.

19. Le Second Livre des Hymnes de P. de Ronsard Vendomois, 1556.

20. cf. Ronsard: Oeuvres complètes, S. T. F. M., Tome 7, Introduction.

21. Le Second Livre des Meslanges de Pierre de Ronsard Vendomois, 1559.



翌1560年は Ronsard の生涯において特筆すべき年である。Ronsard はこの年、前述したように、今までに発表した数多くの作品をまとめ、意に満たない所には筆を入れ、新しい作品をもつけ加えて「綜合作品集第1版」<sup>22</sup>を出した。この作品集は4巻に分れ、genre 別に分類されていて、第1巻には恋愛詩、第2巻には Odes、第3巻には Poèmes の表題のもとに種々の genres の詩、第4巻には讃歌が収められている。Lebègue 教授が言うように<sup>23</sup>、Ronsard は劇詩には手をつけず、長篇叙事詩 La Franciade は未だ完成していなかったが、Du Bellay が「擁護と顕揚」に掲げたプログラムはこの綜合作品集において大半実現されている。驚くべき豊饒さと言わなければならない。

また、この1560年は多端な年であった。1559年 Henri 2世の不慮の死により、François 2世が15歳の若さで即位したが、病弱の王は翌1560年在位僅か1年余りにて死去、Charles 9世が10歳に足らずして即位。かかる状況下において、旧教・新教両派の争いとその熾烈さを加えて来る。Ronsard は嘗て福音主義に対して共感を持ち、カトリック教会の腐敗に対しては教会内部の強力な改革を望んでいたが、あくまでカトリックの立場に立つ彼には、新教徒こそ国内政治に混乱をもたらし、同胞相はむ内戦をひき起して愛するフランスの国土を荒らし、農民に塗炭の苦しみを味わわせ、あまつさえ新教国と結び、フランスを彼らの餌食に供しようとしているものに思われた。彼はこの惨禍を見て、筆をひっさげて渦中に飛び込み、平和を呼びかけた。これは、詩人とは人類の指導者なりとする彼の詩人観から当然のことであろう。1562年「若きシャルル9世王の教育」<sup>24</sup>において、幼王に対して王者たるには徳が何よりも大切な所以を説き、つづいて「当代の惨禍について王母に説く」<sup>25</sup>「ふたたび当代の惨禍について王母に説く」<sup>26</sup>、「フランス国民への訓戒」<sup>27</sup>を出した。これらは大きな反響を呼び、新教側から猛烈な非難、攻撃が彼に集中した。翌1563年彼は「ジュネーヴのさる宣教師、牧師たちの罵詈雑言に答う」<sup>28</sup>を書いてそれに答えた。これら一連の論争詩は、古代の如何なる作の模倣でもなく、彼の真情のほどばしりであって、Chamard の言うとおりに<sup>29</sup>、諷刺、

22. Les Oeuvres de P. de Ronsard gentilhomme Vandomois, 1560.

23. Lebègue: op. cit., p. 97.

24. Institution pour l'Adolescence du Roy treschrestien Charles neufviesme de ce nom, par P. de Ronsard Vandomois, 1562.

25. Discours des Miseres de ce Temps, à la Royne mere du Roy, par P. de Ronsard Vandomois, 1562.

26. Continuation du Discours des Miseres de ce Temps, à la Royne, par P. de Ronsard Vandomois, 1562.

27. Remonstrance au peuple de France, 1563. 匿名で出された。Laumonierによれば、1562年12月の初旬に書かれたものである。

28. Responce de P. de Ronsard gentilhomme Vandomois, aux Injures et Calomnies, de je ne sçay quels Predicans et Ministres de Geneve, 1563.

29. Chamard: op. cit., Tome 2, p. 394.

哀歌、祈り、雄弁、抒情が渾然と融合した傑作である。

1565年には、彼は「フランス詩法要略」<sup>30</sup>と「哀歌、仮面舞踏歌、牧歌集」<sup>31</sup>を出した。Charles 9世の彼に対する信任も厚く、1564年には、彼に Bellozane の僧院長の職禄が与えられ、ひきつづきいくつかの小修道院長の職禄が与えられた。彼は以前から、フランス Valois 王家の祖先を Hector の息子と想像されたトロイ人 Francus に求め、Valois 王家を讃える叙事詩を書くのを念願とし、この作に専念できるよう十分な保護を求めつづけて来たが、今や念願がかなえられたのだ。かくて彼は長篇叙事詩「ラ・フランシアド」にとりかかり、1572年 Saint-Barthélemy の直後に最初の4部を出した<sup>32</sup>。この作は失敗であった。宗教戦争の渦中において、Francus の神話的な旅に興味を持つには、現実は余りにも切迫していたのであろう<sup>33</sup>。

Ronsard は、1568年から69年にかけて、禄地 Saint-Cosme に籠って病を養いながら「ラ・フランシアド」の執筆に当たっていたが、Saint-Cosme から宮廷に帰るや、宮廷の好みは Desportes の Petrarca 風の詩に傾いているのを見出した。彼は再び恋愛詩を書かなければ、時流に見離される恐れがあった。そこで彼は王母 Catherine de Médicis の侍女 Hélène de Surgères をうたい、Desportes に対抗しようとした。これが「エレヌへのソネ」である。前述のように、この作は1578年の綜合作品集第5版に初めて発表されたが、制作はこれより早く、Laumonier によれば<sup>34</sup>、1570年頃から74年の間であろうと言う。

その後 Ronsard は次第に腐敗した宮廷の空気になじめなくなり、禄地に籠ることが多くなる。Charles 9世の死(1574)後は、若い Desportes がますます勢力を伸ばし、一方 Ronsard の健康は衰えを見せて来る。1583年の秋をパリで綜合作品集第6版の校正に過したが、ために健康を害し、禄地を転々と移って療養に努めたが、1585年12月27日の夜、最後の詩の口授を終って、その生涯をとじた<sup>35</sup>。

30. Abbregé de l'Art poétique François, à Alphonse Delbene Abbé de Hautecombe en Savoye, 1565.

31. Elegies, Mascarades et Bergerie, à la Majesté de la Roynne d'Angleterre, 1565.

32. Les Quatre premiers livres de La Franciade, par Pierre de Ronsard, gentilhomme Vandomois, 1572.

33. Lebègue: op. cit., p. 103. Ronsard は王の要求でこの詩に Alexandrin を用いず、10音綴詩句を用いたことも失敗の原因の一つにぞえられている。

34. Ronsard: Oeuvres complètes, S. T. F. M., Tome 17, Introduction XV.

35. 翌1586年2月24日、パリのボンクール学院で盛大な葬儀がとり行われ、同日 Les Derniers vers de P. de Ronsard が出版された。

## 第 2 章

### I. 恋 愛 詩 集 の 用 語

「恋愛詩集」は巻頭のソネ《Voeu》を含めて、10音綴詩句のソネ183篇、巻末の *chanson*, *amourette* 各1篇から成っている。「続恋愛詩集」はソネ70篇（12音綴詩句のもの58篇、10音綴詩句のもの12篇）と *odes* など12篇から成っており、「エレヌへのソネ」は2部に分け、第1の書は12音綴詩句のソネ57篇、*chanson* 2篇、*madrigal* 1篇、第2の書はソネ54篇（12音綴詩句のもの53篇、10音綴詩句のもの1篇）と *Stances de la fontaine d'Helene* とから成っている。

これら3詩集の使用語を調査した結果、各詩集の総使用語数は次表のとおりである<sup>1</sup>。

恋愛詩集——2582語

続恋愛詩集——1556語

エレヌへのソネ——2001語

前述のように、17世紀の Ronsard に対する主たる攻撃目標の一つは、Ronsard の用語にあった。彼の用語に対する17世紀の非難が果して正当であったかどうか、これはきわめて困難で解決不可能な、あるいはどうしても解釈のつく全く無意味な問題であるかも知れない。しかしこの問題を検討するための緒でもえられればと、まず上掲の3恋愛詩集の使用語のうち、17世紀の眼から見て、非難に価するような奇妙な語がどれほど含まれているかを調べてみることにする。では、ある語が17世紀の眼に奇妙に写るか否かを何を基準に判断すればよいか。試みにその判断の基準として、1694年に出された Académie の辞書の初版<sup>2</sup>を取上げてみたい。Académie の辞書の初版はとかくの非難があるにしても、古語、外来語、俗語、卑語を排してフランス語を純化し、*bel usage* の確立を目指すものである限り<sup>3</sup>、そう途方もない語が収められているとは思えない。ある語が Académie の辞書の初版に出ておれば、その語は17世紀においていわば市民権を与えられていたと考えて差支なかろう。したがって、Ronsard の用語の中で、Académie の初版に出ている語は一応17世紀の眼にさほど奇妙に写らなかったと考えることができよう。

1. Mots-outils は計算に入れていない。

2. Le Dictionnaire de l'Académie française, dédié au Roy, 1694. Académie の辞書は語彙が少ないと非難されたが、その点がかえって筆者にとって好都合である。

3. cf. Georges Matoré: Histoire des dictionnaires français, Larousse.

ところで、Académie の辞書には固有名詞が出ていないから、各詩集の上掲の使用語数から固有名詞を除かねばならない。「恋愛詩集」では162の、「続恋愛詩集」では93の、「エレヌへのソネ」においては109の固有名詞が用いられている。各詩集の総使用語数から固有名詞の数を差引いた普通語彙の使用語数は、

恋愛詩集	——2420語
続恋愛詩集	——1463語
エレヌへのソネ	——1892語である。

これら各詩集の普通語彙の使用語のうち、Académie の辞書の初版に出ていない語の数は次の表のとおりである。

恋愛詩集	——252語
続恋愛詩集	——84語
エレヌへのソネ	——91語

逆に各詩集の Académie の辞書に出ている語は、

恋愛詩集	——2168語
続恋愛詩集	——1379語
エレヌへのソネ	——1801語となる。

要するに、「恋愛詩集」においては、2168語が Académie に出ているのに対して252語が出ていないのであり、「続恋愛詩集」では1379語対84語、「エレヌへのソネ」では1801語対91語の関係になる。前述の論法で行くと、Académie に出ていない語、即ち「恋愛詩集」では252語、「続恋愛詩集」では84語、「エレヌへのソネ」では91語がそれぞれ、17世紀の眼に、奇異の感を与えうる可能性を有することになる。しかし、たとえ「恋愛詩集」において、奇異の感を与える可能性のない語2168語に対し可能性のある語252語が用いられていることが分ったにしても、それだけでは可能性のある語の使用が多いとも、少ないとも判断することができない。とはいえ、これら252語の具体的内容および使用の実態が明らかになれば、何らかの結論を引き出すことができるかも知れない。

Académie の辞書に出ていない語の具体的検討に入る前に、試みに各詩集における Académie の辞書に出ている語に対する出ていない語の割合を取ってみると、次の表のような結果が出る。

恋愛詩集	——0.116
続恋愛詩集	——0.060
エレヌへのソネ	——0.050

このように、Académie の辞書に出ている語に対する出ていない語の割合は、「続恋愛詩集」においては「恋愛詩集」のそれより約半分近い値を示し、「エレヌ」では「続恋愛詩集」のそれより更に低い値を示している。この事実は、初期の「恋愛詩集」から中期の「続恋愛詩集」、晩年の「エレヌ」へと進むにつれ、17世紀には見られない風変りな語の使用が著しく減じ、用語に関しては17世紀との差異が少なくなって来たことを示している。Ronsard は時代の歩みと共に、少なくとも用語の面においては、17世紀へ向って大きく歩みつづけたと言えるのではなかろうか。

なお注意すべきは、Académie の辞書に出ていない語はいずれも使用頻度が低く、大半が頻度1であるのに反し、頻度の高い語はいずれも Académie の辞書に出ていることである。「恋愛詩集」においては、Académie に出ていない252語のうち頻度1の語が195の多きを占め、頻度2が35語、頻度3が16語、頻度4が3語、頻度5が2語、7が1語である。

「続恋愛詩集」の場合は、Académie に出ていない84語のうち、頻度1が67語、頻度2が12語、頻度3が3語、頻度8と12が1語である。「エレヌ」では91語のうち頻度1が79語、頻度2が10語、頻度4が2語である。各詩集の頻度4以上の語をあげると、

	恋愛詩集	続恋愛詩集	エレヌへのソネ
頻度12		garir	
頻度8		pource	
頻度7	garir		
頻度5	ailler, engraver		
頻度4	epoinçonner, nouer, otieux		guarir, pource

上の表を見ると、3詩集を通じて garir (guarir) が最も高い頻度数を示している。guarir は guérir の古形で、17世紀の半ば頃まで用いられた<sup>4</sup>。Cotgrave<sup>5</sup>、Nicot<sup>6</sup>には guarir, guérir の両方が掲げられている。筆者の調べた範囲では、Ronsard は guérir という形を用いていない。pource も古い語で、とにかく guarir, pource は Académie に出ていないから、上の表に顔を出したままで、殊更に取上げる必要のない語だと言えよう。

なお参考のため、Racine の用語を調査した Guiraud<sup>7</sup> が Andromaque の用語表のあとに les mots-thèmes と称して頻度9以上の語を掲げているのに倣い、3詩集における使用頻度の高い語を相互に比較してみた。<sup>8</sup>注8に列挙した頻度の高い語は、一見して明らかなよう

4. Bloch et Wartburg: Dictionnaire étymologique de la langue française.

5. A Dictionary of the French and English tongues. Compiled by Randle Cotgrave, 1611.

6. Thresor de la Langue Française tant ancienne que moderne de Jean Nicot, 1606.

7. Index des mots d'Andromaque, par Pierre Guiraud, 1960.

に、各詩集間においてその大半が共通している。3詩集とも恋愛詩集であり、しかも頻度の高い語には基本語が多く、用語に余り差異が認められないのは当然であろう。しかし、中にはある詩集ではかなり高い頻度を示しているのに、他の詩集では著しく頻度を減じているか、もしくは全く使用されていない語が見られる。

たとえば、*or* (n.) は「恋愛詩集」で28回も使用されているのに、「続恋愛詩集」では1回、「エレース」では3回と著しく減じている。この語は「恋愛詩集」で28回使用されているうち、19回まで恋人の髪に関して用いられている。たとえば、

*Un or frisé de meint crespé annelet* (Les Amours, XVIII)

*Quel or ondé en tresses s'allongeant* (Les Amours, CXII)

ところが、「続恋愛詩集」では *or* はただ1回使用されているきりで、それも普通の「金」の意に用いられている。<sup>9</sup> 「エレース」でも「金」の意に用いられていて、同詩集における使用例の3例ともソネ39番に集中している。

*Les Dragons sans dormir, tous pleins de cruauté,*

*Gardoient les pommes d'or pour leur seule beauté :*

*Le visage trop beau n'est pas chose trop bonne.*

*Danaë le sceut bien, dont l'or se fit trompeur.*

*Mais l'or qui domte tout, devant tes yeux s'estonne.*

(Sonets pour Helene, Live 1, XXXIX)

人は反論するかも知れない。「続恋愛詩集」、「エレース」において、Ronsard が恋人の髪

---

8. 「恋愛詩集」の場合は頻度25以上の語を、「続恋愛詩集」の場合は15以上の語を、「エレース」の場合は20以上の語を掲げる。数字は頻度数を示す。

恋愛詩集: yeux 141, cœur 120, beau 114, voir 105, faire 104, amour 83, ciel 71, doux 65, jour 57, beauté 53, aller 50, pouvoir 48, vouloir 47, toujours 46, feu 44, seul 43, penser 40, dieu 40, ame 39, nuit 36, mort 35, sein 35, vie 34, mille 33, trait 32, deux 32, heureux 32, cent 31, grand 30, main 29, grace 29, or (n.) 28, dame 28, donner 27, fleur 27, mourir 27, savoir 27, mal 26, peine 26, plein 26, douleur 25, front 25, vent 25,

続恋愛詩集: faire 93, vouloir 69, aimer 59, amour 58, dire 58, beau 53, cœur 50, voir 47, yeux 43, savoir 41, pouvoir 35, mourir 31, aller 29, prendre 26, rose 26, toujours 25, venir 23, jour 22, mal 20, amy 20, dame 20, dieu 20, seul 19, doux 18, eau 18, homme 17, falloir 17, cent 17, amoureux 17, mort 17, main 17, mieux 16, laisser 16, las (interj.) 15, tenir 15,

エレースへのソネ: amour 107, faire 106, voir 97, yeux 81, cœur 74, pouvoir 67, beau 65, vouloir 53, aimer 50, dieu 40, amoureux 39, vertu 35, jour 35, dire 33, mal 33, ciel 32, ame 31, doux 30, seul 30, falloir 30, sentir 28, corps 28, passer 28, penser 28, vivre 26, toujours 26, foys 25, aller 25, nom 25, savoir 24, mourir 24, blanc 24, deux 23, grand 23, mort 23, beauté 22, prendre 21, sang 21, vie 21, an 20.

9. *La Rose est l'honneur des pucelles, Qui leur sein beaucoup aiment mieux Enrichir de Roses nouvelles Que d'un or, tant soit précieux.* (Continuation des Amours, La Rose).

に関して or を用いていないのは、それらの詩集でうたわれている Marie や Hélène は金髪でなかったからだ。なるほど Marie は金髪ではなく、<sup>10</sup> Hélène も Entre noirs et chastains, bruns ... であったらしい。しかし、あれほど or が用いられた Cassandre も実は褐色の髪だったと言う人もいる。<sup>11</sup> 「恋愛詩集」のソネ26番に Muret が付した注の間へ、1578年に、次の言葉が挿入されている。Laumonier によれば、<sup>12</sup> Ronsard 自身その言葉を挿入したのであろうと言う。「この詩人はしばしば恋人の金髪 (les cheveux dorez: l'or des cheveux) のことを口にするが、彼は or, doré をギリシヤ流に美しいものの意に使っているのだ。……褐色の眼の婦人が金髪をしていることはありえないか、ごく稀にしかありえないからだ……」<sup>12</sup> Laumonier はこの説に反対し、Cassandre が金髪であったことを認めているようにも見えるが、彼とて「1552年から1572年まで、<sup>13</sup> Ronsard は断乎として Cassandre に褐色の眼と金髪を与えている。事実そうであったためか、いやむしろ Petrarca が Laura を、Ariosto が Alcina をそのように描いたがためであろう。」<sup>12</sup> と、Ronsard が Cassandre の金髪を口にするのは、Petrarca 詩風の常套手法によることを認めている。

常套手法といえ、or と同じく astre, soupir, vent など著しい減少を示している。<sup>14</sup> astre は「恋愛詩集」では20回使用されているに対し、「続恋愛詩集」では3回、「エレヌ」では4回になっている。「恋愛詩集」における astre の使用例20のうち5例は、ces astres jumeaux (Les Amours, XLIV) のように、恋人の眼を指している。その中には、ces deux cieulx sur deux astres antez (Les Amours, CX) の如く、両の星(眼)の上に植えられた弓なりの空(眉)を意味する précieux な表現も見られる。その他6例ほどは、星の意味で用いられてはいるが、loing du bord, où pour astre sa Dame Le conduisoit du Phare de ses yeux (Les Amours, XLV) の如く、やはり眼との関係において用いられている。残りは単なる星の意味、あるいは人間の運命を支配する星の意味に用いられている。「続恋愛詩集」では、la clarté de ses astres jumeaus (XXVII) が1例あるが、他の2例はいずれも星の意味であり、「エレヌ」においては、4例中2例が眼を指しているが、残る2例は運

10. ... vous avés les cheveus De couleur de chastaigne. (Continuation, X).

11. たとえば Jusserand である。cf. J. J. Jusserand: Ronsard.

12. Ronsard: Oeuvres complètes, S. T. F. M., Tome 4, p. 30. Chamard は Laumonier が1578年に挿入された言葉を Ronsard の筆になるとすることに反対している。cf. Chamard: Histoire de la Pléiade, Tome I, p. 259.

13. Laumonier が1572年までと言うのは、Ronsard が1572年の綜合作品集第4版につぐ1578年の第5版において、ton beau chef jaunissant (Les Amours, LV) を ton beau poil brunissant と訂正しているからであろう。

14. soupir は「恋愛詩集」では23回、「続恋愛詩集」では1回、「エレヌ」では5回使用されている。vent は25回から、1回と5回に減じている。

命の意味で使用されている。

なお, corail, crystal, diamant, ébénne, esmail, ivoire, lis, marbre, neige, œillet, rubis など, or, astre ほど頻度は高くないが「恋愛詩集」である程度用いられておりながら, 他の2詩集では全く姿を消しているか, あるいは使用度が著しく減じている<sup>15</sup>。このことは, 「続恋愛詩集」, 「エレーヌ」にあっては, *gorge de marbre* (Les Amours, CV), *tetin d'ivoire* (ibid.), *col de neige* (ibid., XVIII), *Ces diamantz à double ranc plantex Dans le coral de sa bouche vermeille* (ibid., CX), *Panchant soubz moy son bel ivoire blanc* (ibid., CLIX), *ceste bouche vermeille, Pleine de lis, de roses, et d'œilletz* (ibid., VI) 式の常套的な表現が著しく減じていることを意味する。田舎娘 Marie をうたった「続恋愛詩集」にこうした常套的な表現がほとんど見当たらないのは当然であるとしても, 「恋愛詩集」同様 Petrarca 詩風に属する「エレーヌ」においても著しい減少を示している点に注目しなければならない。

## II. 複合語

Chamard は面白い試みをしている。<sup>1</sup> Marty-Laveaux の *La Langue de la Pléiade* には, *Pléiade* 派の作品に見出されるラテン語からの借用語が76頁にわたって列挙され, その語数は498語に及んでいる。Marty-Laveaux 自身指摘しているように, 498語のうちのいくつかの語は既に *Pléiade* 派以前から使用され, Oresme<sup>2</sup> にも出ている。では, *Pléiade* 派以前にはその用例が見られず, 彼らが初めて借用したと考えられる語は如何なる語であろうか。Chamard はこの点を明らかにするため一つの実験を試みたのである。

ラテン語からの借用語として Marty-Laveaux が掲げている498語のうち, A, B, C, D, に始まる130余りの語について, Huguet, Littré, Godefroy, Hatzfeld-Darmesteter-Thomas, Oscar Bloch<sup>3</sup> などの辞書によって, 検討を試みた。その結果, 驚くべきことに, それらの語

15. corail (恋愛詩集6回; 続恋愛詩集0; エレーヌ0), crystal (8; 0; 1), diamant (8; 0; 1), esmail (4; 0; 0) ébénne (2; 0; 0), ivoire (6; 0; 2), lis (15; 1; 2), marbre (2; 0; 0), neige (9; 0; 3), œillet (8; 1; 1), rubis (4; 0; 1).

1. Chamard: *Histoire de la Pléiade*, Tome 4, p. 55.

2. Nicole d'Oresme (v. 1325-1382), Lisieux の司教。アリストテレスをフランス語に翻訳, フランス語を哲学的表現に適應させるべく努力した。(Grand Larousse).

3. Edmond Huguet: *Dictionnaire de la Langue française du seizième siècle*.

Emile Littré: *Dictionnaire de la langue française*.

Frédéric Godefroy: *Dictionnaire de l'ancienne langue française*.

Hatzfeld-Darmesteter-Thomas: *Dictionnaire général de la langue française*.

Oscar Bloch: *Dictionnaire étymologique de la langue française*.



の大部分が既に押韻派, Lemaire de Belges, Seyssel, Rabelais, Calvin, Marot あるいは Scève によって使用されていることが明らかになった。130 余りの語のうち, Pléiade 派以前に使用例を見ない語は僅か10余り残るきりである。これら10余りの語が, 更に広範にして詳細な調査がなされるまでは, 一応 Pléiade 派によって用いられ始めたと考えることができる<sup>4</sup>。Chamard はそれらの語を掲げている。Chamard は, ギリシヤ語からの借用語として Marty-Laveaux が<sup>5</sup>列挙している語についても, 同じ実験を行っている。

Chamard の実験によって明らかにされたことは, 直接的には, Marty-Laveaux が Pléiade 派のギリシヤ語, ラテン語からの借用語として掲げている 275 語, 498 語のうち, その大部分が既に Pléiade 派以前から使用されていたという事実である。このことは, ギリシヤ・ラテン語からの借用語についてだけではなく, Marty-Laveaux が複合語, 派生語などの項目に列挙している語についても言えるのである。しかし, Chamard の実験の意味は, こうした直接的な面よりはむしろ, ある語が誰の造語であるとか, 誰によって使用され始めたとかを決定することが如何に困難であり, 厳密に言えばほとんど不可能なわざであることを暗示している点にある。何某の造語と考えられている語でも, より広範な資料の調査が進めば, その語の彼以前の使用例が見出される可能性がある。sympathie という語はそのよい例である<sup>6</sup>。したがって, ある語が何某の造語であると言うのは, あくまで現在までの調査結果でそう言えるまでであって, Chamard も言うように, いわば暫定的な仮定にすぎない。

以下, Ronsard の3つの恋愛詩集で用いられている語で, Académie の辞書の初版に出ていない語の具体的検討に入るが, Ronsard の用語が17世紀の眼に如何に写るかという小論の観点にとつては, たとえ Ronsard の造語であっても, その語が Académie の辞書に採用されている限り, その語は問題にならない。何故なら, その語は17世紀の眼に奇異な語と写らない可能性があるからである。

#### a) 複合形容詞

4. それらの語は, ampouler (gonfler), ancile (petit bouclier sacré), appendre (suspendre en offrande), argutie (finesse), aspirer (rendre âpre), augurer (présager), buccinateur (panégyriste), classe (flotte), deleble (destructible), deliber (goûter), depoullé (dépouillé de chair), dire (imprécations) である。
5. Marty-Laveaux は Pléiade 派の作品に見られるギリシヤ語からの借用語を 275 語掲げている。Chamard は実験の結果, Pléiade 派が用い始めたと見られる語として次の10語 (A に始まる語のみ) をあげている。acromatique, adoniser, anachorète, anagrammatisme, analytique, anapeste, antérotique, antistrophe, archiatre, astronomique
6. この語は嘗て Ronsard の造語と考えられていた。Mellerio は «... ce dernier (sympathie) seul est de son invention» と言っている。Dauzat は (Dictionnaire étymologique, 10版) Rabelais の造語と言い, Bloch et Wartburg では, 1420年頃に初出となっている。

「恋愛詩集」における使用語で、Académie の辞書に出ていない 252 語の中で、所謂複合形容詞は次の 6 語にすぎない。それらは、

形容詞＋形容詞の型—fierhumble, humblefier, doux-fier.

動詞＋名詞の型—chassenue, ebranlerocher, irritermer. である。これらの 6 語はいずれも頻度 1 である。

i) 形容詞＋形容詞の型

humblefier, fierhumble :

...l'homicide trait

Au fond du cuœur m'engrava le portrait

D'une *humblefiere*, et *fierhumble* guerriere, (Les Amours, LXXXVIII)

自分の心を苦しめる相手の女は *humblefiere* であり、内に対立を含んだ複合形容詞 *humblefiere* だけでは満足せず、順序をかえて繰返し、*fierhumble* な敵であると言う。Mellerio はこの語を Ronsard の造語であると言<sup>7</sup>い、Laumonier は Petrarca の *Questa umil fera* から来たとする<sup>8</sup>。恐らく Ronsard は Petrarca に倣って造ったものであろう。この 2 語は最後まで訂正を受けていない。

doux-fier : *Le doux fier* trait, qui me tient languissant (ibid., CIX)

愛の神の放つ矢は心地よくもあり、反面むごくもあるという恋する者の心の矛盾を対立的な複合形容詞 *doux-fier* で表わしたのである。Mellerio によれば、*doux-fier* も Ronsard の造語であると言う。1578年、この 1 行は *Il fit son trait de ton œil meurtrissant* に改められ、複合形容詞は除かれている。このように、「恋愛詩集」で使用されている対立的複合形容詞 3 語のうち 1 語が訂正で削られ、残る 2 語も上の引用が示すように 1 行にまとめて用いられている。

「続恋愛詩集」, 「エレーヌへのソネ」には、この種の複合形容詞は 1 語も用いられていない。ただし「エレーヌ」では、類似の形即ち副詞＋形容詞の型 *souplement-fort* が 1 度だけ用いられている。*De bras souplement-forts* (Sonets pour Helene, Livre I, Chanson)。なお「恋愛詩集」には、次のような表現が見られる。

*L'aigre douceur* de l'amoureuse playe (Les Amours, CIV)

以上のように 3 恋愛詩集に関する限り、この型の複合形容詞の使用はごく僅かである。

7. Mellerio: *Lexique de Ronsard*. Wartburg (Französisches Etymologisches Wörterbuch) においても、*humble-fier*, *fier-humble* 両語とも Ronsard に初出となっている。Cotgrave, Nicot に出ているが、Huguet には出ていない。

8. *Oeuvres complètes de Ronsard*, S. T. F. M., Tome 4, p. 88.

ii) 動詞+名詞の型

chassenue, ebranlerocher, irritermer :

Brave Aquilon, horreur de la Scythie,  
*Le chassenue, et l'ebranlerocher,*  
*L'irritermer, et...* (Les Amours, CLXXV)

この種の複合語は普通 *Aquilon chassenue* の如く *épithète* として用いられるが、ここでは *Aquilon* に対する同格名詞として用いられている。「スキチアの恐怖の的なる激しい北風よ、雲を追払い、岩をゆるがし、海を怒らせるものよ」と呼びかけているのである。Muret は「恋愛詩集」第2版に付した注において、<sup>9</sup> «*Ces trois mots sont heureusement composés à la manière grecque pour signifier les effets du vent Borée.*» とこれらの語の巧みさを認めている。Ronsard 自身もこれらの語が気に入っていたのか、1560年の訂正で *Le chasse-nue, et l'ebranle-rocher, L'irrite-mer* と *trait d'union* を加えたのみで、そのまま保存している。Mellerio はこの3語をいずれも Ronsard の造語としている。

「続恋愛詩集」では、この種の複合形容詞としては *dely-soucy, donne-vie, ouste-soin* の3語が見られる。<sup>11</sup>

*C'est pour-ce qu'on t'appelle Alme, Dely-soucy,*  
*Donne-vie, Ouste-soin :*

(Continuation des Amours, Ode à Nicolas Denizot du Mans.)

*on t'appelle* の *te* は *le somme* (眠り) を指す。それ故にこそ御身は恵み深く、苦しみを除き、生命を与えるものと呼ばれるのだの意である。1567年、Ronsard は *ouste-soin* を *oste-soing* と綴りを改めただけで、3語とも保存している。

「エレーヌ」においては、こうした複合形容詞は1語も用いられていない。

*Bouhours* はギリシヤの模倣であるこの種の複合形容詞を非難して、およそ次のように言っている。<sup>12</sup> 複合語は単純性を求めるフランス語の傾向と相容れない。名詞と動詞、あるいは名詞同志を結びつけて一語を造ることはフランス語の単純性の関知しないところである。*le sommeil charme-souci, le ciel porte-flambeaux, le vent chasse-nue* など、今日のフランス語にあっては奇怪きわまる表現である。<sup>13</sup> *Bouhours* が17世紀の立場から非難したこの種の

9. Oeuvres complètes de Ronsard, par Vaganay, Tome I, p. 220.

10. Wartburg によると、*chasse-nue* は Cotgrave に、*irrite-mer* は Ronsard に初出と言う。Nicot には3語とも出ているが、Cotgrave には *irrite-mer* は出していない。Huguet には3語とも出していない。

11. Mellerio は、*donne-vie, ouste-soin* いずれも Ronsard の造語であると言う。Nicot には *donne-vie, oste-soin* が出ているが、Cotgrave, Huguet には3語とも出していない。

12. Bouhours: Entretiens d'Ariste et d'Eugène, cité par R. A. Katz dans son Ronsard's French critics.

複合形容詞は、少くとも3恋愛詩集に関する限り、上述のようにその使用は非常に限定され、しかも ii) の場合「エレーヌ」においては全く使用されていなかった。これら恋愛詩集のみに限らず、大部分の作品においても事情は異ならないと言えよう。

ところが1553年の Livret de folastries, 中でも同詩集の Dithyrambes à la pompe du bouc de Jodelle においては、動詞+名詞の型に属する複合形容詞だけでも10語<sup>14</sup>ばかりも用いられている。この作品は、1553年2月、Jodelle の悲劇作品 Cléopâtre の成功を祝って祝宴が催された際、古代の風習をまねて牡山羊を飾り立て、それを引き立てて煉り歩いたが、その光景をギリシャのディオニュソス讃歌をもじってうたったものである。作品の性質上、そこでは複合形容詞のみならず、直接ギリシャ語からの借用語も多数使用されていて、これが大いに目立ち、Ronsard に対する非難の原因の一つになった。この作だけに関して言えば、その非難は当然であろう。しかしその作はかなりふざけたもので、いわばユマニスト Ronsard の遊びと言えよう。

### iii) 副詞+形容詞の型

「恋愛詩集」にはこの型の複合形容詞は使用されていないが、「続恋愛詩集」には、

haut-tonnant: Tu as beau, Jupiter, l'air de flammes dissouldre,

Et faire galloper tes *haut-tonnans* chevaux, (Continuation, XLVIII).

Weber には、haut-tonnant は épithète homérique とある。<sup>15</sup>Huguet には Pierre Matthieu (1563-1621) がこの語を名詞として使用したのが2例あがっているきりで、Ronsard の例は出ていない。Cotgrave, Nicot にもこの語は出ていない。1578年、第2行目が Et faire d'un grand bruit galloper tes chevaux と訂正され、haut-tonnant が削られている。

次の如きを複合形容詞と呼びうるなら、「続恋愛詩集」にはこの他 <sup>16</sup>mi-panché, <sup>17</sup>treuisant, tres-plein, treschaut などがある。

「エレーヌ」には、既に上に掲げた <sup>18</sup>souplement-fort, その他 bien-aimé, demy-cuit, tout-<sup>19</sup>divin, tresgrand などが見られる。tres あるいは tout と形容詞が結合した形は「恋愛詩集」

13. épithète としての使用はフランス語にはなじまないが、動詞+名詞の型の複合名詞はフランス語において数多く造られ、使用されている。cf. Darmesteter: Traité de la formation des Mots composés.

14. chanson *bris'ennuy*; perruque *lierreporte*; *portelierre*; *rompsoucy*; *portesceptre*; *nourrivigne*; *aymepampre*; *montaigneporte*; bouc *rongevigne*.

15. Ronsard: Les Amours, par Weber.

16. Un somme languissant la tenoit *mi-panchée*  
Dessus le coude droit, fermant sa belle bouche. (Continuation, LXVI).

17. du laict *treuisant* (ibid., LXIX).

18. ma moitié *bien-aimée* (Sonets pour Helene, Livre I, Chanson).

19. De vos yeux *tout-divins* (ibid., XV).

では見られないが、「続恋愛詩集」,「エレヌ」では上記のように使用されている。

## b) 複合動詞

「恋愛詩集」で用いられている複合動詞は *avantpenser*, *bienheurer* 2, *entracrocher*, *entrenouer*, *entrerompre*, *oultrepercer* 2 の 6 語で, *bienheurer*, *oultrepercer* の頻度 2 を除いて, 他はいずれも頻度 1 である。

*avantpenser*: En cent façons, desja, desja ma langue

*Avantpensoyt* les mots de sa harangue, (Les Amours, CL)

Muret は《*Avantpenser est ce que les Grecs disent promeletan*》と注している。Huguet には, この語は《*préméditer, projeter, préparer*》あるいは《*prévoir*》を意味するとあり, Ronsard の用例が出ていないが, 彼以後のものが 4 例あがっている<sup>20</sup>。このように Huguet には Ronsard 以前の用例が出ていないが, Wartburg によると, この語は 1534 年に初出と言う。とにかく, この語はギリシヤ語の直訳であり, Ronsard はこの詩句でギリシヤ語を話しているのである。1578 年, この 2 行が *En cent façon desja ma foible langue Estudioit sa premiere harangue* と訂正され, *avantpenser* が削られている。Huguet に Ronsard の用例が出ていないのは, この削除のためであろうか。1560 年版の綜合作品集に拠る Mellerio の *Lexique de Ronsard* にこの語が出ていないのは何故だろうか。

*entracrocher*: Les petits corps, culbutans de travers,

Parmi leur cheute en byaiz vagabonde

Hurtez ensemble, ont composé le monde,

S'entracochans d'acrochementz divers. (ibid., XXXVII).

*s'entracrocher* は「互にくっつきあう」の意。Wartburg によれば, この語は Ronsard が初出であると言う。ところが, 1549 年に出た Du Bellay の *Recueil de Poësie* に *s'entreacocher* が用いられている。Muret は次のような意味の注をつけている。エンペドクレス, エピクロスならびに彼らの一派はあらゆる事物を構成する 2 原理を打立てた。即ち虚空間と彼らが原子と名づける微小物とである。原子は本来虚空間を直線的に落下するが, 時に直線をしるることがあり, それ故互に衝突し, 結びつきあう。こうした原子の偶然の集合によって世界とその中に含まれるあらゆる事物が形成されると。Muret の注がなければ, 当時どれだけの人がこの詩句を理解しえたであろうか。初期の作に見られるこうした学識の披瀝による難解さが非難されたのも当然と言わなければならない。1567 年, 第 4 行目が *s'entr'acro-*

20. *avantpenser* は Cotgrave, Nicot に出ている。

chans de liens tous divers と訂正され、s'entracrocher は残されたが、同じく Académie の辞書にない acrochement が削られている。同じ famille に属する語が並ぶのを憚ったのであろう。

entrenouer : Au cuœur d'un pré loing de gents escarté,  
Que fourchement l'eau du Loir *entrenoue* (ibid., CLXXX)

entrenouer は「取巻く、編みあわせる」を意味し、Wartburg にはこの語は Ronsard に初出とある。Loir の流れが二叉に分れて取囲んでいる、人里を遠く離れた<sup>まき</sup>牧場のまん中の中の意。この語は訂正を受けていない。

outrepercer : ...ceste dance, où la flesche cruelle  
M'*outreperça*, ... (ibid., XCI).  
...un œil brun qui m'*outreperce* l'ame: (ibid., CVII)

outrepercer は「貫ぬく」を意味する。Wartburg によれば、この語は1546年が初出であると言う。2例とも削除されていない。

bienheurer : ...le secret,  
Qui *bienheuroyt* le bonheur de ma vie, (ibid., CLIV).  
Amour, amour, donne moy paix ou trefve,  
Ou bien retire, et d'un garrot plus fort  
Tranche ma vie, et m'avance la mort,  
Me *bienheurant* d'une langueur plus brève. (ibid., XI),

bienheurer は beneurer の形で古代仏語の時代から存在した古い語<sup>22</sup>で、「幸福にする、恵む、榮えさせる」を意味する。第1例は、1560年、恐らく bienheurer と bonheur という同じ famille に属する語の反覆をさけて Qui bien heuroit le plaisir de ma vie と訂正され、更に84年に Que je tenois aussi cher que ma vie と改められ、bienheurer が除かれている。第2例も、第4行が78年の訂正を経て84年には、Douce est la mort d'autant plus qu'elle est brève に改められ、bienheurer が姿を消している。2例とも訂正によって、それぞれ表現がひきしまつて来ている。

entrerompre は《interrompre》を意味し、12世紀から用いられていたが、16世紀初頭にラテン語の interrumpere からの借用形 interrompre が現われ entrerompre に取って代る。<sup>23</sup>

21. Quel destroit, quel havre et rocher Ne voit les nefz s'entracrocher? (Du Bellay: Recueil de Poésie, XII), cf. Huguet.

22. Wartburg: op. cit.

23. Bloch et Wartburg: op. cit.

entrerompre は17世紀初頭にはなお見られる。筆者の調査した範囲では、Ronsard は新しい形 interrompre を用いていない。

「続恋愛詩集」において使用されている複合動詞は entrefriser のみであり、「エレース」<sup>24</sup>では contre-imiter, entre-voir,<sup>25</sup> outrepercer が見出される。

entrefriser : ...vous avés les cheveus

De couleur de châtaigne, entrefrisés de neus, (Continuation, X)

entrefriser の意味は明らかでなく、Huguet によれば、《entrelacer》の意かと言う。

### c) 複合名詞

「恋愛詩集」で用いられている複合名詞としては、

avantchien : ...l'Avantchien, qui tarit jusqu'au fond

Les tiedes eaux, (Les Amours, XCIV).

Muret の注によれば、《L'Avant-chien : C'est le nom d'un Astre, nommé par les Grecs prokyon, par Cicéron en la traduction d'Arat, antecanis, ...》と言う。Avant-chien は Procyon と称される星で、Canicule (Sirius) よりも前に天に登るところからこの名称が来た。Mellerio には、この語は Ronsard の造語とある。Avant-chien は prokyon を直訳したものか、Antecanis から来たものか詳らかにしえないが、とにかく古代語の直訳であることは明らかであり、Laumonier も「Ronsard はここでもフランス語においてギリシヤ語、ラテン語をあやつった」と言っている。<sup>26</sup>この語は訂正を受けていない。

Belacueil : Hà, Belacueil, que ta douce parole

Vint traistrement ma jeunesse offenser

Quand au premier tu l'amenas dancier,

Dans le verger, l'amoureuse carolle, (ibid., CXXXVI).

Belacueil は Roman de la Rose からの借用語である。Belacueil よ、御身は果樹の園で、のっけから愛の踊りに誘った時、御身の甘い言葉が陰険にもわが若き日を傷つけるにいたったことかの意。Muret は注において《Ce sonet est tiré du Roman de la Rose, là où Belacueil meine l'amant dans le verger d'Amour》<sup>27</sup>と言っているが、Pauphilet, Laumo-

24. contre-imiter は imiter と同じ意味。Wartburg では、Du Bellay に初出となっている。

25. entre-voir は、Wartburg によれば、12世紀からの古い語であるが、《ne faire qu'apercevoir》の意味では Lemaire de Belges の使用が最初であると言う。

26. Oeuvres complètes de Ronsard., S. T. F. M., Tome 4, p. 94.

27. A. Pauphilet: Ronsard, à la manière du «Roman de la Rose». Mélanges offerts à Huguet.

nier などが指摘しているように、l'Amant を踊りに誘ったのは Courtoisie であって、Bel Accueil ではない。Ronsard, Muret とともに誤りを犯したのである。

demyfront: Antres moussus à demyfront ouvers, (ibid., LVII)

demyfront は à を伴って副詞句として用いられている。Weber によれば、à demyfront は「半円形に」を意味する。半円形に口を開いた苔むす洞窟の意である。この語は Cotgrave, Nicot, それに Huguet にも出ていない。

myherbe: Et à myherbe il tond mon esperance. (ibid., CLXV)

例文中の il は le rayon de l'œil de ma deesse を指す。myherbe も à myherbe で副詞句として用いられている。成長半ばで実も結ばないうちに私の希望を刈取ってしまうの意。面白い表現である。この語は Cotgrave, Nicot, Huguet のいずれにもない。1567年、この1行は Et sans meurir tranche mon esperance と訂正され、à myherbe が削られている。訂正によって意味が明瞭になってはいるが、表現が抽象化し、面白味が失われている。

### III. 派 生 語

#### (A) 語尾 *in* の形容詞<sup>1</sup>

Mellerio は、この型の形容詞について、《Les adjectifs en *in*... nous paraissent presque tous bizarres, et donnent en général aux vers une apparence d'affectation sentimentale qu'il est difficile de goûter aujourd'hui<sup>2</sup>》と言う。Mellerio が奇妙に感じると言うこの型の形容詞の使用は、3恋愛詩集に関する限り、さほど多くはない。Académie の辞書に出ていないものは、「恋愛詩集」では、albastin, diamantin, ivoyrin<sup>3</sup>, orin<sup>2</sup>, rosin の5語である。「続恋愛詩集」にはこの型の形容詞は1語も見当らず、「エレヌ」では、ambrosin, myrtin, marbrin, rosin の4語が用いられている。

「恋愛詩集」においては、ソネ37番に ivoyrin, orin, rosin の3語が集中して用いられている。

...ces tresses *orines*,

Ces doigtz *rosins*, et ces mains *ivoyrines* (Les Amours, XXXVII)

28. Ronsard: Les Amours, par Weber.

1. この型の形容詞は、marbrin を例にとれば、ラテン語の marmoreus に代り、complément déterminatif (de marbre) によらずして直接に形容詞で行こうとするもので、一種の latinisme と考えられている。Huguet は Mots disparus ou vieillis depuis le XVI<sup>e</sup> siècle の latinisme の項でこの型の形容詞にふれ、《L'emploi de ces adjectifs, si répandu qu'il ait pu être, ne devait pas durer longtemps, car il était en contradiction avec les tendances analytiques de notre langue.》と結論している。

2. Mellerio: op. cit., XXXVII.



orin は「金の、金色の」、rosin は「バラ色の」、ivoyrin は「象牙色の、象牙のように白い」を意味する。これらの語は古くから存在している<sup>3</sup>。Brunot によれば<sup>4</sup>、これらの語は古い時代にはさほど頻繁に用いられたようには思えないが、16世紀初頭の詩人、ついでリヨン派はかなりこれを使用している。Pléiade 派は Lemaire de Belges<sup>5</sup> やリヨン派に倣ってこれを用い、既存の語の型に則って新しい語をも造り出したと言う。

ところが、Muret は上掲の例文の ces tresses orines に注して、「orin, rosin, ivoyrin その他これに類する語は Jean Antoine de Baïf の創意にかかる語である<sup>7</sup>。」と言っている。同時代の友人の証言でもこのように誤ることがあるのだ。Laumonier は Muret を反駁して、「Baïf の恋愛詩集にはこれらの語が数多く見られるが、Baïf の恋愛詩集は Ronsard のそれより2ヶ月後の1552年12月末に出たのである<sup>8</sup>。」と言っているが、どうやらそれらの語は Ronsard の創意にかかると言いたそうな口吻である。

ivoyrin には上掲の例文以外に、en la gorge *ivoyrine* (ibid., CLXX), ...voici dix beaux doigtz *ivoyrins* (ibid., CLXXVII) の2例があり、orin にはいま1例、...ses blondz filets *orins* (ibid., CLXXVII) がある。

albastrin: Col *Albastrin* emperlé de bonheur (ibid., CV)

この語は雪花石膏のように白いを意味する<sup>9</sup>。1578年、この1行は Menton d'albastre, où je voy mon bonheur と改められ、albastrin が除かれている。

「続恋愛詩集」にはこの型の形容詞は用いられていないから、「エレーヌ」へ移ると、この詩集に用いられている4語のうち、筆者の調べた範囲では marbrin, myrtin, rosin の3語は古くから、少くとも Ronsard 以前から見られる。

marbrin: Transformant ses tetins en deux boules *marbrines* (Sonets pour Helene, Livre I, LV),<sup>10</sup>

myrtin: ...sous les branches *Myrtines* (ibid., chanson)<sup>11</sup>

3. orin, ivoyrin は、Wartburg によれば、古伝語の時代から存在する。なお ivoyrin はバラ物語に cil ivorin miroer (9274) という用例がある。rosin は、Godefroy には、Lancelot ou le Chevalier à la charrette の用例が出ている。

4. Brunot: La doctrine de Malherbe, p. 284.

5. Lemaire de Belges には、Les Epitres de l'amant vert の中だけでも、argentín, colubrin, marbrin, pourprin, purpurin, sulphurin, Zephirin が見出される。

6. Scève の Délie には、aquilin, corallin, hebenin, yvoirin などが見られる。

7. Hugues Vaganay: Oeuvres complètes de Ronsard, Tome 1, Les Amours, p. 45.

8. Oeuvres complètes de Ronsard, S. T. F. M., Tome 4, p. 40.

9. この語はいつ頃から用いられ始めたかは不明。

10. marbrin は、Wartburg では、1130年頃から用いられ始めたとある。

rosin: Sein de couleur de liz et de couleur *rosine*, (ibid., Livre 2, XXXV)

ambrosin: D'une si rare et douce *ambrosine* viande, (ibid., Livre I, XL)

ambrosin は「ambrosie のように美味しい」を、viande は広く「食べ物」を意味する。ambrosin は何時から用いられ始めたかは不明。

なお、Pandorin (Les Amours), Medusin (Helene) のように、固有名詞からの派生語も見られる。<sup>12</sup>

Pandorin: ...au fond du *Pandorin* vaisseau (Les Amours, LXXXV)

パンドラの匣の底にの意。1584年の訂正で Pandorin が除かれている。

Medusin: Au regard Medusin, qui en rocher me mue, (Sonets pour Helene, Livre I, LII)

私を岩に化するメドゥッサのような眼ざしの意。この語は訂正を受けていない。

以上のように、3 恋愛詩集においては、この型の形容詞はさほど多くは用いられていない。その中で、albastrin と「恋愛詩集」ソネ 177 番の orin とが訂正で削られている。orin の削られた理由は、恐らく ses *blondz filets orins* と類似の意の語が重なるのを避けるためであろう。固有名詞の派生語では、Pandorin が削られていた。他の語の場合に比してこの型の形容詞の削られる率が低いとは言わないが、Henri Estienne の場合同様 Ronsard もこれらの語を好んでいたと思われるふしもある。Malherbe は、ivoyrin が Desportes の作中に出て来たのを機会に、この型の形容詞を容赦なく斥けている。<sup>13</sup><sup>14</sup>

#### (B) 語尾 **eux** の形容詞

fieloux 2, frigoreux, grelleux, gemmeux, herbeux, otioux 4, vergongneux 2, presagieux の 8 語は「恋愛詩集」におけるこの型の形容詞で Académie の辞書に出ていない語である。

fiel の派生語 fieloux は胆汁のように苦いを意味する。

Si doucement le souvenir me tente

De la mieleuse et *fielouse* saison, (Les Amours, LXXXIV)

De ceste douce et *fielleuse* pasture, (ibid., CXXIV)

11. myrtin は «de myrte» を意味する。ミルタの枝の下で一よみの国にある、熱烈な恋をした人たちの集まり 憩うミルタの森の中の意。

12. Huguet には Pandorin が出てなく、Medusin は Ronsard のこの例のみがあがっている。「恋愛詩集」には Herculim があるが、これは名詞として用いられている (この場合 in は指小語尾)。

13. Henri Estienne: La Précellence du langage françois, p. 186.

14. «Donne congé à ivoirin, ovin, marbrin, et autres telles drôleries.»

この語は、Bloch et Wartburg では、Ronsard に初出とあり、Chamard<sup>1</sup> も Ronsard の造語としている。第1例の同型の形容詞 *mieux* の方は既に *Roman de la Rose*<sup>2</sup> にも出ている古い語である。第1例、第2例とも *mieux et mieux, douce et mieux* と対立的な表現になっている。*mieux* は2例とも訂正を受けていない。

*gemmeux* も Chamard, Brunot<sup>3</sup> とともに Ronsard の造語としている。

...des Indoys la *gemmeuse largesse*, (ibid., CLXII)

*gemmeux* は *gemme* の派生語で、「宝石の、宝石に富んだ」を意味する。インド人の住む宝石に富んだ広い土地と言うのである。この語も訂正を受けていない。

*frigoreux* は *froid* を意味する。

...l'horreur des plus *frigoreux* mois

Fait herisser les cheveux de la plaine (ibid., CXLI)

第1行が翌1553年の第2版において早くも *l'horreur des plus froidureux mois* と訂正され、*frigoreux* が除かれている。この削除が原因なのか、とにかくきわめて稀な語と見え、Nicot, Cotgrave, Huguet, その他 Mellerio の *Lexique de Ronsard*, Marty-Laveaux の *La Langue de la Pléiade* などには掲げられていない。

...l'air *grelleux*, et *pluvieux*. (ibid., CXIV)

*grelleux* は「霰の降りそうな」を意味し、Robert<sup>4</sup> では、16世紀に用いられ始めたとある。

*otieux* (*ocieux*) は、Wartburg によれば、1500年頃から用いられ、《*inactif, oisif, paresseux*》<sup>5</sup> を意味する。

Depuis le jour, que le trait *otieux*

Grava ton nom au roc de ma memoire, (ibid., LXXX)

Là, *d'otieux* actif je me suis fait. (ibid., CLXXIV)

第1例の *le trait otieux* 無為安逸の矢とは、*oisiveté* の息子である愛の神が放つ矢のことを言う。<sup>6</sup> 愛の神の矢がわが岩の如き記憶に御身の名を刻みつけた日以来の意。上掲の2例以

1. Chamard: *Histoire de la Pléiade*, Tome 4, p. 67.

2. *Le Roman de la Rose*, S. A. T. F. の 5984 行と 20133 行の 2ヶ所に用いられている。

3. Brunot: *Histoire de la langue française*, Tome 2, p. 192. Mellerio もこの語を Ronsard の造語とし、Wartburg では1564年に初出となっている。Huguet にも Ronsard 以前の用例が出ていない。したがって Ronsard の造語の可能性が高い。

4. Robert: *Dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française*. Huguet にはこの語の Ronsard 以前の用例はなく、Littré の歴史の項には Ronsard のこの例が出ているのみである。

5. Huguet: op. cit.

6. Ronsard: *Oeuvres complètes*, S. T. F. M., Tome 4, p. 81. cf. ... *Oysiveté estre mere de Luxure*, (Rabelais, III, 31).

外に、「恋愛詩集」にはもう2例あるが<sup>7</sup>、それら4例とも訂正を受けていない。

*herbeux*, *vergongneux* は古くから存在する語である。<sup>8</sup> *herbeux* は「草の生い茂った」を意味する。

Sur le tapis de ceste *herbeuse* rive, (ibid., CXVII)

*vergongneux* は「恥じている；恥ずかしそうな；内気な」を意味する。

L'aspre tourment d'une aultre (playe) plus profonde,

Que *vergongneux* je cele dans mon cuœur, (ibid., CXXXVII)

Lors ses cheveux *vergongneuse* arracha,

Si qu'en pleurant sa face elle cacha, (ibid., LXXVIII) (elle: l'Aurore)

第1例は、私が恥ずかしそうに心の中に隠しているもう一つの更に深い傷のひどい痛み、第2例は、彼女は恥じて髪をかきむしり、はては涙にぬれて顔を隠したの意。第1例の *vergongneux* は、1578年の訂正で削られている。

Tant nous unit son (de l'astre ascendant) feu *presagieux*, (ibid., LXXII)

*presagieux* は「前兆を示す」の意。l'astre ascendant は誕生の際、東の空に上りその人の運命を決定する星を言う。<sup>9</sup> Wartburg によれば、*presagieux* は Jehan Thierry の Dictionnaire français-latin (1564) に初出とあるが、それ以前に Ronsard によって用いられている。

「続恋愛詩集」においては、Académie の辞書に出ていないこの型の形容詞は *glueux*, *perleux* の2語で、「エレーヌ」では、*defectueux*, *myrtheux*, *ocieux*, *vergongneux*, *verdureux* の5語が見られる。

*glueux* は「鳥もちのようにねばねばした；鳥もちを用いた」の意である。

Un cruel oyselleur par *glueuse* cautelle

L'(ma compagne) a prise, et l'a tuée..., (Continuation, LXVIII)

これは雉鳩の言っている言葉で、残酷な鳥さしが鳥もちの毘でわしのつれあいを捕え、殺してしまったと言うのである。Mellerio はこの語を Ronsard の造語としているが、Marty-Laveaux も指摘しているように既に Scève がこれを使用している。<sup>10</sup> Godefroy, Wartburg によれば、更に古く Gautier de Coincy (1177-1236) に用例が見られる。

*perleux* は「真珠の、真珠のような、真珠におおわれた」を意味する。

7. *otieux* の他の2例は、du Chaos *otieux* (Les Amours, XLII), D'estre tousjours lentement *otieux* (ibid., CLXXIV) である。

8. Dauzat: Dictionnaire étymologique によれば、*herbeux* は Roland に見られる。*vergongneux* は、Wartburg によれば、12世紀末から用いられている。

9. Ronsard: Les Amours, par Weber, p. 560 参照。

10. Scève の用例は、Et d'un désir si *glueux* abuser (Délie, CCLXXVI) である。

Debout donq, allon voir l'herbelette *perleuse* (ibid., XXIII)

草においた露に真珠のイメージを用いているのである。Chamardはこの語を Ronsard の造語としているようであり<sup>11</sup>, Godefroy, Wartburg も同様である。glueux, perleux とともに訂正を受けていない。

次に「エレーヌ」へ入って, *myrtheux* は「ミルタの」の意で, Chamard はこの語も Ronsard の造語と考えているようである<sup>12</sup>。

Par les ombres *Myrtheux* je prendray mon repos, (Sonets pour Helene, Livre 2, XXIV)

私はよみの国のミルタの林の蔭で憩いをとっているだろうの意。Ronsard は *myrtheux* と並んで *myrtin* をも用いている。

*defectueux* は, Wartburg によれば, 1336年に初出とある。「欠けている, 不完全な」を意味する。

Une seule vertu, tant soit parfaite et belle,

Ne pourroit jamais rendre un homme vertueux :

Il faut le nombre entier, en rien *defectueux* : (ibid, Livre 2, XVIII)

どれほど完全で立派であろうと, ただ一つの美德だけでは人を有徳にできない。七つの徳<sup>13</sup>全部が必要で, 少しも欠けていてはならない。

*verdureux*<sup>14</sup> は *verdure* の派生語で「緑の」を意味する。

...ce mois *verdureux* (ibid, Livre 2, XLVII)

*ocieux, vergongneux* については, 既に「恋愛詩集」の例をあげたから, 「エレーヌ」の用例にはふれない。<sup>15</sup> 「エレーヌ」で用いられている *defectueux, myrtheux, ocieux, vergongneux, verdureux* の5語はいずれも訂正を受けていない。3恋愛詩集を通じて, 削られているのは「恋愛詩集」の *frigoreux* と *vergongneux* 2例のうち1例とである。この型の形容詞には *fieueux, gemmeux, perleux, myrtheux* など Ronsard の造語である可能性<sup>16</sup>の多い語が多い。

11. Chamard : op. cit., p. 67.

12. ibid.

13. Ronsard : Les Amours, par Weber, p. 755 に «Ce nombre est le chiffre sept, celui des quatre vertus cardinales et des trois théologiques.» *vertus cardinales* は *prudence, force, justice, tempérance* を, *vertus théologiques* は *foi, espérance, charité* を指す。(Grand Larousse).

14. Wartburg によれば, この語は Cotgrave に初出とあるが, Cotgrave にはこの語が出ていない。

15. 「エレーヌ」における *ocieux* と *vergongneux* の用例は, Si est-ce sans le corps qu'il (l'esprit) seroit *ocieux* (Livre 1, XLI) (しかし, 肉体がなければ, 精神は働かないであろう。); ... la Lune *ocieuse* (Livre 2, XXIII); aussi bien je ne puis Devant elle parler, tant *vergongneux* je suis. (Livre 2, XXIX).

(C) 語尾 **ard** の形容詞

「恋愛詩集」に用いられている語尾 **ard** の形容詞で Académie の辞書に出ていないのは、*fretillard*<sup>2</sup>, *songeard*, *sommeillard* の3語である。Huguet<sup>1</sup>によれば、接尾辞 **ard** はゲルマン起源で、この型の形容詞は、今日では、*langue populaire* で *péjoratif* な意味に用いられることが多いが、16世紀においては事情が異なっていた。

*songeard* は《*rêveur, distrait*》の意味では15世紀中葉から用いられている<sup>2</sup>。ここでは「夢を見ている」(*qui rêve*)<sup>3</sup>を意味し、...*dans mon âme songearde* (*Les Amours, CLIX*) のように使用されている。

*fretillard*: Et mitirant sa langue *fretillarde*,

Me baisotoyt d'une lèvre *mignarde*. (*ibid., CLIX*)

*fretillard* は「生き生きした、よく動く」を意味する。ぴちぴち動く舌を半ば出して、かわいい唇で私にくりかえし接吻したの意である。Chamard はこの語を *Pléiade* 派の造語としている<sup>4</sup>。*fretillard* は今1例<sup>5</sup>をも含めて最後まで訂正を受けていない。上の例文の *fretillard* は行末に用いられている関係上、このソネには *songeard, gaillard, mignard* など語尾 **ard** の形容詞が多く用いられている。

*sommeillard*<sup>6</sup> は「眠りの、眠りを催させる、眠っている」を意味する。

...*la nuit un bandeau sommeillard*

*Des deux coustez de l'orizon alonge*: (*ibid., XLVIII*)

夜が地平の両側に眠りを誘うとぼり（目隠し）をくり拡げるの意である。

この型の形容詞で Académie に出ていない語は、「続恋愛詩集」では *fretillard* が見られるのみで、「エレーヌ」においては1語も使用されていない。

(D) その他の形容詞

a) fuytif: *fuytif* は *fugitif* より古い形で、Godefroy には *Roman de Brut* (1155) の用

16. *frigoureux, grelleux, presagieux, verdureux* なども Ronsard の造語の可能性がないとは言えない。

1. Huguet: *Mots disparus ou vieillis depuis le XVI<sup>e</sup> siècle*, p. 158.

2. cf. Wartburg, Godefroy.

3. Ronsard: *Les Amours*, par Weber.

4. Chamard: *Histoire de la Pléiade*, Tome 4, p. 67. Wartburg にはこの語は16世紀に用いられたとあり、Huguet には Ronsard 以前の用例は出ていない。

5. ...*ceulx (baisers) des pigeons mignards, Couple à couple fretillards*, (*Les Amours, Amourette*).

6. この語は、Wartburg では、1564年の Thierry: *Dictionnaire français-latin* に初出とある。Godefroy になく、Cotgrave, Nicot にある。

例が見られる。1300年頃ラテン語の *fugitivus* による形 *fugitif* が現われ、古いよりフランス化された形 *fuytif* を駆逐するが、*fuytif* は17世紀まで生きのびている<sup>1</sup>。この語は、「恋愛詩集」と「エレーヌ」に1例ずつ用いられていて、いずれも訂正を受けていない。

Plus elle court, et plus elle est *fuytive*, (Les Amours, CXXIX)

Et mon ame fuytive à la tienne s'en-vole, (Helene, Livre 1, XVII)

b) escumier: Je l'(ma Deesse) accompare à l'*escumiere* fille, (Les Amours, XXXIX)

この語は「泡立つ、泡におおわれた」を意味するが、女性形 *escumiere* は海の泡から生れた *Vénus* の *épithète* の一つとして用いられている<sup>2</sup>。Chamard はこの語を Ronsard の、少くとも *Pléiade* 派の造語としているようである<sup>3</sup>。*escumier* は「続恋愛詩集」, 「エレーヌ」では使用されていない。

c) nuital: Chamard はこの語も Ronsard, 少くとも *Pléiade* 派の造語, Brunot も Ronsard の造語としているようである<sup>4</sup>。*nuital* は *nocturne* の同義語で, 16世紀にはこの外 *nuiteux*, *nuitier* が同じ意味に用いられている。

...haste toi de te lever,

Et de ta belle *nuitale* flamme

Eclaire au feu d'amour qui m'enflame, (Continuation, Imitation de Bion poète grec)

この詩は愛の女神 *Vénus* の名で呼ばれる宵の明星 *Vesper* に呼びかけたものである。

d) 語尾 able の形容詞: この型の形容詞で *Académie* の辞書に出ていない語は、「恋愛詩集」には1語もなく, 「続恋愛詩集」では *reveillable*, 「エレーヌ」では *perjurable* が用いられているにすぎない。

O Somme,...

et vien desous ton aisle

1. Bloch et Wartburg: op. cit. Cotgrave, Nicot には, *fuytif*, *fugitif* の両方が出ている。

2. *Vénus* の *épithète* の例としては, *Escumiere Venus, roine en Cypre puissante* (Bocage de 1554, sonet IX)

3. Chamard: op. cit., p. 67. *escumier* は Godefroy にはなく, Huguet には Ronsard 以前の用例は見られない。

4. *ibid.*, p. 67. Brunot: *Histoire de la langue française*, Tome 2, p. 191. Wartburg はこの語の初出を16世紀としている。

Couver un peu les yeus, les temples, et le front  
De Cassandre malade, et d'un sommeil profond,  
Toutesfois *reveillable*, alege le mal d'elle.

(Continuation, Ode à Nicolas Denizot du Mans.)

眠りよ、来たって御身の羽の下に病んでいる Cassandre の眼、こめかみ、額をそっと抱き、深い、しかし再び目覚めうる眠りで彼女の苦痛を和らげてくれの意である。この語は Godefroy, Wartburg にはなく、Huguet には用例として上掲の Ronsard のものと La Porte<sup>5</sup> のものとの2例が出ているにすぎない。

*perjurable* (*parjurable*) は「誓いに背くことのできる；偽りの誓いを立てうる」を意味する。Chamard はこの語を Ronsard の造語としており、Wartburg も Ronsard に初出としている。

O *perjurable* autel! ta Deité n'est rien.

O parole d'amour non jamais asseuree! (Helene, Livre 1, XLIV).

おお、偽りの誓いに対してもとがめのない祭壇よ。御身の神性は存在しない。ついぞ守られたことのない愛の言葉よの意。

e) 語尾 ant の形容詞: Ronsard は一般に現在分詞から来た形容詞を多く用いているが、この型の形容詞で Académie に出ていないものは、「恋愛詩集」では *blandissant* 2, *blondoyant*, *drillant*, *rousoyant* の4語にすぎず、「続恋愛詩集」, 「エレヌ」には1語も見当らない。

Prez, boutons, fleurs, et herbes *rousoyantes*,

Coustaux vineux, et plages *blondoyantes*, (Les Amours, LVII),

*rousoyant* (*rosoyant*) は「露にぬれた、露におおわれた」を、*blondoyant* は「ブロンドの、黄色の」を意味する。Wartburg によれば、動詞 *rosoyer* は14世紀中葉から見られ、*rosoiant* も《qui répand la rosée》の意味では14世紀後半から用いられているが、《couvert de rosée》の意味で用いたのは Ronsard が最初であると言う。*blondoyer* は12世紀から存在する古い語で、*blondoyant* も Roman de la Rose<sup>6</sup> に見出される。牧場、つぼみ、花、露にぬれた草、豊かに葡萄のみのる丘、黄色い土地<sup>7</sup>の意。

5. Maurice de La Porte (1530-1571): Les Epithètes françaises からの用例である。

6. Robert: Dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française. ばら物語の用例は, E veit les beaus crins *blondeianz* Come ondes ensemble ondeianz. (Le Roman de la Rose, par Langlois, 21135-36).

7. *rousoyant* の残る2例は, la *rousoyante* Aurore (Les Amours, LXXVIII), D'un beau crystal son front



Je voudroy bien en toreau *blandissant*

Me transformer pour finement la prendre, (ibid., XX)

*blandissant* は《*flatteur, caressant, doux, séducteur*》を意味する<sup>8</sup>。動詞 *blandir* は古仏語の時代から存在し<sup>9</sup>, *Roman de la Rose* にも使用されている。ゼウスが美しい牡牛に姿を変えてエウロペを奪い去った故事にならい, 策によって彼女をわがものとするため自分の姿を心ひく牡牛に変えたいものだと言うのである。1560年, *en toreau blandissant* が *en toreau blanchissant* に訂正され, *blandissant* が除かれている<sup>10</sup>。

En lieu de m'estre une estoile drillante, (ibid., LXXXI).

動詞 *driller* はネーデルランド語の *drillen* から来た語で, 「あちこち走りまわる, はね回る」と「輝く」を意味し, 15世紀から存在したと言う<sup>11</sup>。したがって *drillant* にも, *sautillant, brillant* 両方の意味がある。Weber は《*qui remue en brillant*》と解している<sup>12</sup>。(彼女の眼が) 私にとって輝く星となって導いてくれるところかの意である。

f) *delivre*: Estre *delivre*, et traisner son lien,

Estre *vallant* et couharder de crainte, (Les Amours, LXXIV)

*delivre* は *delivrer* の派生語で, 「解放された, 自由な」を意味する。形容詞として12世紀から存在する古い語で<sup>13</sup>, 16世紀においても Ronsard 以前に Marot その他によって使用されている。自由でありながら絆を引きずり, 勇気がありながらびくびくしているという恋する者の心の矛盾をうたった対立的表現である。

## (E) DIMINUTIFS

Huguet も言うように, 16世紀の詩人殊に Pléiade 派の詩人たちは *diminutifs* を濫用したとしばしば非難されて来た。「この非難は正当ではない。と言うより16世紀のみを非難するのは公正ではない。中世においても既に *diminutifs* はふんだんに使用され, ラテン語自

est rousoyant. (ibid., CIII). rousoyant は3例とも訂正を受けていない。

8. Huguet: Dictionnaire de la langue française du seizième siècle.

9. Wartburg: op. cit. ばら物語の用例は, Servir, chuer, *blandir*, flater (Le Roman de la Rose, 7388). Baisier, *blandir* e soulacier, (ibid., 9844).

10. *blandissant* の「恋愛詩集」における今一つの用例は, Pinçant en vain ta lyre *blandissante* (ibid., XXXVI).

11. Wartburg: op. cit.; Dauzat: Dictionnaire étymologique de la langue française. Wartburg によると, *driller* が *briller* と混同され, *driller* が *briller* を意味するようになった。Huguet, Godefroy には, *drillant* の Ronsard 以前の用例は掲げられていない。

12. Ronsard: Les Amours, par Weber.

13. cf. Wartburg, Dauzat, Godefroy.

体も、顔唐期においては、多量にそれを造り出している。<sup>1</sup>」

Du Bellay が「擁護と顯揚」において、在来のフランス詩の中で唯一つ読むに価すると言った Roman de la Rose にもかなり diminutifs が用いられている。Pléiade 派以前の16世紀においては、Lemaire de Belges, Marot などがふんだんにそれを用いている。<sup>2</sup> Pléiade 派もかなりそれを濫用していることは事実である。Ronsard についても、ある程度同じことが言えよう。では彼の恋愛詩におけるその使用状況はどうであろうか。

まず例のとおり、「恋愛詩集」で使用された diminutifs のうちで Académie の辞書に出していないものは、âmelete, angelette, colombelle, crespillon, gorgette, Nymphette 2, ondelette, perlette 2; damoiselet, folleton, jumelet, mignonnette, nouvelet 3, vermeillet; baisoter,<sup>3</sup> rebaisoter; doulcettement の17語である。

「続恋愛詩集」の方は、gambelette 2, herbelette 2, mammelette, mouchette, piqueron, plombet 2; nouvelet 2 の7語であり、「エレヌ」の方は、angelette, mollet の2語である。

diminutifs の使用に関してまず気づくことは、ジャンルによってその使用度に著しい差が見られることである。「恋愛詩集」においても、上掲の17語のうち âmelete, colombelle, mignonnette, rebaisoter の4語と Nymphette, perlette それぞれ2例中の1例、計6語が同詩集巻末の Amourette と題する chanson に集中して用いられているのである。

Petite Nymphé folastre,

Nymphette<sup>4</sup> que j'idolatre (Les Amours, Amourette)

Ma tourtre, ma colombelle<sup>4</sup>, (ibid.)

Revien revien mignonnette<sup>4</sup>, (ibid.)

Où fuis-tu mon âmelete,<sup>4</sup>

Mon diamant, ma perlete<sup>4</sup>? (ibid.)

Rebaisotans leurs amies (ibid)

- 
1. Huguet: Mots disparus ou vieillis depuis le XVI<sup>e</sup> siècle, p. 193. diminutifs は小ささを示すところから、愛らしさ、優雅さ、あるいはひ弱さ、そこから軽蔑などのニュアンスを伴い、一般に familier な性格を持っている。cf. Huguet.
  2. Lemaire de Belges: Les Epitres de l'amant vert を覗いただけで、amourette, aignelet, branchette, bestelette, bichete, corpselet, coulombette, chansonnette などが見られる。
  3. baisoter は baiser の diminutif であると同時に fréquentatif でもある。(Huguet).
  4. nymphette は nymphe の dim. Wartburg によれば、Lemaire de Belges に初出。colombelle は colombe の dim. colombeau の女性形、Huguet には Lemaire de Belges の用例がある。mignonnette は mignon の dim., 1500年頃初出 (Bloch et Wartburg)。  
âmelete は âme の dim., 古仏語の時代から存在する。(Wartburg).  
perlette は perle の dim., 1550年 Du Bellay に初出 (Bloch et Wartburg).  
rebaisoter は少くとも Huguet には Pléiade 派以前の用例はない。

このように恋人を *nymphette*, *colombelle*, *mignonnette*, *âmelete*, *perlete* と呼びかけている。これらの用例中、第4例のみが、1578年、*Où fuis tu mon Angelette, Ma vie, mon amelette?* と訂正され、*perlete* が削られたが代りに *Angelette* が入っているから、数には変動がない。

上掲の例によっても明らかなように、*diminutifs* は *chanson* その他軽いジャンルに多く用いられている。もっとも、ジャンルは同じであっても、取扱う内容によって使用度に差が生じることは言うまでもない。*mignard* な、くだけた調子の作品には数多く用いられているが、荘重な作品には余り見られない。それは *diminutifs* の持つニュアンスから考えて当然であろう。16世紀においては、Huguet も言うとお<sup>5</sup>り、*diminutifs* はフランス語を優雅にする要素の一つにかぞえられていたのである。それが17世紀になると、たとえば Bouhours のように「*fontelette*, *montagnette*, *oyselet*, *ruiselet* などの *diminutifs* は、わが国の古い作家たちの文体においては、その微妙な味わいをなしていたが、今日の言葉にあっては、もはや我慢がならない。Belleau と一緒に *Le gentil Rossignolet Doucelet...* と言わうものなら、その詩人は物笑いになるであろう。」<sup>6</sup> という言葉が聞かれるようになる。

なるほど濫用すれば鼻持ちのならないものではあるが、Ronsard が初めて世に問うた作品《*Des Beutez qu'il voudroit en s'amie*》<sup>7</sup>に見られる *diminutifs* などは捨てがたい味を持っている。即ち、

Un petit Tetin *nouvelet*,  
Qui se fait desja *rondelet*,  
Et s'eslever dessus l'Albastre s'ose, (*Oeuvres Complètes*, Tome 1, p. 4)

さて、ここで本題に戻ろう。

*angelette*: J'iray tousjours et resvant et songeant  
En la douce heure, où je vy *l'angelette*, (*Les Amours*, CXII)  
Voyci le boys, que ma sainte *Angelette*  
Sus le printemps anime de son chant, (*ibid.*, CXXXI)

男性形の *angelet* は、Godefroy によれば、Gautier de Coincy (1177-1236) に見られる古い語である。<sup>8</sup> Muret は第1例に注を付し、Petrarca はしばしば *Laura* を *angelette* と呼

5. Huguet: op. cit.

6. Dominique Bouhours: *Entretiens d'Ariste et d'Eugène* (1671), cité par R. A. Katz dans son *Ronsard's French critics*.

7. 1547年, J. Peletier du Mans の詩集に寄せた詩。

8. *angelette* の方は、Godefroy では、上の Ronsard の第2例を一番古い用例としている。

んだと言っているが、言うまでもなくこれら2例の *angelette* は恋人 *Cassandre* を指している。*diminutifs* はその特異な語尾のため、行末の脚韻の箇所に用いられる可能性が多い。上掲の2例とも、*angelette* は行末に来ている。行末に来れば、押韻の関係上その同じソネに他の *diminutifs* が用いられる可能性も多い。

事実、第1例のソネ112番には、*angelette* 以外に *nouvelette*, *ondelette* が用いられている。

Quel or ondé en tresses s'allongeant  
Frapoit ce jour sa gorge <sup>9</sup> *nouvelette*,  
Et sus son col, ainsi qu'<sup>9</sup>une *ondelette*  
Flotte aux Zephyrs, au vent alloit nageant? (ibid., CXII)

編んで垂れさがった何たる美しいカールした金髪が、その日、彼女のみずみずしい胸の上を揺れ動き、そよ風を受けたさざ波のように、うなじの上で風に漂っていたことかと言うのである。1578年の訂正で *ondelette* が除かれたが、代わりに *fleurette* が入っている。

第2例のソネ131番の場合にも、*angelette* 以外に4行目、5行目、8行目にそれぞれ *diminutifs* が用いられている。即ち、

4行目      ...pensive elle s'esbat *seullette*,  
5行目      Iö voici la préee *verdelette*,  
8行目      Le bel esmail de l'herbe *nouvelette*,

第5行が1578年に *Voicy la préee et la rive mollette*<sup>10</sup> と訂正され、*verdelette* に代り *mollette* が入っている。この訂正はギリシヤ語からの借用語 *io* を除くことを目的としたものであろう。*diminutifs* そのものを除くことを意図する訂正でない限り、上の場合のように、たとえある *diminutif* が除かれても、押韻の関係でそのあとに他の *diminutif* が来る場合が多いのは言うまでもない。

*damoiselet*: Un front de rose, un teint *damoiselet*, (ibid., XVIII)

*damoiselet*<sup>11</sup> はここでは形容詞として用いられ、「*damoiselle* の」、そこから「優雅な、上品な；女性的な」を意味する。*damoiselet* も行末に来ているから、このソネには、*damoiselet* と韻をふんで第2行目に *...meint cresse annelet* が、第7行目には *...un sein verdelet*

9. *nouvelet* は *nouveau* の dim., 13世紀から存在する。(Wartburg)

*ondelette* は *onde* の dim., Wartburg は Ronsard に初出としている。

10. *mollet* は *mol* (*mou*) の dim., 13世紀から存在。(Bloch et Wartburg)

11. *damoiselete* n. は, Wartburg では, 古仏語から存在するが, *damoiselet* が形容詞として用いられたのは何時からか明らかでない。少くとも Huguet には, Ronsard 以前の形容詞としての用例は出ていない。

が見られる。

vermeillet: ...ces couraulx chastement *vermeilletz* (ibid., VI)

vermeillet は vermeil の diminutif で, Wartburg によれば13世紀から存在する古い語である。couraulx は coural (corail) の複数形。明らかに朱い唇の意である。このソネにも, vermeillet の外第6行目に Et de ce sein les boutons *verdeletz*, 第7行目に Et de ces yeux les astres *jumeletz* と二つの diminutifs が用いられている。jumelet は jumel (jumeau 双生児の, 対の) の diminutif で, Wartburg によれば, Pléiade 派が用い始めた語であると言う。

12  
crespillon: Or les (ses cheveux) ridant en mille *crespillons* (ibid., XXXIX)

crespillon は cresse の diminutif で「巻き毛, カール」を意味する。

folleton: Poyl *folleton*, où nichent mes liesses (ibid., CLXXVIII)

folleton は, 形容詞 fol (fou) の diminutif follet の更に diminutif である<sup>13</sup>。1578年, この1行は Poil digne d'estre aux testes des Déesses と訂正され, folleton が削られている。

以上で, Académie の辞書に出ていない「恋愛詩集」の diminutifs のほとんどにふれたわけであるが, diminutifs の場合には, その語が Académie に出ているか否かは大して問題ではなく, たとえ Académie に出ていようと, それらの語を濫用すれば, 後世の眼にあるいは異様に写ることには変りがない。ところが「恋愛詩集」においては, Académie に出ている diminutifs は10数語使用されているにすぎず, 語尾 et, ette のものに限れば<sup>14</sup>9語にすぎない。9語のうち数語は, Académie に出ていない語に関連して, 既に上でふれて来たのである。

「続恋愛詩集」においては, まずソネ17番に, Académie に出ていない diminutifs が3語, 出ているのが1語と集中して用いられている。

Le vintième d'Avril couché sur *l'herbelette*,

Je vy, ce me sembloit, en dormant un chevreuil,

Qui çà, puis là, marchoit où le menoit son vueil,

Foulant les belles fleurs de mainte *gambelette*. (Continuation, XVII, 1-4)

herbelette は herbe の diminutif で, Wartburg によれば, 13世紀から存在している。

12. crespillon は Wartburg にない。

13. cf. Mellerio.

14. それらの9語は brunette, herbette, verdelet, anelet, amourette, chambrette, chapelet, doucet, seulet である。

gambelette は《petite jambe》、ここでは《gambade》<sup>15</sup>を意味する。Wartburg'には、この語は Ronsard に初出とある。4月20日のこと、若草の上に横になってまどろんだ時、一匹の小鹿を見たように思った。小鹿は心そのままにあちらこちらと歩きまわり、跳びはねては美しい花をふみつけていたの意。第5行目には、Une corne et une autre encore nouvelette, 8行目には ...sus sa gorge douillette<sup>16</sup> とそれぞれ diminutif が用いられている。

ソネ12番においても、5行目は ...ces captives mouchettes<sup>17</sup>, 8行目は Sur la face à Marie, et sus ses mammelettes<sup>18</sup> と、Académie にない diminutifs 2語が使用されている。「続恋愛詩集」にあっては、このように Académie にない diminutifs の大半がソネ17と12の2篇に集中している。一方、Académie に出ている diminutifs は僅か数語、殊に目につき易い et の語尾を有する語は douillet, oyselet, seulet の3語にすぎない。

「エレーヌ」になると、Académie にない語は、上述のように、angelette, mollet<sup>19</sup> の2語にすぎず、Académie に出ている語は語尾 et のものは verdelet の1語にすぎない。著しい減少と言わねばならない。

#### (F) ment に終る副詞

「恋愛詩集」では、この型の副詞が多数使用されていて目につく。Académie の辞書の初版に出ていない252語の中に、この副詞が19語含まれている。

ardemment, blondement 2, calmement, cautelement, dextrement 2, doulcettement, eparsement, follastrement 3, fertillement, fourchument, gentement, infamement, jaunement, meurtrierement, mielleusement, pantoymement, reveremment, tortemment, traistrement がそれである。その他、Académie に出ているものが51語使用されていて、「恋愛詩集」ではこの型の副詞は合計70語使用されていることになる。

「続恋愛詩集」においては、Académie の辞書に出ていないのが、excellamment, frisqueusement, gentement, tanseulement の4語であり、出ているのが12語で、合計16語が使用されている。

「エレーヌ」では、Académie に出ていないのは grossement の1語であり、出ているのは12語で合計13語が用いられている。

15. cf. Huguët.

16. douillet は古い形容詞 douille (doille) の dim. で、14世紀から存在。(Bloch et Wartburg).

17. mouchette は mouche の dim., Roman de la Rose に見られる。

18. mammelette は mamelle の dim., たとえば Eustache Deschamps に見られる。(Godefroy).

19. mollet は mol (mou) の dim. 13世紀から存在する (Robert). le mollet Zephyre (Sonets pour Helene, Livre 1, Chanson).



3) ...ô feu *chastement beau*, (ibid., CXXXIX)

4) De tes beaulx raiz *chastement allumé* Je fu poëte: (ibid., CXLII)

第4例は、御身の美しい光に清らに燃えたち、私は詩人になったと言うのである。第1例は1584年に *ces sourcis deux croissans nouvelets* に、第2例は60年に *ton tetin comme œillets rougissant* に、第3例は84年に *ô flame entretenue D'un feu divin* に、第4例は84年に *vivement allumé* に訂正され、いずれも *chastement* が削られ、*ment* に終る副詞+形容詞の形も第4例を除いて姿を消している。Weberによれば、Ronsardは後に<sup>4</sup>Petrarca風表現の濫用に対し批判的になり、*chaste*, *chastement*, *chasteté*などの語を組織的に削っていると言う。

5) *Avoyr la face amoureusement blesme*, (ibid., XXII)

6) *Rompant la sienne (sa foy) infamement fragile*, (ibid., CLV)

第6例の *infamement* は「不名誉にも、恥ずかしくも」を意味し、Wartburgによれば15世紀末から用いられている語である。第5例の *amoureusement blesme* も、第6例の *infamement fragile* も大胆な表現であり、いささか *précieux* な感じもするが、面白い表現である。それが1560年に、第5例は *Avoir la face et triste et morne et blême* に改められ、*infamement fragile*の方は67年に *en amour si fragile* と訂正され、いずれも一応穏やかな表現になっているが、同時に面白味が失われている。

7) ...ma vie est heureuse De s'escouler *doulcement langoureuse*, (ibid., LXXXIII)

8) ...si plus on ne me blasme D'estre tousjours *lentement otieux*, (ibid., CLXXIV)

9) *Soubz un hyver doulcement adoulci*, (ibid., CLX)

第8例の *otieux* は、形容詞の項で述べたように、*oisif* を意味する。*lentement otieux* も大胆な表現であるが、ぶらぶら遊んでいる姿を彷彿とさせる視覚的效果を持っている。第7例の *doulcement langoureuse* は、1578年、*en douceur langoureuse*、第8例は67年に *D'estre tousjours de nature ocieux* に、更に84年には *D'avoir l'esprit et le corps ocieux* に、第9例も66年、78年の訂正を経て87年には *Quand au printemps le ciel s'est adouci* に訂正され、それぞれ *doulcement*, *lentement* が削られ、表現が常識的な調和のとれたものになっている。

10) ...d'une langue *eternellement vive* (ibid., XCVI)

11) ...mon ardeur *honteusement discrete* (ibid., CXI)

この2例もふしぎに視覚的效果を伴った面白い表現である。この2例は訂正を受けていない。

---

4. Ronsard: Les Amours, par Weber, Introduction, LIII.



12) ...comme amy *piteusement touché* (ibid., CXXIX).

13) De cent fureurs *pantoyment tourmenté* (ibid., XXVII)

<sup>5</sup>  
pantoyment は *pantois* の派生語で *pantoisement* と同義である。Muret はこの語に《*Tellement qu'il ne peut haleter, ni avoir son haleine. Mot propre en fauconnerie*》と注している。ここでは「息ができないほど、息がつまるほど」の意であろう。*piteusement touché*, *pantoyment tourmenté* という激しい表現も、第12例が84年に *comme amy de ton amour touché* に、第13例が67年に *De cent fureurs brusquement tourmenté* に改められて *piteusement*, *pantoyment* が除かれ、いずれもより穏やかな表現になっている。

14) ... *doucement irrité* (ibid., CI).

15) Comme le chault ...

En beau crystal le blanc des neiges fond

Par sa *tiedeur lentement vehemente*: (ibid., CXXII)

16) ... sa beaulté si *fierement humaine*, (ibid., XVI)

第16例の *fierement* は *cruellement* を意味する。これらの対立的表現は、16) の場合は訂正を受けていないが、14) では78年に *doucement agité* に改められてやや緩和し、15) では、84年に *Sur le printemps la froide neige fond En eau qui fuit par les rochers cou-lante* に改められ、ごく普通の穏やかな表現になっている。

17) Quand je fuz priz au *doulx commencement*

D'une *douceur si doulcettement douce*, (ibid., XXXVIII).

*doulcettement* は *doucement* の *diminutif* で、Wartburg によれば、13世紀から見られる。余りにも同一 *famille* の語の反覆を避けたのか、この2行は84年に大訂正を受け、*doulcettement* が削られている。

上に掲げた17例のうち、6) の *infamement*, 13) の *pantoyment*, 17) の *doulcettement* の3語だけが *Académie* に出ていない語であり、他の14語はいずれも出ている語である。これら17例中、実に11例において訂正により副詞が削除されている。削除の理由は種々考えられようが、全般的に見て、Weber も言うように、*ment* に終る副詞+形容詞の形式を除いてとにかく表現を緩和する方向にあったと言えよう。なお、*ment* に終る副詞+形容詞の形式は「続恋愛詩集」には1例も見当らず、「エレヌ」では5例用いられていて、そのうち2例が後に訂正削除されている。「恋愛詩集」に比して著しい減少である。

---

5. Wartburg はこの語を1553年に初出としているが、Ronsard はこのように1552年の「恋愛詩集」に用いている。Huguet にも Grevin の用例が一つあるきりで、Ronsard のものはあがっていない。

上に掲げた例において、それらが受けた訂正の結果を見れば、なるほど表現が穏やかに調和・均整のとれたものになってはいるが、表現の力強さ、面白味が失われていることも事実である。Weber は言う<sup>6</sup>。Ronsard が自作に加えた訂正は果して改良であったか否かの議論は Pasquier 以来、殊に19世紀になり Ronsard が復活して以来、盛んに繰返されて来たが、この議論は、しかし、イマージュの優雅さ、調和、論理、平衡を前面に押出す古典主義的な趣味と奔放な抒情、熱烈さ、絵画的な美、驚異などを称揚するバロック趣味との対立として片付けてしまえるであろうかと。

Académie の辞書に出ていない語に戻ると、

dextrement : Moy donc rocher, si *dextrement* je n'use

L'outil des Seurs pour ta gloire esbaucher, ... (ibid., VIII)

Si *dextrement* l'augure j'ay receu, (ibid., CXXXII)

第1例の *dextrement* は「巧みに」を意味する。岩に化せられた私は、ミュージズたち (Seurs) の道具即ち豎琴を巧みに操って御身の栄光を歌わないとしても意。第2例の *dextrement* は *favorablement*, *heureusement* を意味する。形容詞 *dextre* は、ラテン語の *dexter* から来た語で、第1例の *dextrement* に見られるように、*adroit* をも意味するが、本来「右の、右手にある」を意味する。右手の方角は幸運の兆とされていたところから、*favorable* を意味し、したがって *dextrement* が *favorablement* の意味に用いられるのである<sup>7</sup>。Wartburg によれば、*dextrement* は1549年が初出であると言う。第1例の *dextrement* は1584年の訂正で除かれたが、第2例は訂正を受けていない。

eparsement : De ses cheveux la rousoyante Aurore

*Eparsément* les Indes remplissoyt. (ibid., LXXVIII)

この2行は既に *rousoyant* の項で引用した。*eparsement* は《*ça et là*》を意味し、Wartburg によると12世紀から用いられている。1578年、第2行目の始めが *Semez espais* と訂正されて *eparsement* が除かれた。Weber は縹渺とした広さを喚起する *eparsement* の削除を惜んでいる<sup>8</sup>。

cautement : Sœur de Paris, la fille au roy d'Asie,

A qui Phebus en doute fit avoyr

Peu *cautement* l'aiguillon du scavoynr. (ibid., CLXXVI)

*cautement* は、形容詞 *caut* が《*prudent; rusé*》を意味するところから、《*sagement*,

6. Weber: Les corrections de Ronsard dans les Amours de 1552.

7. Ronsard: Les Amours, par Weber, p. 514.

8. Weber: op. cit.

prudement》と《par ruse》とを意味する。Ronsard は自分の恋人 Cassandre を、アポロンから予言の能力を与えられたトロイの王女カッサンドラになぞらえているのである。Wartburg には、この語は16世紀に用いられ始めたとあるが、Littré には Eustache Deschamps (1346-1406) の用例が出ている。Huguet には、この語の16世紀における Ronsard 以前の用例として、Lemaire de Belges, Rabelais のものがあがっている。この語は訂正を受けていない。

gentement:     Devant son chant marié *gentement*

                  Avec mes vers animez de son pouce, (ibid., XXXVIII)

この2行は Ronsard の詩を Cassandre が luth の伴奏で歌っている情景を描いている。gentement は《gentiment, gracieusement》を意味し、11世紀から存在する古い語である<sup>9</sup>。1560年、marié を避けて accordé gentement と訂正され、歌にかかるから accordé の方が適切であろうが、そこには奇抜さを避けていわば sagesse に向かおうとする方向が感じられる。67年には accordé proprement となって gentement が除かれ、更に78年の訂正を経て84年には Quand il lui plaist sur son Lut doucement ... に改められている。

meurtrierement:                                     ... ceste fiere amie

.....

                  Qui de ses yeulx occit *meurtrierement*

                  Un qui l'avoyt plus chere que sa vie, (ibid., CLXIV)

meurtrierement は《d'une façon meurtrière, par un meurtre<sup>10</sup>》を意味する。彼女をわが命よりもいととしていた男をその眼であやめたあのむごい女の意である。この語はかなり大胆な造語のように思えるが、Wartburg によると、Lemaire de Belges に見られると言う。Godefroy には更に15世紀中葉の例が見られる。occire (tuer) と meurtrierement という似た意味の2語を重ねて強度の表現をねらったのであろうが、この2語がうまくかみあわず、意味も明確さを欠くうらみがある。1567年には occit cruellement と訂正されて meurtrierement が除かれ、87年には La terre soit à son corps ennemie, Et vif et mort soit tousjours en tourment と2行が全的に改められている。

fourchument:     Au cuœur d'un pré loing de gents escarté,

                  Que *fourchument* l'eau du Loyr entrenoue, (ibid., CLXXX)

この2行も既に複合動詞の項で引用した。fourchument は fourchu の派生語で「又になっ

9. Wartburg によれば、この語は Vie de Saint-Alexis に見られる。

10. cf. Huguet.

て、二又に分れて」を意味する。Wartburg はこの語を Jehan Thierry の Dictionnaire français-latin (1564) に初出としている。ところが、この語は Huguet に出ていない。何故であろうか。1578年に第2行目が Qu' à bras fourchus l'eau du Loyr entrenoue と訂正され、fourchement が除かれたためであろうか。Marty-Laveaux<sup>11</sup> には、この語は「恋愛詩集」の初期の版には見られるが、後に à bras fourchus に置き換えられて姿を消していると注記して、この例のみがあげられている。おそらく Ronsard 以外の他の Pléiade 派の人たちにもこの語は用いられていないのであろう。

ardemment: Reluit à part l'angelique visage,

Que trop avare *ardemment* je veulx: (ibid., LIX)

ardemment は ardemment を意味する。実は ardentement より ardemment の方が古い形(12世紀)で、後に ardent が女性形 ardente を取るようになり、ment に終る副詞一般の規則に従って ardentement が造られたが、<sup>12</sup> 後者は16世紀以後には生きのびなかった。1578年、第2行目が Mon seul thresor qu'avarement je veulx と訂正され、trop avare が除かれ、ardemment が avarement に置き換えられている。trop avare (avide を意味する) と ardentement という似た意味の語を重ねて表現を強調したのが、それを避けて avarement だけにし、表現を緩和しようとしたのであろう。

「恋愛詩集」は以上で切りあげ、「続恋愛詩集」に移ろう。

frisquement: Ja la gaye alouette au ciel a fredonné,

Et ja le rossignol *frisquement* jargoné,

Dessus l'espine assis, sa complainte amoureuse.

(Continuation, XXIII).

frisquement は gracieux, pimpant, joli を意味する形容詞 frisque (frische) の派生語で「優雅に」を意味し、Godefroy には1473年の用例が出て<sup>13</sup> いる。frisquement jargoné は詩集出版2年後の1557年に早くも doucement jargoné に訂正され、frisquement が削られている。

tanseulement: Je veulx *tanseulement* à lui seul me monstrier: (ibid., LXV)

tanseulement は単なる seulement と同じ意である。Laumonier によれば、<sup>14</sup> tant と seulement

11. Marty-Laveaux: La Langue de la Pléiade.

12. cf. Littré.

13. Godefroy では、frischement という形なら、Froissart に見られる。Huguet には Ronsard 以前の例のみがあがっていて、Ronsard のが出ていない。Mellerio, Marty-Laveaux にも出ていない。Cotgrave, Nicot に出ていないところから、当時もはやほとんど用いられなかったのであろう。

14. Ronsard: Oeuvres complètes, S. T. F. M., Tome 7, p. 183.

とを結合した形はラテン語の *tantummodo* に対応するように思われると言う。1560年の訂正において、*tant seulement* と分けられている。

*excellitement* は、*ardentement* の場合と同じく、*excellemment* (*excellément*) に対して、*excellent* が女性形 *excellente* を取るようになって造られた形 (14世紀<sup>15</sup>) であるが、結局古い形 *excellemment* が生きのびたのである。残る1語 *gentement* は既に「恋愛詩集」で取上げたから、ここではふれないことにする。*excellitement*, *gentement* はいずれも後の訂正で削除されている。

「エレーヌ」においては、*Académie* に出ていないこの型の副詞としては、*grossement* が用いられているきりである。

Dessus ma tombe écrivez mon soucy

En lettres grossement :

(Helene, Livre I, Chanson)

*grossement* は「大きく」を意味し、13世紀から用いられている。1584年、この2行は ...*engravez mon soucy En memorable escrit* と訂正され、*grossement* が削られている。

以上で、*ment* に終る副詞の概観を終る。*Ronsard* は「恋愛詩集」においてはこの型の副詞を数多く用いているが、後の訂正でその大半を削除している。また「続恋愛詩集」, 「エレーヌ」と時代が下がるに従い、それらの副詞の使用数が激減している。この事実は、これらの副詞によって何らかの強度な表現を求めていた *Ronsard* が後にそれらを緩和する方向に向っていること、要するに、*Vianey*, *Weber* も指摘しているように、*Ronsard* のこの型の副詞に対する好みが大きく変化したことを示している。

#### (G) 名詞+er の型の動詞

「恋愛詩集」におけるこの型の動詞で *Académie* の辞書に出ていないのは、*aisler* 2, *adonizer*, *esclaver*, *flammer*, *martyrer* 3, *montaigner*, *œillader* 3, *onder*, *peinturer* の9語である。

「続恋愛詩集」では *martirer* 2, 「エレーヌ」にあっては *flageoler* が用いられているにすぎない。

「恋愛詩集」の *montaigner*, *esclaver* などは大胆で面白い造語である。*esclaver* は「奴隷にする, 隷属させる」を意味する。

Ces deux yeulx bruns, deux flambeaulx de ma vie,

15. cf. Robert.

16. Weber: Les corrections de Ronsard dans les Amours de 1552. Ronsard: Les Amours, par Vaganay に付した Vianey の préface 参照。

Dessus les miens fouldroyans leur clarté,

*Ont esclavé* ma jeune liberté. (Les Amours, XXV)

前述のように、Laumonier はこの語に注をつけて、*esclaver* は「Ronsard の造語。Muret は1553年この語に《*captivé, asservi*》と訳語をつける必要を感じた。同年 Magny はこの語を恋愛詩集で用い、ついで1554年 Tahureau は *Sonnets, Odes et Mignardises* で、1555年 Baïf は *Francine* の中で用いた。」と、この語が Ronsard の造語である所以を強調している。<sup>2</sup> ところで Malherbe は *Commentaire sur Desportes* の中でこの語を *mauvais mot* ときめつけている。<sup>3</sup> Ronsard は1560年に *Ont esclavé* を *Ont aresté* に改めたが、78年に再びもとの *Ont esclavé* に戻している。

*montaigner* は、Muret によれば、*mot nouveau* であり、Mellerio も Ronsard の造語であると言う。<sup>4</sup>

... le charme d'une voix,

Qui tous raviz fait sauteler les boys,

Planer les montz, et *montaigner* les plaines, (ibid., CX)

Muret は *montaigner* を *s'eslever comme montaignes* と自動詞に解していて、Mellerio, Weber もそれを踏襲しているが、Huguet は *élever en montagne* を意味する他動詞とし、上掲の例文を代名動詞 *se montagner* の項に入れている。*faire*+不定法であるから代名動詞の *se* が脱落したものと解しているのである。Cotgrave には *se montaigner* と代名動詞の形のみが掲げられていることから、Huguet の解釈が正しいように思われる。*se planer*<sup>5</sup> は *se montaigner* の反対である。オルフェウスさながらに、彼女の声は山をも平地にし、平地を山にする魔力をそなえているという常套的な誇張表現である。この語は訂正を受けていない。

*aisler* は翼を与えるの意で、*s'aisler* と代名動詞としても用いられている。<sup>6</sup>

Par le moins beau, qui mon penser *aisla*,

1. Oeuvres complètes de Ronsard, S. T. F. M., p. 28.
2. *esclaver* は Godefroy になく、Huguet にも Ronsard 以前の用例は出ていない。Brunot は Louise Labé がこの語を使用していると言う。(La doctrine de Malherbe, p. 262.).
3. Oeuvres de Malherbe, par Lalanne, Tome 4, p. 335.
4. Wartburg には、この語は16世紀に用いられ、*se montagner* は Ronsard—1580 とある。
5. Desportes の《J'ai fait planer les monts》という詩句に対して Malherbe は、《Il faut dire *aplanir*, et non *planer*. Planer est autre chose; Il se dit des oiseaux qui volent sans branler les ailes.》と言っている。(Oeuvres de Malherbe, Tome 4, p. 410).
6. Wartburg にはラテン語の *alatus* に由来する *aislé* は出ているが、*aisler* の方は出ていない。少なくとも Huguet には *aisler* の Pléiade 派以前の用例はない。

Au sein du beau mon penser s'en vola. (ibid., CLXXIV)

Par lui (son œil) mon cuœur premierement *s'aisla*,

Et loing du peuple à l'escart s'en vola

Jusque au giron des plus belles Idées. (ibid., LXII)

第1例は、より低い美<sup>7</sup> (Cassandre) によってわが思念は翼をえ、至高の美のもとへ飛んで行ったを意味する。Cassandre は至高美に至る段階に外ならない。第2例も第1例同様プラトンの理想の表明であって、「恋愛詩集」にはこのように platonisme が散見している。第1例は、mon penser の繰返しが気になるが、何ら訂正を受けていない。第2例は、1584年、美しい視覚的な表現 mon cuœur premierement *s'aisla* が L'esprit par lui desira la vertu といういわば抽象的な表現に改められ、*s'aisla* が除かれている。

adonizer は「アドニスのようにする」を意味し、Chamard はこれを Ronsard の造語として<sup>8</sup>している。

Quand d'un bonet son chef elle *adonize*, (ibid., LXXVI).

彼女は布帽子をかぶって頭をアドニス風にする時の意<sup>9</sup>。この語は訂正を受けていない。

flammer, martyrre, onder, peinturer, œillader はいずれも古くから見られる語である。

flammer は「焼く、もやす」、「もえる」を意味し、自動詞としては12世紀、他動詞としては、15世紀から用いられている<sup>10</sup>。

Oeil, main et crin, qui *flammez* et gennez,

Et r'enlassez mon cuœur ... (ibid., XVII).

恋人の眼と手と髪 (crin) に呼びかけたもので、言うまでもなく、flammer は眼に、genner は手に、r'enlasser は髪に対応する。1560年に qui bruléz と、更に67年には poil, qui bruslez と訂正され、古い語 crin, flammer は削られている。

martyrer は martyriser と同じく、「殉教させる」、肉体的、精神的に「苦める」を意味する<sup>11</sup>。

7. le moins beau は beau の劣等比較級 moins beau に定冠詞をつけて名詞化したもので、最上級ではない。

8. Bloch et Wartburg もこの語を Ronsard に初出としている。

9. Brantôme によると、当時の婦人は自分を美しく見せんがためゲルフ党员あるいはギベリーニ党员流に羽飾りのついた bonnet をかぶりなどして男のように見せかけたと言う。Brantôme (éd. Lalanne, IX, 313) cité par Marty-Laveaux, dans La Langue de la Pléiade.

10. Wartburg では、自動詞としての flammer は12世紀—16世紀；他動詞としては15世紀に用いられ始めたとある。

11. この語は Godefroy には、12世紀の用例があり、Huguet にも Gringore, Lemaire de Belges, Marot の例が出ている。ところが Chamard は Martyrer を Ronsard, Jodelle あたりの造語としているようである。

Et m'est honneur de me voyr *martirer*,

Soubs un espoir quelquefois de tirer

Un seul baiser pour toute recompense. (ibid., LXXXIV)

「恋愛詩集」に *martyrer* はこの外にもう 2 例あるが、そのうち 1 例が1584年に削られ、結局 3 例中 2 例が残っている。

*onder* は「波うつ、うねる」を意味し、Wartburg によれば、12世紀頃から存在している。

D'un doulx zephyre il (le moys d'Avril) fait *onder* les plaines, (ibid., CIII)

4月の心地よいそよ風が野を波うたせるというこの1行が、1584年に、*Des laboureurs il arrose les peines* というやはりやや抽象的な表現に置きかえられ、*onder* が除かれている。

Et de couleurs *se peinture* la rive (ibid., CLXV)

*peinturer* は、Bloch et Wartburg によると、12世紀から存在し、*peindre* を意味する。岸辺が色とりどりに色どられるの意である。

*œillader* は ≪regarder≫ を意味する。<sup>12</sup>

Ainsi je pers ma peine coustumiere,

Quand à longz traitz j'*œillade* la lumiere

De ton bel œil chefdœuvre nompareil. (ibid., CLXXI)

並ぶもののない美しい御身の眼の輝きをじっと見ていると、日頃の苦しみも消え失せると言うのである。Trévoux はこの語を *familier* で、*bel usage* ではないと言<sup>13</sup>い、Malherbe も ≪Ce mot ne me plaît point≫ と<sup>14</sup>言っている。*œillader* はこれ以外にもう 2 例あるが、上掲のを含めて 3 例とも訂正を受けていない。

前述のように、「続恋愛詩集」ではこの種の動詞として *martirer* が 2 例<sup>15</sup>、「エレヌ」においては *flageoler* が見られるにすぎない。

Pasteur, qui conduira en ce lieu ton troupeau,

*Flageolant* une Eclogue en ton tuyau d'aveine,

(Helene, Livre 2, VIII)

*flageoler* はここでは他動詞で ≪jouer sur le flageol, jouer sur la flûte≫<sup>17</sup> を意味する。麦

12. Littré には *œillader* の15世紀の用例が出ている。

13. Mellerio: Lexique de Ronsard.

14. Oeuvres de Malherbe, par Lalanne, Tome 4, p. 410.

15. その2例は、Je pleure, je me deux, je cry, je me martire. (Continuation des Amours, XIV), Le sang gelé dont elle me martyre (ibid., XXXVI) である。

16. Godefroy には、自動詞の例としては古くは Adam de la Halle, 他動詞としては Guillaume de Machault の例があがっている。Lemaire de Belges, Scève などにもこの語が見られる。



の莖を笛にして牧歌を吹きながら羊の群をこの地にひきつれて来る羊飼いに呼びかけているのである。

「恋愛詩集」においては、この種の使用語 9 語のうち、*montaigner*, *esclaver*, *adoniser* など大胆な語は Ronsard の造語である可能性があり、*flammer* と *onder*, それに *aisler* 2 例中の 1 例、*martyrer* 3 例中の 1 例がそれぞれ訂正で除去されている。

#### (H) 形容詞+er (oyer) の型の動詞

「恋愛詩集」に見出されるこの型の動詞で Académie の辞書の初版に出ていないものは、便宜上形容詞に関係ある語を一括すれば、*couharder*, *fantastiquer*, *féconder*, *jaunoyer*, *serener*<sup>1</sup> の 5 語である。

*couharder*: Estre vaillant, et *couharder* de crainte, (Les Amours, LXXIV)

*couharder* は *couhard* (*couard*) の派生語で「びくびくしている」を意味する。*couharder* に関して Chamard は、この語が Ronsard の造語と取れる発言をしているが、Wartburg によれば、この語は11世紀から存在している<sup>3</sup>。この 1 行は訂正を受けていない。

*fantastiquer* についても Chamard は *couharder* 同様 Ronsard の造語と考えているようである。この語の場合は、Wartburg も Chamard の見解と一致している。

Sur les plus beaux *fantastique* un exemple. (ibid., CVI)

*fantastiquer* は《*imaginer*》を意味する。(神々のうちで)最も麗しいものに則りひな型を考え出すがよいと言うのである。この語も訂正を受けていない。

*jaunoyer* は Wartburg によれば12世紀に始まる古い語で、《*jaunir*》を意味する。

... au sablon qui *jaunoye* en Pactole, (ibid., CI)

リディアのパクトロスの川に流れている砂金のことを言う。この語も訂正を受けていない。

*serener*: ... de tes yeulx *serene* mes douleurs, (ibid., CLIII)

Un jour plus doux *seréne* l'Univers, (ibid., CLXV)

*serener* は「晴れやかにする、穏やかにする、静める」を意味する。Huguet には Lemaire de Belges の用例が出ているから、この語は少くとも16世紀初頭から存在していた語であろう<sup>5</sup>。

17. Huguet: Dictionnaire de la langue française du seizième siècle.

1. *féconder* はラテン語の *fecundare* から来 (Bloch et Wartburg), *serener* は *serenare* から来た (Marty-Laveaux) と言う。したがって、これらの語を *fantastiquer* などと同じに扱うことは厳密さを欠くことになる。便宜上一括することを許されたい。

2. Chamard: Histoire de la Pléiade, Tome 4, p. 68.

3. Godefroy にも古い例があがっている。

4. Chamard: op. cit., p. 68.

第1例の *serene* は命令形で、御身の両の眼で私の苦悩を晴らしてくれの意。1587年に ... *de tes yeux appaise mes douleurs* と訂正され、*serene mes douleurs* という表現はなじまないので除かれている。第2例の *serener* は訂正を受けていない。

*féconder* は13世紀から存在してはいるが、Robert<sup>6</sup>によると、18世紀までは稀れでそれ以後の方が多く用いられ、Académieの辞書には1762年の第4版から採用されている<sup>7</sup>。

「続恋愛詩集」では、Académieの辞書に出ていないこの型の動詞は用いられていない。「エレヌ」においては、*serener* が見られるにすぎない。

... *ses flammes amoureuses*

*Embellissent la terre, et serencent les cieux*, (Helene, Livre 2, III)

(I) a+名詞(形容詞)+er, a+動詞<sup>1</sup>の型の動詞

例のとおり、「恋愛詩集」で使用されているこの型の動詞で Académieの辞書にない語を列挙すると、*amoderer*, *s'aviander*, *accomparrer* 2, *arraisonner* 2, *annuiter*, *alenter* 3 の6語である。

*s'aviander*: *S'aviander d'une amertume estresme*: (Les Amours, XXII)

Muretの注によれば、*s'aviander* は *se repaître* を意味する。Chamardは例のようにこの語を Ronsardの造語としているようであり、Wartburgも Ronsardに初出としている。Mellerioは、「この語は狩猟用語で、野獣が餌を食べるを意味する。」<sup>2</sup> と言う。Marty-Laveauxもこれを狩猟用語としている。1567年、この1行は *Manger tousjours d'une amertume extrême* と訂正され、*s'aviander* が削られたが、Weberはこの *pittoresque* な、味のある語の削除を惜んでいる<sup>3</sup>。

*annuiter*: ... *un midi, qui d'un stable sejour,*

*Sans annuiter dans les cuœurs estincelle*, (ibid., CXV)

*annuiter* は「日が暮れる、夜になる」の意である。Du Bellayが「擁護と顕揚」において、復活させて使用すべき古語の例としてあげていたこの語は、Bloch et Wartburgによれ

5. Wartburgによっても、この語の初出の時代が明らかでない。

6. cf. Bloch et Wartburg.

7. Littréによる。

1. Darmesteterは *Traité de la formation des mots composés dans la langue française* (p. 99)の中で、a+名詞+erの型と、名詞+erで既に動詞化されたものに更にaのついた型(*couche-coucher-accoucher*)とを混同すべきでないと言っているとおり、厳密には二者を区別すべきであるが、ここではそれらを一括して取扱うことにする。

2. Mellerio: *Lexique de Ronsard*.

3. Weber: *Les corrections de Ronsard dans les Amours de 1552*.

ば、11世紀から存在すると言う。1578年、*Sans annuiter* が *Sans voir la nuict* と訂正され、*annuiter* が削られている。

*accomparer* は13世紀から存在する語で、<sup>4</sup>意味は *comparer* と変りがない。「恋愛詩集」には次の2例が見出される。

Je l'*accompare* à l'escumiere fille. (Ia=ma Deesse) (ibid., XXXIX)

Veufve maison des beaulx yeulx de Madame,

.....

Je t'*accompare* à quelque pré sans fleur, (ibid., CLI)

第1例は、海の泡から生れた娘 *Vénus* に彼女を比すると言うのであり、第2例は、彼女がいなくなり、その美しい眼の見られなくなった家を花のない<sup>まき</sup>牧場になぞらえている。この語は2例とも訂正を受けていない。

*s'arraisonner*: ... quand le chault s'enfuit

Seule aparsoy<sup>5</sup> pensive *s'arraisonne*. (ibid., XCI)

*M'arraisonnant* seul à l'heure<sup>6</sup> j'essaye

De soulager la douleur de ma playe, (ibid., XCIII)

*s'arraisonner* は、「反省する、考えこむ、己の心にたずねる」の意。*raison* には *parole*, *discours* の意味があり、そこから *arraisonner* は *adresser la parole à* の意に用いられたのであり、11世紀から存在する古い語である。<sup>7</sup>第1例は、暑さが去ると彼女は唯一人で物思いに耽るの意である。1567年、*Madame seule en pensant s'arraisonne* と訂正され、*s'arraisonne* の主語がなかったのが補われている。第1例、第2例とも *s'arraisonner* は削られていない。

*alenter*: Le mal est grand, le remede est si bref

A ma douleur qui jamais ne *s'alente*, (ibid., LXXXI)

*alenter* は「速度をゆるめる；静める，和らげる」を意味し、古くから *alentir* と並んで存在していた語である。<sup>8</sup>痛みはひどく、薬物の効果も束の間、わが苦痛の和らぐことがないの意。*alenter* はこれ以外の2例を含めて、いずれも訂正を受けていない。

残る1語 *amoderer* は単に *modérer* を意味し、14世紀から用いられている。<sup>9</sup>

4. cf. Wartburg.

5. aparsoy: à part soi.

6. à l'heure: alors.

7. cf. Wartburg.

8. Wartburg によると、*alenter*, *alentir* とともに12世紀から存在している。

9. cf. Wartburg, Godefroy.

Et si le fiel n'amoderoit un peu

Le doux du miel duquel je suis repeu, (ibid., X)

この語も訂正を受けていない。

「続恋愛詩集」, 「エレーヌ」においては, この型の動詞は1語も用いられていない。

「恋愛詩集」におけるこの型の動詞6語の中で, かなり大胆な造語 *s'aviander*, 古語 *annuiter* ともにただ1度しか使用されていないが, それがいずれも後の訂正で削除されているのである。

(J) **en**+名詞+**er**, **en**+動詞の型の動詞

「恋愛詩集」で使用されているこの型の動詞で Académie の辞書の初版に出ていないものは, *emmurer* 3, *emparfumer*, *empeinturer*, *emperler* 3, *empoudrer*, *empouper*, *empourprer*, *enamourer*, *encherner* 2, *encordeler* 2, *endorer*, *enfieller*, *enfranger*, *enfueiller*, *englacer* 2, *engraver* 5, *enjoncher* 2, *enlustrer*, *ennonder*, *ennouer*, *enthrosner*, *embrunir*, *entreprendre* の23語に及んでいる。

ソネ88番においては, *endorer*, *emperler*, *enfranger* の3語が同時に1行に用いられている。

Le seul Avril de son jeune printemps,

*Endore, emperle, enfrange* nostre temps, (Les Amours, LXXXVIII)

*endorer* は《*dorer*》を, *emperler* は「真珠をちりばめる; 飾る, 粧う」を, *enfranger* は「総飾りをつける」を意味する。Muret は注して, *endorer*, *emperler*, *enfranger* は《*mots faits à l'imitation de Petrarque*》<sup>1</sup> と言っている。Marty-Laveaux は Muret の言葉を受けて, 《... certains verbes composés comme *dénervier*, *emperler*, *ont*, d'après le témoignage des commentateurs, été formés par Ronsard à l'imitation de Pétrarque.》と, Ronsard の造語であることを明言している<sup>2</sup>。Petrarca の *canzoniere* の CXCII に, 《*Vedi quant'arte dora e 'mperla e 'nostra l'abito eletto ...*》と *dorare*, *imperlare*, *inostrare* が用いられている<sup>3</sup>が, Ronsard はそれらに倣って造ったと言うのである。しかし, 少なくとも *emperler* は Ronsard の造語ではない。Marguerite de Navarre, Scève が既に使用している<sup>4</sup>。

1. Ronsard: Oeuvres complètes de Ronsard, par Vaganay, Tome 1, p. 135.

2. Marty-Laveaux: La Langue de la Pléiade, Tome 1, p. 180.

3. cf. Ronsard: Oeuvres complètes, S. T. F. M., Tome 4, p. 88, note de Laumonier. Petrarca の引用は Petrarca: Rime, a cura di Siro Attilio Nelli による。

4. ... la perfection Qui saintement ce monde *emperle* et dore, Marg. de Nav., les Marguerites. (Huguet).

これらの3語は訂正を受けていない。

englacer : Voyez comment je *m'englace* et *m'enflamme*, (ibid., LXXXIII)

O chault, ô froyd, qui *m'englace* et *m'enflamme*, (ibid., CXLV)

englacer は「凍らせる」を意味する。Mellerio は《*mot nouveau créé par Ronsard*》と言っているが、Wartburg によると、この語は Gautier de Coincy の時代から存在している。2例とも訂正を受けていない。

emparfumer : ... ceste Marguerite

Qui ciel et terre emparfume d'odeur, (ibid., LXXVII)

emparfumer は「薫らせる、芳香で満たす」の意。Mellerio には、この語は《*synonyme de parfumer, créé par Ronsard*》とあり、Chamard も Ronsard の造語としているようである。Huguet にはこの語の用例として、上掲の Ronsard のものが1例出ているにすぎない<sup>5</sup>。この語も訂正を受けていない。

emmurer は「恋愛詩集」においても頻度3を示しているが、Ronsard はこの語をしばしば用いている。この語は「城壁で囲む；取囲む、閉じこめる」を意味し、Bloch et Wartburg によれば、13世紀頃から用いられていて、Huguet にも Marot, Calvin などの用例が出ている。

Heureux, cent foys heureux, si le destin

N'eust emmuré d'un fort diamantin,

Si chaste cuœur dessoubz si belle face : (ibid., V)

運命が、かくも美しい顔の下にかくも純潔な心をダイヤモンドのように固い砦で取囲んでいなければ、どれほど幸福であったろうの意。この語は、「恋愛詩集」に使用されている3例中、1例が訂正で除かれている。

enthrosner : Dieux, si là haut s'enthrosne la pitié, (ibid., CXI)

enthrosner は「玉座につかせる」を意味し、Wartburg によれば、14世紀の半ば頃から用いられたとある。Laumonier の指摘によると、この詩句はウェルギリウスのアエネーイス第2巻536行からの借用である。したがって、la pitié はウェルギリウスの *pietas* にしたがって訳すべきで、「もしいやしくも上天に、……、正義の念があるならば<sup>8</sup>」の意である。

Scève の場合は過去分詞形ではあるが、Tu vois ma face *emperlée* de gouttes, Délie, CXCI.

5. en のつかない parfumer も、Bloch et Wartburg によれば、1532年が初出である。emparfumer は Ronsard の造語である可能性は強い。

6. たとえば、「オード4部集」で3回、1553年「恋愛詩集」第2版に増補された作品中で2回、「オード第5部」で1回など。

7. Ronsard : Oeuvres complètes, S. T. F. M., Tome 4, p. 109.

Ronsard は「オード第2部」で、Dieux, si là haut pitié demeure (Ode XXII)という表現を用いている。上掲の Dieux, si là haut s'enthrosne la pitié は、1560年、Dieux, si au ciel demeure la pitié と訂正されて s'enthrosner が除かれ、「オード第2部」に見出される表現に近づいている。

empeinturer: Et soyent tes flancz *empeinturez* encor

De mainte histoyre en filz d'or enlassée:

Cela, Maison, ne me peult resjouir, (ibid., CLI)

empeinturer は peindre の意である。Cotgrave, Nicot, Mellerio, Marty-Laveaux いずれにもこの語は出ていない。Huguet には Vauquelin de la Fresnaye が2例あがっているのみで、Ronsard の例が出ていない。<sup>9</sup> このソネは彼女が立去って虚ろになった家に呼びかけている。したがって tes flancz は家の壁を指す。壁が金糸で織りなされた物語で飾られていようが、(彼女がいない今では)そんな物では心を楽しませることができないの意。1578年に第1行目が Et soient tes murs retapissez encor と訂正され、tes flancz, *empeinturez* という比喩的な語が tes murs, *retapissez* という直截な語に置き換えられて意味が明確になっている。

embrunir: Quel voile obscur embrunit ce flambeau? (ibid., CLXI)

embrunir は「曇らせる、暗くする」を意味する。このソネは恋人が病気になった時のもので、如何なる暗いとぼりが彼女の眼 (flambeau) を曇らせているのかの意。この語は14世紀頃から用いられていて、<sup>10</sup> Huguet にも Rabelais, Scève など Ronsard 以前の用例が出ている。

enlustrer: ... Cestuy là de ses yeulx

*Enlustre*, enflamme, enlumine les cieulx. (ibid., V)

enlustrer は「照らす、明るくする」の意。cestuy là (celui-là) は太陽を指している。enlustrer, enflammer, enluminer と類似の動詞を三重に累積して強調する方法は Ronsard によく見られる。Wartburg には、この語が用いられたのは1550年—1600年の間とある。

ennonder: ... les retz de ses beaulx cheveux blondz

En cent façons ennonde et entortille: (主語は ma Deesse)(ibid., XXXIX)

8. ウェルギリウス・泉井久之助先生訳：アエネーイス，世界古典文学全集，筑摩書房。

9. Godefroy には、過去分詞形 *empainturé* が出ていて、用例が一つあがっているが、その時代を明らかにすることができない。Huguet に Ronsard の例がなく、Mellerio, Marty-Laveaux にこの語が出ていないのは、1578年にこの語が削除されたためであろうか。とにかく余り用いられなかった語と言えよう。

10. cf. Bloch et Wartburg.

ennonder は onde の派生語で「波うたせる」を意味する。恋人の美しい髪を、男心をとらえる網の罠にたとえるのは Ronsard の常套手法である。Mellerio には、ennonder は «mot nouveau formé par Ronsard» とある。<sup>11</sup>

s'enfueiller :                ..., ainsi qu'un jeune oyseau,

                                  Qui s'enfueillant dedans un arbrisseau,

                                  De branche en branche à son plaisir s'essore, (ibid., CLXXVII)

Huguet には、enfueiller, enfueillé の形が出ているが、s'enfueiller は出していない。Wartburg では逆に s'enfueiller のみが出ていて他の形にはふれていない。しかも同書には、s'enfueiller の初出は Ronsard とある。<sup>12</sup> Huguet によれば、enfueiller は «garnir de feuilles; couvrir» を、enfueillé は «qui a des feuilles, garni de feuilles; abrité par les feuilles» を意味する。したがって s'enfueiller は「木の葉でわが身を覆う」、「葉の中に身を隠す」の意になる。木の葉の中に身を隠して、枝から枝へと心のままに飛びまわる小鳥のようと言うのである。1584年に第2行目が Qui s'envolant dedans un arbrisseau と訂正され、s'enfueillant が除かれている。Huguet に s'enfueiller が出していないのは、この削除のためであろうか。Huguet に掲げられている enfueiller, enfueillé の用例はいずれも Ronsard 以後のものである。

empouer :     En peu de temps, le gracieux Zephyre,

                                  Heureusement empouplant ton navire, (ibid., XCII)

empouer は「(風が) 船尾 (poupe) から吹く、押す」を意味する。Mellerio には、この語は風に関して16世紀に広く用いられたとあり、Marty-Laveaux は海員用語としている。しかもこの語は、Wartburg によれば、1552年に初出とある。ちょうど「恋愛詩集」出版の年である。海員間で用いられた語を借用して、Ronsard が初めて詩語として用いたのであろうか。この語は訂正を受けていない。

emprende :     Si l'escrivain de la mutine armée,

                                  Eut veu tes yeulx, qui serf me tiennent pris,

                                  Les faicts de Mars il n'eut jamais empris. (ibid., LXXI)

emprendre は «entreprendre» を意味する。ホメロス (l'escrivain de la mutine armée) にして私をとりこにしている御身の眼を見たのであれば、イーリアス (les faicts de Mars)

11. この語は Godefroy には勿論なく、Huguet には Ronsard 以前の用例はない。Cotgrave には ennondeé はあるが ennonder はなく、Nicot にもない。Ronsard の造語の可能性はある。

12. Godefroy には enfoillir: couvrir de feuilles という形が出ていて、Chrétien de Troyes の用例があがっている。





受けていない。

「続恋愛詩集」においては、この型の動詞で Académie の辞書に出ていないものは、*enfleurer*, *engarder*, *en-rocher*, *en-glacer*, *en-eauer*, *en-fouer*, *entourner*, *empenner*, *emprendre* の9語である。小さい「続恋愛詩集」の9語は「恋愛詩集」の23語と比率としては変わらないかも知れない。ところが、9語のうち *en-rocher*, *en-glacer*, *en-eauer*, *en-fouer* の4語は同じソネの同じ行にまとめて用いられている。

Meduse seulement tournoit l'homme en rocher,

Mais cette-cy *en-roche*, *en-glace*, *en-eaue*, *en-foue*

Ceus qui ozent sans peur de ses yeus approcher : (Continuation, LV)

*en-rocher*, *en-eauer*, *en-fouer* は「岩に、水に、火に化せしめる」を意味する。メドゥサは人間を岩に変えるだけであるが、彼女の方は恐れずその眼に近づく者たちを岩に、氷に、水に、火に化せしめるのである。Belleau は1560年「続恋愛詩集」に付した注において、次のような意味のことを言っている。これらの新語は貧弱なフランス語を豊かにするため必要であり、作者 Ronsard の力量を最初から羨むやからが Ronsard をしてかくも賞揚すべき企てを思いとどまらせなかったなら、今日フランス語は多くのみごとな新語に事欠かなかったであろう<sup>14</sup>。1584年、上の Belleau の注に次の言葉が書き加えられている。この部分は、Laumonier の想像によれば、Ronsard 自身の手になるものであろうと言う。「これらの語はわが国語を豊かにするため著者 (Ronsard) によって造られた語であり、きわめて巧みに造られている<sup>15</sup>。」この言葉が Ronsard 自身のものであれば、Ronsard 自身これらの語を自分の造語と認めたことになる。*en-glacer* だけを除いて、他の3語 *en-rocher*, *en-eauer*, *en-fouer* を Ronsard の造語と考えることは Wartburg と何ら矛盾しない<sup>16</sup>。とにかく、これらの語は大胆な造語ではあるが、上例のように1行にまとめて、しかも1回きりしか用いられていない。なおこれら4語は訂正を受けていない。

*enfleurer*: ..., qu'on *enfleure* la terre

De roses, et de lis, ... (ibid., XIII)

*enfleurer* は「花で飾る、花をまき散らす」を意味する。上掲の2行は願望文で、地面にばらや百合の花をまき散らしてくれの意。Wartburg によれば、この語は13世紀から見られる。

14. Oeuvres Complètes de Ronsard, par Vaganay, Tome 2, p. 114.

15. Ronsard: Oeuvres Complètes, S. T. F. M., Tome 7, p. 172, Note 4.

16. *englacier* は Gautier de Coincy (1177 ou 78-1236) に見られる (Wartburg). *enrocher* は 1554年初出 (Wartburg), *enfouer* は 1611年 Cotgrave に初出 (Wartburg). *eneauer* は Wartburg に出ていない。Huguet には、*enrocher* は Ronsard および彼以後の用例が出ているが、*eneauer*, *enfouer* は Ronsard のこの例が1例だけ掲げられているにすぎない。

上の2行は、その前後の行をも含めて、1557年、78年の2回大修正を受け、*enfleur* は除かれている。

*empenner* : ... *ceux empennés* appris à bien voler, (ibid., Ode à Nicolas Denizot)

この語は「翼を具えさせる」を意味し、上の1行は、翼を具え、うまく飛ぶ術を習得したものの即ち鳥のことを言う。*empenner* は11世紀からある古い語<sup>17</sup>で、Huguet には Ronsard 以前の16世紀の用例として、Lemaire de Belges, Rabelais などがあがっている。この語も訂正を受けていない。

*entourner* は「取巻く、めぐらせる」を、*engarder* は《*empêcher*》を意味し、両語とも古くからある語<sup>18</sup>で、いずれも訂正により除かれていない。

「エレーヌ」においては、この型の動詞は *envieillir*, *engarder*, *engraver* の3語が見られるにすぎない。「恋愛詩集」, 「続恋愛詩集」に比して、著しい減少である。

*envieillir*<sup>19</sup> は *vieillir* と同じ意で、この語の他動詞としての用法は、Wartburg によれば、*Roman de la Rose* に始まる。*engarder*, *engraver* については既に述べたから、ここではふれない。これら3語はいずれも訂正を受けていない。

以上概観したように、「恋愛詩集」, 「続恋愛詩集」においては、この型の動詞は比較的数量多く用いられていたが、後の訂正で削られた語の数もかなり多い。晩年の「エレーヌ」においては、その使用は著しく減じていた。

#### (K) *de, des* + 動詞, *de, des* + 名詞 + *er* の型の動詞

「恋愛詩集」で用いられているこの型の動詞で Académie の辞書の初版に出ていないのは、*deflammer*, *deplumer*, *desalier*, *desaffamer*, *desnerver*, *desoyfver*, *desceindre*, *despourprer*, *desreter*, *desveiner*, *desvier* の11語で、いずれも頻度1である。

これら11語の中で、*desveiner*, *desnerver* などは殊に大胆な造語に思われる。

Tant que la mort me *desnerve* et *desveine*,

Je seray tien :

(Les Amours, XLIII)

*desnerver* は *priver de nerfs* 即ち筋や腱を取り去る、力をなくさせる、弱らせるを意味し、*desveiner* は *dépouiller de veines* 血管を取り去る、殺すを意味する。死が私の力も血も奪

17. cf. Robert.

18. *entourner* は14世紀末からある (Wartburg). *engarder* は Godefroy に Gautier de Coigny の用例がある。

19. ...: nulle herbe n'est maistresse

Contre le coup d'Amour *envieilly* par le temps. (Sonets pour Helene, XXXV).

い去るまで、私は御身のものなのだというのである。desnerver, desveiner は、Muret の注では、Petrarca に倣って造られた語とある。Petrarca の用いた snervare, svenare から造ったと言うのである。Mellerio もこれら両語とも Ronsard の造語としている。ところが Wartburg によれば、desveiner は Ronsard が初出になっているが、desnerver の方は15世紀から用いられており、Godefroy においても年代の明らかなところでは1515年まで遡ることができる。両語とも訂正を受けていない。

... et là je fus ravy

De ses beaulx yeulx par lesquelz je *desvie* (ibid., CXXXI)

desvier は「死ぬる」を意味する自動詞であるが、「殺す」と他動詞としても用いられる。Mellerio が《vieux mot dérivé de vie》と言うように、desvier は古くからある語で、Wartburg によれば、自動詞としては12世紀、他動詞としては13世紀から用いられている。この語も訂正削除されてはいない。

Ains que te voir en bruslant *deplumer*: (ibid., CXL)

deplumer も13世紀頃から用いられた古い語である。<sup>1</sup>1578年、この1行は Qu'on ne te voye en bruslant deplumer と訂正され、deplumer はそのままだが、古い接続詩句 ains que が除かれ、不定法構文も改められて意味がより明瞭になっている。

*Se desoyfver* d'une amere liqueur, (ibid., XXII)

desoyfver は Godefroy に13世紀の用例が出ているが、<sup>2</sup>Muret がこの語に《se desalterer, éteindre sa soif》と注しているところから、se desoyfver は当時見慣れない語であったと想像される。1567年、この1行は Boire tousjours d'une amere liqueur と訂正され、se desoyfver が削られている。Weber は、上述の s'aviander の場合同様、この《pittoresque》な味のある語の削除を惜んでいる。<sup>3</sup>

... du ret qui m'ennoue

Si quelquefois je me voy *desreté*: (ibid., CLXXX)

desreter は罟 (rets) から解き放すを意味する。Wartburg によれば、desrester は Jehan Thierry の Dictionnaire français-latin 1564 に、derheté は Ronsard に初出とある。Huguet には用例として、Ronsard のこの例が出ているのみ。<sup>4</sup>ところが Godefroy には、

1. cf. Bloch et Wartburg.

2. Godefroy には Mouskès (1215-1283) の Chronique からのこの語の用例が出ている。しかし、Godefroy の用例は Mouskès から Belleau, Jean de la Taille あたりまでとんでいる。だから、この語は Mouskès の頃から引続き使用されていたのか、Ronsard が復活させて使用したのか、あるいは新たに造られたものか明らかでない。Wartburg ではこの語は16世紀初出になっている。

3. Henri Weber: Les corrections de Ronsard dans les Amours de 1552.

Jean de Stavelot (1388—1449) の用例が出て<sup>5</sup>いる。Wartburg は Godefroy を参照している筈であるのに、Godefroy の用例を無視しているのは、用例の根拠を薄弱と見たためか、それとも Godefroy の *derester* は別語源の語であろうか。

*Quelle palleur despourpre ce sein beau ... ?* (ibid., CLXI)

*despourprer* は言うまでもなく、赤いものを「色あせさせる、青ざめさせる」を意味する。Chamard はこの語を Ronsard の造語としているようである。Wartburg もこの語を Ronsard に初出としている。このソネは恋人が病気になった時のことをうたっているが、次の *deflammer* もこれと同じソネに用いられている。

*Et toy Barbu, ...*

*Deflamme* aussi le tison de ma vie, (ibid., CLXI)

*deflammer* は「火を消す」を意味する。*toy Barbu* は長いひげをはやした医神アスクレーピオスへの呼びかけである。Muret の注によれば、この1行は「メレアグロス<sup>7</sup>の命が1本の薪にかかっていたように、私の命がかかっている彼女の高熱を下げてほしい」の意である。要するに *le tison de ma vie* とは彼女を指すのであり、自分の命がかかっている薪である彼女が燃えつきれば、自分の生命もつきるのである。この語も、Wartburg では、Ronsard 以前には用いられていない。1578年、この1行が *Fais amortir le tison de ma vie* と改められ、*deflammer* が除かれている。

*... je ne puis ma faim desaffamer* (ibid., CXXIV)

*desaffamer* は「空腹をみたす」を意味し、Wartburg によれば、この語も Ronsard 以前の用例が見られない。*desaffamer* は訂正を受けていない。

残る2語 *desalier* と *desceindre* はソネ128に用いられている。*desalier* は「解きはなす」を、*desceindre* は「帯を解く、締めていたものをはずす」を意味する。Wartburg によれば、*desceindre* は12世紀から用いられているのに対し、*desalier* は1550年が初出であると言う。

「続恋愛詩集」, 「エレヌ」においては、Académie の辞書に出ていないこの型の動詞は1語も使用されていない。

4. この語は Cotgrave, Nicot に出ている。

5. *derester*, v. a., *dégager*: Et les biens des englieses de Liege furent adonc *deresteis*, (J. de Stavelot, Chron, p. 125).

6. Chamard: Histoire de la Pléiade, Tome 4, p. 69.

7. メレアグロスは、生れて7日目に、運命の神によって、炉の上で燃えている薪が燃えつきる時、彼の命が絶えたと定められた。彼の母はそれを聞き、その薪を消して箱にしまった。ところが、猪退治の皮の取り合いから、彼は伯父たちを殺した。彼の母は自分の兄弟が殺されたことに腹を立て、例の薪を火の中に投げこんだ。そのため彼の生命は絶えた。

「恋愛詩集」においては、desveiner, desnerver などの大胆な造語, desvier, desreter, se desoyfver など興味ある語が用いられていた。Académie に出ていない11語のうち後に訂正削除されたのは se desoyfver, deflammer の2語で、その数は多くない。Ronsard は se desoyfver を boire で置き換えたのに対し、Weber は se desoyfver という pittoresque な語の削除を惜んでいるのは前述のとおりである。boire という直截な語に比して se desoyfver (渴をいやす) は確かに pittoresque な趣を持っている。それは se desoyfver に限らず、deflammer, desaffamer, despourprer においても同じで、これらの語は、直截な語に対して、一種の迂言法とも言えよう。なお、この型の動詞は「続恋愛詩集」, 「エレーヌ」には1語も用いられていなかった。

#### IV 外国語からの借用語

##### (A) 古典語からの借用語

フランス語においてギリシャ語, ラテン語をあやつったと非難された Ronsard における古典語からの語彙の借用の実態はどうであろうか。<sup>1</sup>Ronsard は、前述のように詩論その他で、古典語からの語彙の借用はできる限り慎み、母国語を用いるよう勧めている。Ronsard は、こうした言にもかかわらず、実作において非難に価するほど古典語からの借用語をふりまわしているかどうか、少なくとも小論で取上げている3恋愛詩集に関する限り、その使用の実態はどうであろうか。非力な筆者は専ら、Ronsard と同時代の著名なユマニスト Muret の注を始め現代に至るまでの諸家の注に頼り、それらの注において明らかに古典語からの借用語と認められた語を選び出し、それを検討することによって Ronsard におけるその使用実態をいくらかでも明らかにすることができればと念じている。

Chamard は次のような意味のことを言っている。<sup>2</sup>Pléiade 派が古典語から借用した語の中には、今日立派にフランス語として通用している語がかなりある。この事実は彼らの大胆な行為を正当化するものではなかろうか。だから Pléiade 派が借用した語の完全なリストを作製し、それらの語がその後たどった運命を追跡調査することは興味深い問題であろう。しかし、この小論において取っている観点、即ち Ronsard の用語を17世紀との関連において調べるといふ観点からは、たとえ Ronsard が古典語から借用し始めた語であっても、その語が Académie の辞書に採用されている限り、その語はここでは問題にならない。その語

1. ギリシャ語, ラテン語をあやつったということは、単に語彙の問題にとどまらず、言いまわし, 比喩その他広く文体に関する問題であることは言うまでもない。したがって、この問題の解明は古典語, 古典文学に通暁する学者の努力に待たなければならない。

2. Chamard: Histoire de la Pléiade, Tome 4, p. 51.

は17世紀の人の眼には奇妙な語と写らない可能性があるからである。

今までの場合同様、Ronsard が3つの恋愛詩集で使用している古典語からの借用語で、Académie の辞書の初版に出ていない語についてまず検討し、ついでその単語自体は Académie の辞書に出ているが、Ronsard がそれらの語を古代語の有する意味で使用し、したがってその意味が Académie の辞書に出ていない語について検討する。

a) ギリシヤ語からの借用語

「恋愛詩集」に見られるギリシヤ語からの借用語で Académie の辞書に出ていない語としては、

moly: Du fin Gregeoys l'espée vangeresse,  
Et le *Moly* par Mercure ordonné,  
En peu de temps du breuvage donné  
Forcerent bien la force charmeresse. (Les Amours, LXV)

moly はギリシヤ語の moly をそのままフランス語に移した語で、根が黒く、白い花の魔法の力を有する植物の名である。<sup>3</sup> 引用文は——策に長じたギリシヤ人（オデュッセウス）の復讐の剣とメルクリウスによって指示された魔除けの薬草はたちまちのうちに飲まされた飲物の魔力を消してしまった——を意味する。これはホメロスのオデュッセイア第10巻に語られている魔女キルケによって豚に変えられた家来たちを取戻しに行くオデュッセウスの物語である。Wartburg によれば、この語を最初に使用したのは Ronsard である。<sup>4</sup>

lote: ... du Grec la troppe errante et sotté,  
Afriandée aux douceurs de la *Lote*  
Sans plus partir vouloyent là sejourner: (ibid., CXXXIV).

lote はギリシヤ語の lotos で、ホメロスがオデュッセイア第9巻で語っている Lotophages（ロートパゴス）人の国の甘い果実のことを言う。オデュッセウスの家来たちはこの実を食って故郷を忘れ、そこにとどまろうとした。lote は Ronsard 以前既に Lemaire de Belges によって Les illustrations de Gaule et singularitez de Troye (1509–1513) で使用されている。<sup>5</sup>

nepenthe: O de *Nepenthe*, et de lyesse pleine,

3. Bailly: Dictionnaire grec français による。

4. Wartburg はこの語が Molly という形で Cotgrave にあると言うが、同書には出ていない。

5. cf. Wartburg, Huguet.

Chambrette heureuse, ...

(ibid., CII)

nepenthe はギリシヤ語の nepenthes で、Muret の注によれば、「ホメロスにおいて、<sup>6</sup>それを飲めば誰でも、その日のうちは、いかなる悲しみ、憤りをも心に感じないという卓効を有する飲物を nepenthe と呼んでいる」と言う。この語は、Bloch et Wartburg によると、1552年 Ronsard がギリシヤ語から借用したとなっている。1584年、第1行目が O de repos et d'amour toute pleine と訂正され、nepenthe が除かれている。<sup>7</sup>

endelechie: Pour me donner et force et mouvement,

N'estes vous pas ma seule *Endelechie*? (ibid., LVI)

Endelechie は、1553年の再版で、Entelechie に改められている。Muret はその注において、「ma seule Entelechie は自然的、意志的をとわずあらゆる運動をわがうちに生ぜしめる ma seule perfection, ma seule ame を意味する。entelechie はギリシヤ語で perfection を意味する。アリストテレスの説くところによると、自然物はおのおの2つの本質的な部分を有している。即ち彼が hyle または to hypokeimenon と呼ぶ質料と、eidon, morphe または entelecheia と呼ぶ形相とである。なお、この形相あるいは entelechie はあらゆる物に本質と運動とを与える。かくて、重い物を下へ、軽い物を上へ赴かしめるものはそれらの entelechie に他ならない。植物をして養分を吸収し、生長させるものも、それらのうちにある本質的な形相である。動物をして感覚し、生殖し、場所から場所へと移動させるものも彼らの entelechie 即ち彼らの魂に外ならない。……」<sup>8</sup>と言う。

Busson によれば、<sup>9</sup>16世紀の前半、Budé 一派とキケロ派との間に entelechie の意味に関して論争がもちあがり、1550年頃にはこの語は少くとも学生の間では有名になっていた。アリストテレスは entelechie を《forme du corps》即ち âme としたのに対し、キケロはこの語を《mouvement continu et éternel》と解し、âme を運動であるとした。Budé は、1515年、アリストテレスの立場からキケロの解釈を攻撃した。Budé 派とキケロ派の間で長い論争が行われ、この解釈に関連して entelechie と綴るべきか、endelechie とすべきかの問題がもちあがった。endelechie は durée continue (mouvement continu et éternel) を意味する entelecheia から、entelechie は activité efficace を意味する entelecheia から来た。Ronsard は、1552年の初版では、キケロの解釈にくみして mouvement éternel を意味する entelecheia 即ち endelechie を用いたが、<sup>10</sup>翌53年の再版では、Muret の影響で ente-

6. オデュッセイア, IV, 220 行以下。

7. Huguet に Ronsard の用例がないのは、1584年にこの語が削られたからであろうか。

8. Oeuvres Complètes de Ronsard, par Vaganay, Tome 1, p. 82.

9. Henri Busson: Ronsard et l'Entéléchie. (Mélanges offerts à Henri Chamard, p. 91-95).

lechie に改めていると。Huguet には Rabelais の用例の外 2 例ほどあがっているが、Ronsard のは出ていない。この語は Cotgrave, Nicot にも掲げられている。

iö: Iö voici la prée verdelette,  
Qui prend vigueur de sa main la touchant,  
Quand pas à pas pillarde va cherchant  
Le bel esmail de l'herbe nouvelette. (ibid., CXXXI)  
Iö, iö, quel myrte, ou quel laurier  
Sera bastant pour enlasser ma teste? (ibid., LXXI)

iö はギリシヤ語の io である。Muret の注には、この語はギリシヤ語、ラテン語において歡喜の印であると言う。Bailly によれば、io は 1) cri d'invocation, 2) cri de douleur とあり、Gaffiot<sup>11</sup> には、1) cri de joie dans les triomphes, dans les fêtes, 2) cri de douleur とある。喜びと同時に苦しみ、悲しみを示す間投詞である。さすがにこの語は Cotgrave, Nicot になく、Huguet にも掲げられていない。第 1 例は、おお、この萌え出る新緑の<sup>まき</sup>牧場こそ、美しい七宝さながらの若草を泥棒のごと一步一步と探し求める彼女の手<sup>まき</sup>にふれて活気を取戻したのだという意。1578年、第 1 行が Voicy la prée et la rive mollette と訂正され、Iö が除かれた。第 2 例は、いかなるミルタ、あるいは月桂樹<sup>12</sup>が私の頭を巻くに足りる (bastant) であろうかの意。この Iö, iö も 1578年の訂正で削除されている。

Charites: Quand j'aperçoy ton beau chef jaunissant,  
Qui l'or filé des Charites efface, (ibid., LV).  
Hé qu'à bon droit les Charites d'Homere  
Un faict soudain comparent au penser (ibid., XV).

Charites はギリシヤ語の Charites であり、les Trois Grâces を意味する。第 1 例は、美の女神たちの金髪 (l'or filé) をも影薄いものとする御身の美しい金髪を見る時の意。1560年、第 2 行目が Qui la blondeur des filets d'or efface と訂正されて Charites が除かれたが、78年に再び Qui les cheveux des Charites と改められて Charites が姿を現わしている。第 2 例の Charites は、Laumonier によれば、ピンダロスの場合同様 Muses と同義に見なすべきである<sup>13</sup>と言う。ホメロスの詩神 (ホメロス自身のこと) が物事の速やかさを思惟にた

10. Muret は Budé の説にくみしていたことは、彼の注の上に引用した箇所につづく部分でケケロの説を攻撃していることによっても明らかである。

11. F. Gaffiot: Dictionnaire illustré latin français.

12. ミルタは Vénus に、月桂樹はアポロンに捧げられていた。(cf. Ronsard: Les Amours, par Weber).

13. Ronsard: Oeuvres Complètes, S. T. F. M., Tome 4, p. 18.



とえているのは何と当然至極なことであろうの意。第2例の Charites は訂正を受けていない。Huguet によれば、この語は Ronsard 以前に Lemaire de Belges, Marot, Rabelais などによって用いられている<sup>15</sup>。

以上はギリシヤ語の語彙をそのまま借用した場合について述べたのであるが、avantchien (prokyon), avantpenser (promeletan) のようにギリシヤ語をそのままフランス語に直訳した語、あるいは Adoniser のようにギリシヤ語から借用した Adonis に er を付して動詞化した場合もある。これらの語については、既に述べたから、ここではふれない。

次に、単語としてはフランス語のそれであるが、その語をギリシヤ語の意味に用いている場合について述べる。

Divin Bellay, dont les nombreuses loix,

Par une ardeur du peuple separée,

Ont revestu l'enfant de Cytherée

D'arc, de flambeau, de traitz et de carquoys: (ibid., XLV).

ギリシヤ語の nomoi は lois と同時に modes musicaux を意味し、そこから chants を意味した<sup>16</sup>。だから les nombreuses loix は諧調的な詩句を意味する。崇高な Du Bellay よ、御身のたえなる詩句は、民衆からかけ離れた燃ゆる靈感によって、愛の神 (l'enfant de Cytherée)<sup>17</sup> に弓、炬火、矢、えびらをまとわせた、即ちたえなる恋愛詩をものしたの意。Laumonier は、「ここでもまた Ronsard はフランス語でギリシヤ語をあやつっている。」と<sup>18</sup>言う。

Puisse avenir qu'un poète amoureux,

Ayant horreur de mon sort malheureux,

Dans un cypres notte cest epigramme:

Cy dessoubz gist un Amant Vandomoys ... (ibid., LII).

Muret はこの語に注して、「epigramme (epigramma) はギリシヤ語ではあらゆる inscription を意味する」と言っている。Ronsard は epigramme をギリシヤ語流に inscription の

14. Quand Homère veut donner une idée de la rapidité d'une chose, il use de ces mots *hoste noema*, qui signifient «comme le penser». と Laumonier は注している。

15. 「恋愛詩集」に Charite と単数に用いて恋人を指しているのが1例ある。Me souvenant de ma douce Charite (ibid., LXXVII).

16. Ronsard: Oeuvres Complètes, S. T. F. M., Tome 4, p. 48.

17. Cythérée: Surnom d'Aphrodite (Vénus), honorée à Cythère. (Grand Larousse).

18. Ronsard: Oeuvres Complètes, S. T. F. M., Tome 4, p. 48.

19. avenir: advenir, notte: note (noter).

意に用い、自分が死んだら、喪を象徴する糸杉に「ヴァンドーモワの恋する男ここに眠る…」という碑銘を記してくれるようにと言うのである。

... quand la mort m'aura la vie ostée,

Encor là bas je veulx aymer *l'Idée*

De ces beaulx yeulx que j'ay fichez au cuœur, (ibid., XXVI).

「idée はギリシャ語であり、われわれの心に刻まれた事物の像を意味する」と Muret は注している。死後もなおあの世で、心に刻みこんだこの美しい眼の像<sup>すがた</sup>を愛したいの意。Wartburg によれば、idée を image の意に用いるのは既に 15 世紀末にその例があり、Ronsard に始まるのではない。Huguet には Rabelais の用例が見られる。

次の例に見られる idée はプラトンのイデアの意味で用いられている。<sup>20</sup>

Par luy (son œil) mon cuœur premierement s'aisla,

Et loing du peuple à l'escart s'en vola

Jusque au giron des plus belles *Idées*, (ibid., LXII).

Ronsard はまた idole をギリシャ語の eidolon にしたがひ、image, portrait, fantôme などの意味に用いている。

Or dans mes bras, ore dedans mes yeulx,

Tu fais nouër *l'idole* de ma Dame, (ibid., XXX).

Pour tastonner *l'idole* qui n'est pas (ibid., LXI).

... mon œil n'a puissance de veoir,

Si quelqu' idole au devant ne s'oppose, (ibid., LXIX).

第 1 例の nouër は「泳ぐ、漂う、うねる」を意味し、Tu は夢を指している。第 2 例は、そこにいない彼女の幻の姿を手探りするための意。第 3 例は、1584 年、Si quelque objet に訂正され、idole が除かれている。この語は image の意味では古くは Roman de la Rose に用いられており (Wartburg), 16 世紀では Lemaire de Belges, Marot の用例が見られる (Huguet)。

Ronsard はまた, tan (taon あぶ) を, ギリシャ語の oistros が「あぶ」という意味以外に, あぶの «aiguillon, piqûre», そこから «transport de douleur, de fureur» を意味するところから, transport de fureur の意味に用いている。<sup>21</sup><sup>22</sup>

20. idée がプラトンのイデアの意味に用いられるのは Ronsard に始まるものではなく、Wartburg によれば、Rabelais にも用いられている。

21. Bailly: Dictionnaire grec français.

22. Le Corybente a quelquefois repos, Et le Curete aux piedz armez dispos, Ne sent tousjours le Tan de

以上のように、「恋愛詩集」におけるギリシヤ語からの借用語はその数がさほど多くはないが、*moly*, *lote*, *nepenthe* など物の名称を表わす語は問わないとしても、*entelechie*, *iö* などとは是非ともそれを借用しなければならない必然性が感じられない。*loix* を *chants*, *tan* を *fureur* の意味に用いるに至っては、直接の借用語より更に難解であると言えるかも知れない。「恋愛詩集」だけに限っても、Ronsard がフランス語でギリシヤ語をあやつったという非難もあながち不当であるとは言えないであろう。

しかし、「続恋愛詩集」になれば、ギリシヤ語からの借用は1語も見られない。「エレーヌ」においては、*Charite* が1例と、*mikros kosmos*, *makros kosmos* をフランス語に直訳した *petit Univers*, *grand Tout* が用いられているにすぎない。

b) ラテン語からの借用語

*contumax*: Je sens tousjours un penser qui me mord,  
Et *contumax* au cours de son effort,  
De pis en pis mes angoisses r'engreve. (Les Amours, XI)

*contumax* は《*obstiné*》を意味し、Laumonier の注によれば、この語は純然たるラテン語で、Ronsard はそれをフランス語化する労をも取らなかったと言う。私はたえずある思いが私の心を噛み、執拗に鋭鋒をおさめずますます苦しみをひどくするのを感じるの意。1560年、第2行目が *Et malheureux en si heureux effort* と訂正され、*contumax* が除かれた。Huguet では、*contumax* の *obstiné* の意味での用例は Ronsard 以後のもののみ (Ronsard 自身の用例も出ていない<sup>1</sup>) であるが、Godefroy には、*opiniâtre* の意味で *contumace*, *contumas* の Ronsard 以前の用例が見出される。

*mines*: S'il te souvient de la belle Orithye,  
Toy de l'hyver le plus fidele archer,  
Fais à mon Loyr ses *mines* relascher,  
Tant que Madame à rive soit sortie. (ibid., CLXXV)

*mines* は、Laumonier によれば、*menaces* を意味するラテン語 *minae* の敷写しのように

---

sa deesse (ibid., CXLVII). コリュバンテスは大地の女神キューベレの従者。クレテスはレアから彼女の子ゼウスを父親クロノスから守るよう頼まれ、ゼウスを隠した洞窟でその泣き声が聞えないよう槍で楯をたたいて騒音を立てた。

23. Chef, *petit Univers*, qui monstres par effait Que tu as du *grand Tout* parfaite cognoissance. (Sonets pour Helene, Livre 1, XIX)

1. Mellerio, Marty-Laveaux にも *contumax* が出ていないのは、1560年の訂正でこの語が削除されたためであろうか。

思われると言う<sup>2</sup>。Weber もその説を踏襲して mines は menaces を意味するとある。大胆な用語と言わなければならない。この4行は Aquilon に対する呼びかけで、冬の最も忠実な射手である御身よ、御身がああ美しいオレイテュイア<sup>3</sup>を忘れずにいるなら、どうかCassandre が岸に上るまで Loyr 川に対する冬の威嚇を緩めさせてくれの意である。この語は訂正を受けていない。

Tu seras faict d'un vulgaire la fable, (ibid., XIX.)

Tu seras facit はラテン語の *fies* をそのまま訳した形である。御身は世間の人びとの語りぐさになるだろうの意。Tu seras faict は訂正を受けていない。Ronsard は既に「オード4部集」においてこの語法を用いている。Tu seras faite sans cesse Des fontaines la princesse, (Livre 2, X)<sup>4</sup> こちらの方は、1555年、Iö, tu seras sans cesse ... と訂正され、この語法が除かれている。

O promptz desirs d'esperance cassez, (ibid., CXLV).

Muret は《d'esperance cassez》に注を付して、《Vuides d'esperance. Il prend, cassé, ainsi que les Latins prennent, cassus》と言う。Ronsard は《vide, privé de》を意味するラテン語の *cassus* をそのまま *cassé* に移して用いているのである<sup>5</sup>。

このように、「恋愛詩集」においては、ラテン語からそのまま借用した語はさほど多くはない。次に、単語としては Académie の辞書にあるが、その語をラテン語の意味に用いた場合にふれよう。

Qu' Amour mon cuœur, qu'Amour mon ame sonde,

Il trouvera que toute passion

Veuve d'espoir, par mes veines abonde. (ibid., XXI)

ラテン語の *vidua* (*viduus*)<sup>6</sup> にしたがって *veuve de* を *privée de* の意味に用いたのである。愛の神がわが心臓、わが魂のうちを探るならば、彼は希望を奪われた情熱がわが血脈にみなぎっているのを見出すであろうの意。Wartburg によれば、*veuve de* を *privée de* の意味に用いた例は13世紀末に見られる。「恋愛詩集」には、この語がいま1例用いられている。

2. Ce mot semble bien être ici calqué sur le latin *minae*=menaces, comme ailleurs le mot *dires* sur le latin *dīrae*=imprécations.

3. ボレアス (Borée=Aquilon) はオレイテュイアを愛し、彼女をさらい、彼女との間に2人の子供をもうけた。

4. Vianey は《Tu seras faite...》を latinisme とし、ホラチウスの *fies* を直訳したものと言っている。(Vianey: Les Odes de Ronsard, p. 123.).

5. フランス語の *casser* は *quassare* から来た。Weber によれば、*cassé* はラテン語の *cassus* ではなく、イタリア語の *casso* をフランス語に移したものであると言う。

6. *veuve* の語源は *vidua* である。

*Veufve maison des beaulx yeulx de Madame, (ibid., CLI)*

彼女がいなくなり、その美しい眼が見られなくなった家の意。

*Si suis-je heureux d'avoyr veu la lumiere*

*En ces ans tardz ... (ibid., LXXXVIII).*

ラテン語の *tardus* と同じく、*tard* を形容詞として用いているのである。例文の *si* は *pourtant* で、しかし私はこのように遅い世に生れて来たのを幸せに思っているの意。*tard* を形容詞に用いるのは Ronsard に始まるのではなく、Wartburg によれば、15世紀から見られる。

Ronsard は、ラテン語の *sic* が願望を表わす接続法と共に用いられるのに倣って、しばしば *ainsi* を用いている。

*Ainsi ton front ne soit jamais moyteux, (ibid., CLXXV)*

Godefroy は、16世紀には全く特殊な意味に用いられた *ainsi* が見られると言って、*ainsi optatif* を掲げている。Wartburg によれば、*ainsi* のこの用法は1538年以来見られると言う。「恋愛詩集」には *ainsi optatif* はこれ以外にもう4例あるが、いずれも訂正を受けていない。

*Hà, que je porte et de haine, et d'envie*

*A ce Vulcan ingrat, et sans pitié, (ibid., CLXIII).*

ラテン語の *ingratus* と同じく、*ingrat* を《*désagréable*》の意に用いている。Vulcan (Vulcain) は嫉妬する夫の象徴であり、彼女の夫を指している。<sup>7</sup>*ingrat* を *désagréable* の意に用いたのは Lemaire de Belges に始まると Wartburg は言う。なお、「恋愛詩集」に *ingrat* が《*avare*》の意に用いられた例が見られる。

*Certes le ciel trop ingrat de son bien, (ibid., LXIX).*

やはり Wartburg によれば、*ingrat* を *avare* の意に用いた例は既に Villon に見られる。

*Sus le mestier d'un si vague penser*

*Amour ourdit les trames de ma vie. (ibid., CXXXI).*

*vague* は、ラテン語の *vagus* と同じく、《*errant, vagabond*》の意に用いられている。かくもとりとめもなくさまよう思いの機<sup>はた</sup>で、愛はわが寿命を織りなすの意。*vague* は本来 *errant, vagabond* の意味で14世紀後半から使用され始めた語である。したがって、Ronsard が *vague* をこの意味に用いたのは、ラテン語からの意味の借用と考えるよりは、フランス

7. cf. Ronsard: Les Amours, par Weber.

語の古い用法にしたがったとすべきかも知れない。vague はソネ 21 にいま 1 例 Sa course vague が見られるが、1578年 Sa course folle と訂正されている。

次の plante についても、vague と同じことが言えよう。

... des le bout de la *plante*,

Je n'ay santé, jusqu'au sommét du chef, (ibid., LXXXI)

ラテン語の *planta* には *plante du pied*, *pied* の意があるが、Ronsard はここで *plante* を *pied* の意に用いている。足の先から頭 (*chef*) の先まで、健康なところはどこもないと言うのである。元来 *plante* は *plante du pied* の意味で12世紀後半から用いられていたもので、Dauzat によれば、古い時代には「植物」を意味することは稀で、したがって、「植物」の意味はラテン語の *planta* からの《*reprise savante*》であるとも考えられると言う。Wartburg では、この語が植物の意に用いられたのは1542年以来となっている。

この外、Marty-Laveaux は *souffrance* を意味する *passion*<sup>9</sup> や、*gauche*, *défavorable*, を意味する *senestre*<sup>10</sup> を *mots tirés du latin* としているが、これらはいずれも古くからフランス語として用いられていた。

「続恋愛詩集」においては、ラテン語からのそのままの借用語、あるいはラテン語を直訳した語は見られない。ただ、Laumonier は *tanseulement* をラテン語の *tantummodo* に対応するものと考えているのは前述のとおりである。

Je veux *tanseulement* à lui seul me montrer: (Continuation, LXV).

「エレヌ」においては、

naufirage: Las! devant que payer mes vœuz dessus le bort,

*Naufirage* je mourray: ... (Helene, Livre I, VI).

Laumonier はこの語に注して、*naufirage*<sup>11</sup> は難船したを意味し、「ここではラテン語の *naufiragus*<sup>12</sup> をそのまま置きかえた形容詞である。」と言う。無事上陸して神々に感謝の奉納物(絵馬)を捧げる前に、難船して死ぬであろうの意。Laumonier は *naufirage* を形容詞として<sup>13</sup> いるが、Ronsard は他の場所でこの語を「難船した人」の意に用いているから、ここにおい

8. cf. Wartburg.

9. aux *passions* de ma peine si dure, (ibid., CLXVI). Wartburg によれば、この語が *souffrance physique* の意に用いられたのは Wace から、*affliction* の意では Du Bellay からと言う。

10. ...quel Démon d'une *senestre* main Berça mon corps quand le ciel me fit naistre. (ibid., XLVII), *gauche* の意味では Chanson de Roland, *défavorable* の意味では14世紀から用いられている。(Wartburg).

11. 名詞 *naufirage* の語源は *naufragium*.

12. *naufiragus* には「難船した」、「難船した人」形容詞、名詞両方の意味がある。

13. たとえば, Un vif *naufirage* à ma rive venu, (La Franciade, Livre 4, 28).

ても *je* を修飾する同格名詞として *le naufragé* の意に用いたとも考えられる。

*incorporé*: *L'esprit incorporé devient ingenieux,*

*La matiere le rend plus parfait et plus digne. (ibid., XLI).*

*incorporé* はラテン語の *incorporatus* にしたがって、《*incarné*》、《*uni à un corps*(Mellerio)》の意に用いられているのである。精神が肉体をえてはじめて創意に富むものとなるの意。

ラテン語からの借用語もギリシヤ語の場合同様その数は多くはなく、さほど突飛な感じの語も用いられてはいない。

### (B) イタリア語からの借用語

既に述べたように *Ronsard* は、ラテン語、イタリア語からの借用語でなければ *élégant* であるとは考えず、むやみにそれらの語をふりまわしたがるならず者から、良家の子女とも言うべき固有のフランス語を守るべきことを説いている。1494年の *Charles 8* 世のイタリア遠征につづく *Louis 12* 世、*François 1* 世と代々の国王の数次にわたるイタリア遠征以来、新しいイタリア文化のフランスへの急激な流入、それに加えて *Catherine de Médicis* が、1533年、*Henri 2* 世王妃として輿入れして以来、フランスは宮廷を中心としてイタリア趣味が横溢していたことは、*Bourciez* の *Les mœurs polies et la littérature de cour sous Henri II* によっても明らかである。それに伴って、イタリア語もフランスに流入したことは言うまでもなく、兵語、芸術用語を始めとして多くのイタリア語がフランス語に取り入れられ、フランス語の語彙を豊かにしたのである。

かかる状況下にあって、イタリアに対する対抗意識から、あるいは政治的理由から、あるいは *snob* たちの振舞には目に余るものがあつたのか、イタリア語の流入に対して強い反対の声が早くからあがっている。*Ronsard* の上掲の言葉もそうした声の一つであつた。

このようにイタリア語が流行する時代にあつて、*Ronsard* を始め *Pléiade* 派の人たちが作中にイタリアから流入した語を用いたとしても、*Chamard* が言うように、それは一般の傾向に従つたままで、そこに何ら革新的なものは見られない。ところが、一方彼らは、その恋愛詩において、大いに *Petrarca* のテーマを模倣しつつ、同時に *Petrarca* の用語、表現をも取り入れたのであつて、この面よりするイタリア語の導入には、前の場合と異なり、革<sup>1</sup>新的な様相が見られると *Chamard* は言う。<sup>1</sup>*Chamard* はつづけて言う。しかし、実作においては、彼らがイタリア語から借用した新しい語は大してその数は多くはない。この事実を例証するため、*Chamard* は *Ronsard* の「恋愛詩集」に用いられ、注釈者 *Muret* によつ

1. *Chamard: Histoire de la Pléiade, Tome 4, p. 57.*

てそれと指摘されたイタリア語からの借用語を拾い出して掲げている。それは次の6語にすぎない。à l'heure à l'heure (ital. allora, allora); bastant (bastante); tirade (tirata); ghirlande (ghirlanda); humble-fiere (umil fera); doux-amer (dolce amaro).

この6語のうち、doux-amer は1553年「恋愛詩集」の再版に増補された作品中に用いられた語で、小論の範囲外に属する。bastant, ghirlande, tirade の3語は、bastant は《suffisant》, ghirlande は《couronne, chapeau de fleurs》の意味で Académie の辞書に出ており、tirade は《action de tirer》, 当時は殊に弓を射ることの意に多く用いられ、この意味では Académie にはないが、この語は「恋愛詩集」ソネ86番でたまたま d'une tirade (一気に、ぶっ続けに) の形で用いられていて、この locution は Académie に出ている。したがって、この3語はここで取上げない。残る humble-fiere, à l'heure à l'heure の2語のうち、前者は Petrarca から来た語であるが、既に複合形容詞の項で述べたから、ここではふれない。

à l'heure à l'heure: Amour adonc qui sape, mine, et ronge

De ma raison le chancelant rempart,

Pour l'assaillir à l'heure à l'heure part, (Les Amours, XLVIII).

à l'heure à l'heure は、前述のように、イタリア語の allora, allora を移したもので、《aussitôt, tout de suite》を意味し、Muret は locution italienne と指摘している。この3行は愛の神と理性との相克を描いたもので、理性のゆらぐ砦の土台を掘り崩し、侵蝕している愛の神が砦を攻撃すべく即刻出発するの意。Wartburg には、この locution は1550年頃用いられ始めたとあり、恐らく Pléiade 派の創意にかかる語であろう。1567年、第3行目が Pour l'assaillir à toute haste part と訂正され、à l'heure à l'heure が除かれている。

Chamard の6語の中には入っていないが、イタリア語からの借用語として fére をあげなければならない。

fére: Puissé-je avoir ceste Fére aussi vive

Entre mes bras, qu'elle est vive en mon cuœur: (ibid., CXXIX).

fére はイタリア語の fera をそのままフランス語に移したもので、《bête sauvage》を意味する。Laumonier, Weber の指摘によれば、Petrarca 始め Petrarca 風詩人たちは恋人を獵師の眼前から身をかわして逃げ去る fera にたとえている。わが心に焼きついている姿同様に生き生きした彼女をこの両腕に抱くことができたらの意。Godefroy は fére の用例として Brunetto Latini の Livre du Trésor (v. 1265) の例をあげているが、その次に来る用例は Ronsard, Baïf のものであり、その間に長期間のギャップがあること。Huguet には Ronsard 以前の16世紀の用例が出ていないこと。しかも上掲の2行は、Muret によれば、



Bembo の *La fera, che scolpita nel cor tengo, Così l'havess'io viva entro le braccia.* の敷写しである<sup>2</sup>。これらの事実から、Ronsard は *fère* をイタリア語から新たに借用したと考えることもできよう。「恋愛詩集」にはこの語はいま1例見られるが、2例とも訂正を受けていない。

rousoyant: Prez, boutons, fleurs, et herbes *rousoyantes* (ibid., LVII).

rousoyant (露にぬれた, 露におおわれた)には既に形容詞の項でふれた。その際, Wartburg によれば, *rosoiant* は《*qui répand la rosée*》の意味では14世紀後半から用いられているが, 《*couvert de rosée*》の意味で用いたのは Ronsard が最初であると述べた。

Weber は, イタリア語の *ruggiadoso* をこの語に当てたのだと主張している<sup>3</sup>。

次に, Académie には出ているが, イタリア語的な意味に用いられた2・3の語にふれておく。

*Les cieux ferment aux criz de sa douleur*, (ibid., CLXIX)

Muret はただ《*Les cieux ferment: arrêtez, mot italien*》とだけ注している。イタリア語の *fermare* は「止める, 停止させる」を意味する。彼女の苦悩の叫びを聞いてその運行を止めた天という誇張的表現である。この語は訂正を受けていない。

*Avant mes jours, j'ay grand'peur de laisser*

*Le verd fardeau de cette jeune escorse*, (ibid., LXXXII)

Muret の注によれば, *escorse* は「樹皮が樹木を包むように体を包む皮膚を指す。métaphore によって Ronsard は樹皮を皮膚に, 皮膚を体の意に用いたのである。」<sup>4</sup> と言い, *escorse* をイタリア語と関係づけしていないが, Weber は Petrarca にあっては *la scorza* (*l'écorce*) がしばしば人体を指していることを指摘している。事実, イタリア語の *scorza* は人体の意味に用いられる<sup>5</sup>。したがって, Ronsard は *scorza* に倣って *écorce* を人体の意味に用いた可能性も考えられる。1578年, この2行は *j'ay crainte de laisser ... de mon humaine escorce* と訂正され, *humaine* がついたため意味がより明瞭になっている。

Ronsard はまた, *Le pensement, qui me fait devenir Haultain et brave, ...* (ibid., C) のように, イタリア語 *bravo* から来た *brave* を語源にしたがって *fier, orgueilleux* の意味に用いているが, それはこの語がフランス語として用いられ始めた14世紀後半からのことであって<sup>6</sup>, Ronsard に始まることではない。

2. Oeuvres Complètes de Ronsard, par Vaganay, Tome 1, p. 177.

3. Ronsard: Les Amours, par Weber, p. 846.

4. Oeuvres Complètes de Ronsard, par Vaganay, Tome 1, p. 122.

5. Ronsard: Les Amours, par Weber, p. 549. cf. The Cambridge Italian Dictionary

「続恋愛詩集」には、イタリヤからの借用語で Académie の辞書にない語は1例も見られず、「エレヌ」では *accort* が見られるのみである。

Comme une messagere et *accorte* et *secrete*, (Helene, Livre 2, XXIX).

*accort* は「抜け目のない」を意味し、イタリヤ語 *accorto* から来た語である。この語は15世紀中頃から用いられている<sup>7</sup>。

## V 地方語の採用

Du Bellay は「擁護と顕揚」において地方語の採用については何もふれていないが、Ronsard が「詩法要略」の中でこれを説いていることは前述のとおりである。Ronsard は言う。わが国の地方語の中で最も表現力のある語を巧みに選んで、作中に用いるがよい。殊に適切な語が国語にない場合はなおさらである。それらの語は、好ましい語であり、自分の言わんとすることを適切に表現するものであるかぎり、ガスコニュ語であれ、どの地方の語であれ、意に介してはならない<sup>1</sup>。Ronsard は地方語の採用を1565年の「詩法要略」で初めて説いたのではない。既に「オード4部集」(1550)に付した *Suravertissement au lecteur* において、それを主張している。いやむしろこの *Suravertissement* は、Ronsard がこの詩集で故郷 Vendomois 地方の方言を使用したことを非難されたが、それに対する抗議・弁解の書であると言えよう。Laumonier も言うように、「オード4部集」が刷り上り、既にある程度、売られた後に、Ronsard はこの *suravertissement* を書いたものと考えられている<sup>2</sup>。

Ronsard は、*suravertissement* において、非難された方言の使用を正当化することに努め、その根拠としてギリシヤの詩人が詩作にあたってそれぞれの方言を用いた事実をあげている。なお Ronsard は、*Franciade* の第3版(1587)に付した序文においても<sup>3</sup>、地方語の使用を勧めていて、そこでは宮廷の言葉を重視する傾向が加わってはいるが、地方語に対する態度は初期から晩年に至るまで一貫して変っていない。このように執拗に地方語の使用を主張しているにもかかわらず、彼が実際に使用した地方語の数はきわめて少ない<sup>4</sup>。Marty-Laveaux は *La Langue de la Pléiade* に *Pléiade* 派の使用した地方語を列挙しているが、その数は

6. cf. Bloch et Wartburg.

7. *ibid.*

1. Ronsard: *Abbrégé de l'Art Poétique François, Oeuvres Complètes, S. T. F. M., Tome 14, p. 10.*

2. Ronsard: *Oeuvres Complètes, S. T. F. M., Tome 1, p. 57, Laumonier の注参照.* Laumonier は、「オード4部集」が既に市場に出た後に、その残部に、あるいは増刷したものに *Suravertissement* を挿入したと考えている。その理由は、*Suravertissement* の内容、初版の中には *Suravertissement* のついてないものが見られたことなどによる。

3. *Oeuvres complètes de Ronsard, par Vaganay, Tome 6, p. 532 Préface de 1587.*

約 30 語にすぎない。Chamard はその数の少ないのを見て少なからず驚いたと言って、l'abbé Froger の次の言葉を引用している。<sup>5</sup>《Ce n'était pas la peine d'en parler si haut pour s'en servir si peu》。<sup>6</sup>

では、恋愛詩集において使用され、Muret を始めとする注釈者たちによってそれと確認された地方語を具体的に眺めることにしよう。

まず「恋愛詩集」においては、

bers: Heureux *le bers*, et la main qui la sceut

Emmailloter alors qu'elle fut née. (Les Amours, CVIII)

bers は berceau (berceau は bers の diminutif) を意味し、Dauzat によれば、11世紀から存在する古い語である。今日も地方語として Normandie その他の地方に残存している。<sup>7</sup> Huguet には、Ronsard 以前の用例として Cretin, Lemaire de Belges, Marot, Rabelais, Marguerite de Navarre などが見られるが、Ronsard の同時代人 Muret がこの語を mot Vandomois とし、berceau と訳語を加えているところを見れば、当時もはや一般には用いられず、地方語としてしか残存していなかったのであろう。

mesliez: Avec les liz, les œilletz *mesliez*,

N'egallent point le pourpre de sa face: (ibid., XL)

Muret は《mesliez: meslez, mot Vandomois》と注している。Ronsard の初期の作品には、mesler (meller) という形が用いられていて、meslier はこれ以外には一度も用いられていない。ここでは deliez, repliez, piedz と韻をふむ関係上、なにげなくこの形を用いたのであろうか。

「続恋愛詩集」では、

Ronflans deçà delà dans le creux des *nuaus*,

(Continuation, XLVIII)

nuau は nuée, nuage を意味する。前述の、「オード 4 部集」に付した suravertissement において、Ronsard 自身この語が Vendomois の地方語であることを肯定している。Huguet には Ronsard 以後の用例がかなり見られる。この語は Cotgrave に出ているが、Nicot に

4. Ronsard が実際使用した地方語の数はきわめて少ないこと、Du Bellay の「擁護と顯揚」にこの主張が見られないことから、Ronsard が執拗に地方語の使用を主張するのは、「オード 4 部集」での地方語の使用を非難されたことに対する意地からであるとも勘ぐることができるかも知れない。

5. Chamard: Histoire de la Pléiade, Tome 5, p. 64.

6. l'abbé Froger: Premières Poésies de Ronsard, cité par Chamard.

7. cf. Bloch et Wartburg.

8. Godefroy は melier を mesloier の doublet としている。

はない。

Comme un tan,<sup>9</sup> qui les bœufs fait *moucher* par les bois, (ibid., LVI).

*moucher* は *mouche* の派生語で自動詞として用いられ、家畜が蠅などの虫から逃れるため、あるいは刺されて、走り廻る、とびはねる、あばれるを意味する。Mellerio, Marty-Laveaux はこの語をフランス中部の地方語としている。1560年、この1行は *Qui fait courir les bœufs en esté par les bois* に改められ、*moucher* が姿を消している。なお Laumonier は *moucher* を *souffler* と解し、*les fait souffler par les naseaux* としている。即ち *moucher* を *se moucher* (はなをかむ) と解するのであろう。Laumonier の説が適切さを欠くことは、1560年の訂正 *Qui fait courir les bœufs* を見ても明らかである。Huguet には Ronsard を中心に Pléiade 派および Brantôme の用例が見られるが、Cotgrave, Nicot にはこの語は出ていない。

Helene, tu devois quand tu marchas sus eus (les serpens venimeus)

Non sans plus les *arner*,<sup>10</sup> mais en perdre la race. (ibid., LXIX)

*arner* (*erner*, *esrener*) は *rein* の派生語で、「腰を折る、砕く (*éreinter*); 押しつぶす」を意味する。Belleau が「続恋愛詩集」に付した注において、この2行はニカンドロスのテリアカで語られている話をふまえていると言う<sup>11</sup>。ヘレネーよ、御身が毒蛇をふみにじった時、脊骨を砕くだけにとどめず、その種族を絶滅させるべきだったの意。Laumonier は *arner* を *éreiner* に当る地方語としている。Wartburg によれば、*esrener* は12世紀頃から存在する古い語であり、*arner* という形も1530年 Palsgrave に見られる。Brunot は、地方語にはよく古語が保存されているが、Baïf, Belleau, Ronsard などの用いた *erner* は、地方語の採用と同時に古語の発掘を主張する彼らとして、古語から、それとも地方語から取ったのかいずれとも決めかねると言う<sup>12</sup>。Marty-Laveaux はこの語を地方語の項には出さず、古語の項に入れている。1560年の訂正でこの語は除かれた。

「エレヌへのソネ」においては、

J'attachay des bouquets de cent mille couleurs,

De mes pleurs arrosez *harsoir* dessus ta porte: (Helene, Lirve 1, LIV).

*harsoir* は *hier soir* の意である。Belleau はこの語を《*mot du pays*》<sup>13</sup> としている。Wart-

9. tan: taon.

10. non sans plus: non seulement.

11. Oeuvres Complètes de Ronsard, par Vaganay, Tome 1, p. 93. ヘレネーとメネラーオスがトロイからの帰途、ナイル河口に漂着。船の舵手が一眠りしようとして砂浜にあがったところ、毒蛇にかまれて死んだ。ヘレネーは怒って毒蛇の脊骨を足で踏みつぶしてしまった。

12. Brunot: Histoire de la langue française, Tome 2, p. 179.

burg によれば, arsoir という形では1210年頃から存在する古い語である。Huguet においては, arsoir と harsoir との間に何らかの区別がなされているようには見受けられないが, Marty-Laveaux は地方語の項には harsoir をあげ, 古語の項には arsoir を掲げている。

Et tes bords sans chansons ne se puissent trouver :

L'Arondelle l'Esté, le Ramier en Automne,

Le Pinson en tout temps, la Gadille en Hyver,

(ibid., Livre 2, Stances de la Fontaine d'Helene)

Laumonier によれば, gadille は Anjou 地方の地方語で「駒鳥」を意味する。御身の岸辺は, 夏はつばめ, 秋は山鳩, 季節をとわずかわらひわ, 冬は駒鳥といつも歌が絶えることのないようにと言うのである。Godefroy, Huguet には Ronsard のこの例が1例あがっているにすぎない。

前述のように, Pléiade 派全体としても地方語の使用は限られたものであるが, Ronsard の3恋愛詩集においても事情は異ならない。

## VI 技術用語の借用

Du Bellay は技術用語の借用に関して, 「擁護と顕揚」の中で, あらゆる種類の労働者, 職人たちと交わり, 彼らの用いる材料, 道具, 生産物などの名称, 彼らが技術面に用いる語などを知り, そこからみごとな比喩や描写を引き出すべきであると説いている。<sup>1</sup>この言葉から考えて, 技術用語の借用は文体の顕揚を目的とすることは明らかである。たとえば,

Sus le mestier d'un si vague penser

Amour ourdit les trames de ma vie, (Les Amours, CXXXI).

Ronsard は mestier, ourdir, trame<sup>2</sup> などの機織り用語の織りなす métaphores によって, かくもみごとな詩句を創造したのである。

しかし, 前述のように, Ronsard 一派にとっては, フランス語の語彙を豊富にするとは, 詩作に当って使用する語を豊かにすることを意味する。彼らはフランスに豊かな詩語を与えたいと望んだのである。したがって, 技術用語の借用は単に文体の顕揚のみにとどまらず, Pléiade 派の所謂フランス語を豊かにする一手段と考えて差支えない。たとえば, よく引き合いに出される cil の派生語 siller (ciller) は, 「眼をしばたたく」の意味で12世紀から用い

13. cf. Marty-Laveaux: La Langue de la Pléiade.

14. arondelle: hirondelle の古形。

1. Du Bellay: La Deffence et illustration, Livre 2, XI, S. T. F. M., p. 172.

2. Wartburg によれば, la trame de la vie という表現は Ronsard に始まると言う。

られたが、13世紀末から鷹匠の間で、鷹を暴れさせないため「その眼瞼を縫い合わせる、頭を頭布で被って眼を見えなくする」の意味で使われ始めた。<sup>3</sup> Ronsard はそれを借用して、*la Parque noire Devant le tans sillant nos yeux* (S. T. F. M., Tome 5, p. 194) の如く比喩的に「眼をとじさせる」、またあるいは「盲目にする」の意に用いたのである。「恋愛詩集」には、天は美しい *Cassandre* を他人に見せまいとして、*le ciel ... silla le monde* (LXIX) という大胆な表現が見られる。

園芸用語 *enter* (接木する) は、「恋愛詩集」では、*... ce coral, qui double se compasse Sur meinte perle entée doublement*<sup>4</sup> (XCV) と平凡な使い方であるが、Du Bellay は「擁護と顕揚」の中でローマ人がいかにして国語を豊かにしたかの方策にふれて、彼らはギリシヤの最も優れた作家たちに学び、己れの範とした作家の傑出した点を自己の国語に接木する (*entoint et appliquoint à leur Langue*)<sup>5</sup> 方法をとったと、*enter* をみごとな *métaphore* として使用している。ところが、上掲の *mestier*, *ourdir*, *trame* にしろ、*siller*, *enter* にしろ、いずれも *Académie* の辞書の初版に出ているから、この小論では差し当って問題にならない。

「恋愛詩集」で用いられた技術用語で *Académie* に出していない語は *pantoyment*, *empouper*, *haim*, *riagas*, *volter* の5語にすぎない。*pantoyment* と *empouper* については既に派生語の項で述べたから、ここではふれない。

*haim*: Ce ne sont qu'*haims*, qu'*amorces* et qu'*appastz*,

De son bel œil ... (ibid., CIV)

*haim* は「釣針」を意味し、*ain* という形では12世紀から存在する。意味の相関連する語を (ここでは *que* をもそえて) 3度繰返して強調するのは、Ronsard に見られる常套手法である。

*riagas*: Qui m'est et sucre, et *riagas amer* (ibid., CXXIV)

引用文は不完全であるが、*riagas* は、Marty-Laveaux によれば、硫化砒素を意味する錬金術の用語、Ronsard は「毒」の意味に用いている。ここでも、*sucre* と *riagas* を並べて例の常套的な対立的表現が見られる。錬金術関係では、*alambiquer*, *quinte essence* などの語が用いられているが、いずれも *Académie* に出ている。

*volter* は馬術用語で、馬が円く廻るを意味するが、Ronsard はこの語を歳月のめぐりに関して用いている。

3. cf. Wartburg.

4. 2列に植えられた真珠(歯)の上に、二重に配列された珊瑚(唇)の意。

5. Du Bellay: ibid., Livre 1, VII, p. 43.

... il (cest an nouveau) *volte* en un rond pluvieux, (ibid., CLIII)

これは年頭の作で、暮れから元旦にかけて雨が降ったから、この新しい年は雨催いの円弧を描いて回転すると言うのである。1578年、この *précieux* な表現は *il est neigeux et pluvieux* と率直な表現に改められている。

「続恋愛詩集」に見られる技術用語は、*desastre* が占星術における «*action nuisible des astres* (Huguet)» の意味で用いられている<sup>6</sup> 以外は、*matter*, *siller*, *lacs*, *section de veine* など *Académie* にその意味で出ている語ばかりである。「エレヌ」には、*Académie* にな  
い技術用語は用いられていない。

---

6. *matter* は将棋で王を詰めるを意味し、そこから *vaincre*, *dompter*, *fatiguer*, *épuiser* の意に用いられる。  
*Les hommes maladis* (*maladifs*), ou *mattés de vieillesse*. (*Continuation*, IX).

## 第 3 章

### I 不定法の名詞的用法

前述のように、Du Bellay は「フランス語の擁護と顕揚」の中で「l'aller, le chanter, le vivre, le mourir の如く、名詞の代りに不定法を大胆に使用するがよい<sup>1</sup>」と勧めている。Ronsard はじめ Pléiade 派の詩人たちは、彼らの宣言どおり、この語法を大胆に使用した。Marty-Laveaux は、Pléiade 一派が名詞的に用いた不定法動詞を 115 語あげている<sup>2</sup>。しかし、この語法は Pléiade 派に始まるものではなく、フランス語に古くから存在している。Marty-Laveaux は Pléiade 派以前にこの語法を多く使用した者として Scève をあげており、Chamard は Lemaire de Belges と Scève とをあげている<sup>3</sup>。

筆者は系統的に探したのではなく、たまたま目についた例をあげると、Roman de la Rose に *au mien cuidier* (389), *icil venirs, icil alers, icil veilliers, icil parlens* Fait as amanz soz les drapiaus Durement amaigrir les piaus (2543-46)<sup>4</sup> などの用例が見られる。Alain Chartier の *La Belle dame sans mercy* (1424年) には、

... : « Il fault que je cesse  
De ditte et de rimoyer,  
Et que j'abandonne et delesse  
*Le rire pour le lermoyer, ...* (9-12)<sup>5</sup>

Villon にも、

Me vint *ung vouloir* de brisier  
La tres amoureuse prison  
Qui souloit mon cuer debrasier, (*Le Lais*, 14-15)<sup>6</sup>

1. Du Bellay: *La Deffence et illustration*, S. T. F. M., p. 160.

2. Marty-Laveaux: *La Langue de la Pléiade*, Tome 2, p. 33.

3. Chamard: *Histoire de la Pléiade*, Tome 4, p. 76.

4. *Le Roman de la Rose*, S. A. T. F. Tome 2. *au mien cuidier* は私の考えではの意。次は、このように行き来し、夜を徹したり、話したりすることは、恋人たちの衣服の下の膚をひどくやせさせるの意。

5. Alain Chartier: *La Belle Dame sans mercy et les poésies lyriques*, par Piaget, T. L. F. 詩作を廃し、笑いを捨てて涙を流さねばならないの意。

6. François Villon: *Oeuvres*, par Longnon et Foulet, C. F. M. A. わが心を苦しめつけて来た愛の牢獄を破りたい思いが起ったの意。



C'est son parler, ne moins ne mais, (Le Testament, 215)<sup>7</sup>

このように、定冠詞、不定冠詞、所有形容詞、あるいは un vouloir de brisier ... のように補語を伴った用例が見出される。

Ronsard における不定法の名詞的用法は、ここで取上げている 3 恋愛詩集に関する限り、さほど多くはない。例によって、「恋愛詩集」から見て行くことにする。

Plus tost qu'un trait ne volle au descocher, (Les Amours, XVI)<sup>8</sup>

放たれた矢が飛ぶよりも速くの意。

Au flamboyer de leur double brandon<sup>9</sup>

De peu à peu l'esperance m'embrasse, (ibid., XXIV)

両の炬火（彼女の眼）が燃えているのを見ると、次第に希望が私の心をとらえると言うのである。

... sur la mer le ronfler d'un vaisseau, (ibid., L)<sup>10</sup>

le flamboyer, le ronfler には、le flamboiement, le ronflement には見られない簡潔さと力がある。

... toy qui scays des herbes le pouvoyr, (ibid., LVIII)

薬草の効能を心得ている御身よ、と Ronsard は恋人 Cassandre をアポロンから予言と医療の術を授けられたトロイの王女カッサンドラになぞらえているのである。Wartburg によれば、pouvoir は12世紀より名詞として使用されている。

このように不定法が名詞化されて定冠詞を伴うばかりでなく、「恋愛詩集」には不定冠詞、所有形容詞を伴う例も見出される。

... ce flambeau qui tout ce monde allume

D'un bluëtter qui lentement se fond, (ibid., XCIV)<sup>11</sup>

ゆるやかに空中に溶けいきらめぎでこの世をくまなく輝かせるあの炬火（太陽）の意。

Quelle des Seurs, à l'heure de mon estre

Noircit le fil de mon sort inhumain? (ibid., XLVII)

生死を司る 3 人の女神パルク (Seurs) のいずれが、私がこの世に生れた時、私の無情な

7. それは彼の言うところそのまま、それより少なくも多くもないの意。

8. descocher の名詞的用法の Ronsard 以前の用例としては、Huguet には、Amadis de Gaule 第 5 の書(1544) の例が出ている。

9. Huguet では、le flamboyer は Ronsard 以前に Pontus de Tyard の Erreurs amoureuses (1549) の例が見られる。

10. Huguet には、le ronfler は Ronsard のこの例があがっているにすぎない。

11. この語の場合も、Huguet には、Ronsard のこの例が 1 例出ているにすぎない。

運命の糸を黒く染めたのかを意味する。être は «manière d'être, genre de vie, condition, nature» の意味で12世紀から名詞として用いられ、また existence の意味でも既に用いられていたが、à l'heure de *mon estre* は大胆な、面白い表現と言わざるをえない。

Ainsi tes yeux pour causer *mon renaistre*,

Et puis ma mort, sans cesse me font estre

Ore un Pollux, et ores un Castor. (ibid., XCVII)

かくて御身の眼は私を蘇らせては再び死なせるため、たえず私をあるいはカストール<sup>13</sup>に、あるいはポルックスにならせると言うのである。pour causer *mon renaistre* も大胆な表現である。

あるいは名詞として形容詞を伴う例も見られる。

Espovanté je cherche une fontaine

Pour expier *un horrible songer*, (ibid., CXIII)

... *d'un voler plus ample*, (ibid., CVI).

第1例は、私は恐怖にとらえられ、恐ろしい夢を清めんがために泉を探すと言うのであって、古代人が悪夢から身を清めるため水浴をした習慣を真似ているのである。songer の名詞的用法は、Wartburg によれば、15世紀に始まり、Ronsard が最初ではない。第2例の voler (飛ぶ) の名詞的用法については、Wartburg に何の指摘もないが、Huguet には Marot の用例が見られる。第2例は、1560年、d'une aele bien ample と訂正され、un voler が除かれている。<sup>14</sup>

「続恋愛詩集」においては、pouvoir の非常に大胆な用法が見られる。

... je n'ai le pouvoir

M'engarder d'y aller, ... (Continuation, LIII),

前述のように、pouvoir は12世紀から名詞として用いられているが、ここでは le pouvoir が前置詞を介さず m'engarder という不定法を従えている点に注意しなければならない。即ち pouvoir m'engarder をそのまま名詞化したわけである。<sup>15</sup>しかし1560年には、le pouvoir

12. Du Bellay の「擁護と顕揚」第2の書、第5章に le renaistre の用例が見られる。«... cet autre grand monarque, qui desiroit plus *le renaistre* d'Homere que le gaing d'une grosse bataille». cf. Huguet.

13. カストールとポルックスはゼウスを父とし、レダを母として生れた双生児。「カストールが〈死ぬ身〉(人間)で、ポリュデウケス(ポルックス)が〈不死〉(神)ともいわれる。カストールが死んだとき、ポリュデウケスがゼウスに願って自分の不死性の半分をカストールに与え、2人で1日はあの世に、次の日はこの世に住んだ、もしくは1人があの世にいと1人はこの世にいるという話もできた。」(平凡社：世界大百科事典による)

14. 「恋愛詩集」には、不定法の名詞的用法の例は、以上の他に、le penser, le parler, le pouvoir などを入れて10数例ある。

*d'estre seigneur de moi* と普通の用法に改められている。

*savoir* も古くから名詞として用いられているが、<sup>16</sup> 敢てそれをもあげるなら、「続恋愛詩集」に次の2例が見られる。

Toi qui es des enfance en *tout savoir* instruit, (ibid., IV).

Las! pour vouloir en ma jeunesse aprendre

Trop de *savoir*, je me fis malheureus. (ibid., XXXIX).

このように「続恋愛詩集」における不定法の名詞的用法は、その数がきわめて少ない。

「エレーヌへのソネ」においては、

*Cest aller*, ce parler digne d'une Deesse, (Helene, Livre 1, XXIII)

女神にもふさわしいあの立ち居ふるまい、話しぶりの意である。*parler* は *manière de parler* の意味で既に12世紀末から用いられているが、*cest aller* の方は面白い言い方である。<sup>17</sup> Huguet には、《*action d'aller*》の意味では Marot などの用例があがっているが、《*allure*》の意味では Ronsard 以前の用例は見られない。

*Tel dire* n'est sinon qu'imagination,

Qui embrasse le faux pour les choses cognues: (ibid., XLI).

かかる主張は、確実なことを信ぜずして虚偽のことがらを真実なりとする想像のなせるわざに他ならないの意である。*dire* の名詞的用法は、Wartburg では16世紀に始まるとある。少なくとも Huguet には Calvin の *Institution chrestienne* (1541) の用例があるから、Ronsard が用い始めたものではない。

Je ne veux comparer tes beautez à la Lune :

La Lune est inconstante, et *ton vouloir* n'est qu'un. (ibid, Livre 2, XII)

*vouloir* は12世紀から名詞として用いられている。

Ronsard の3恋愛詩集に見られる不定法の名詞的用法はさほどその数は多くないが、それでも初期の「恋愛詩集」に比して、「続恋愛詩集」, 「エレーヌ」においては著しくその数を減じている。

---

15. Montaigne に次のように大胆な例が見られる。《*Le long temps vivre et le peu de temps vivre est rendu tout un par la mort.*》(Essais, Livre 1, XX).

16. *savoir* は *ensemble des connaissances acquises par l'expérience, par l'étude* の意味で Wace あたりから用いられている。(Wartburg).

17. 「エレーヌ」には、いま一つ *aller* の用例がある。A *l'aller, au parler, au flamber* de tes yeux, (Livre 2, XI).

## II 形容詞の名詞的用法

Du Bellay は「擁護と顕揚」において<sup>1</sup>、*le liquide des eaux, le vuide de l'air, le fraiz des umbres* のように形容詞を名詞的に用いることは詩的表現にふさわしいとして、その使用を勧めている。ただし、それはかかる表現が何らかの優雅さ、力強さをつけ加える場合のことであって、*le chault du feu, le froid de la glace* に類するものは避けるべきであるとする。火が熱く、氷が冷たいのは当然であって、*le chault, le froid* が *feu, glace* に何らつけ加えるところがないからであろう。

しかし、この語法も Pléiade 派に始まるものではない。Chamard によれば、Pléiade 派はこれを Maurice Scève に学んだと言う<sup>2</sup>。事実、Scève にはこの語法が多く見られ、Saulnier は Scève 研究の中で<sup>3</sup>、詩集 *Délie* で用いられたこれの用例を22ばかり指摘している。Ronsard の3恋愛詩集にあってはどうであろうか。

「恋愛詩集」において、まず目につくのは最上級に置かれた形容詞が名詞的に用いられている場合がきわめて多いことである。同詩集ソネ2番に、

De sa douceur forcer *les plus rebelles*, (Les Amours, II)

が見られる。色恋に背く叛逆の徒をも彼女の優しさで兜をぬがせるの意。つづいてソネ3番には、

Et sus mon cuœur le brandon éspandoit (主語は Amour)

Qui *des plus froids* les moëlls enflamme. (ibid., III)

愛の神はわが心臓に燃えるたいまつを投げかける、その火は世にも冷血な人たちの髓をも燃え立たせずにはおかないを意味する。

ソネ9番にはこの語法が4度も集中して用いられている。

*Le plus touffu* d'un solitaire boys,

*Le plus aigu*<sup>4</sup> d'une roche sauvage,

*Le plus desert* d'un separé rivage, (ibid., IX)

Ronsard の好む対句的表現と言おうか、ソネ9番の冒頭には、たたみかけるように3回も用いられ、更に8行目に、

1. Du Bellay: La Deffence et illustration, S. T. F. M., Livre 2, IX, p. 160.

2. Chamard: Histoire de la Pléiade, Tome 4, p. 77.

3. Saulnier: Maurice Scève, Tome 1, p. 295.

4. Dans la langue poétique l'adjectif substantivé, complété par un nom, s'emploie avec *la valeur d'un nom abstrait*: *Du plus bas de la terre*. (Gougenheim: Grammaire de la langue française du seizième siècle, p. 53).

Je sens garir<sup>5</sup> une amoureuse rage,

Qui me raffolle *au plus verd de mes moys*. (ibid., vers 7-8)

au plus verd de mes moys と言え、同じくソネ51番に、

Je me consume *au plus verd de mon age*, (ibid., LI)

という表現が見られるが、この1行は、1578年、Et dans mon feu je m'immolay moy-mesme と訂正され、au plus verd ... が除かれている。

Pour estoufer *le plus vif de ma peine*, (ibid., CLIII)

この1行は、1560年の訂正で le plus vif が除かれ、最終的には87年に Pour estoufer mon amoureuse peine に改められている。この訂正の結果を見れば、こうした言い方が許されるなら、17世紀の到来の間近いことが感じられる。

Suçant tousjours *le plus doux de mon sang*, (ibid., LXXXI)

これは1567年に Pinçant mon cœur, mes poumons et mon flanc と平板な表現に改められ、le plus doux が姿を消している。

中には、Villon の Blois の詩会での作を思わせるような対立的表現が見られる。

Je meurs de froid *au plus chault de l'Esté*,

Et de chaleur au cœur de la froidure. (ibid., CXLI)

酷暑のさなかに自分は寒さのため、酷寒のさなかに暑さのため死にそうだと言うのである。

その他、*Au plus profond de ma poytrine morte*, (ibid., CLXIII)

*Le plus parfait de toutes ses beaultez*, (ibid., CLVI)

Quand je senti *le plus froid* de mon ame

Se rembraser d'une nouvelle flamme, (ibid., CXXVIII)

などその数は多い。

なお、次の mon mieux をも形容詞の最上級の名詞的用法と呼びうるなら、

... ma douce guerriere,

Astre fatal d'où s'écoule *mon mieux*, (ibid., CLVIII)

Ronsard は恋人を ma douce guerriere と呼んでいることは既に述べたが、Astre fatal が ma douce guerriere と同格に置かれて恋人を指し、彼女から自分にとってかけがいのない最も貴重なものが流れ出て来るの意である。son mieux に le parfait がついて更に強められている表現も見られる。

---

5. garir: guérir.

6. Je meurs de seuf auprès de la fontaine に始まる有名な ballade. (seuf: soif).

L'art, la Nature ... et les Dieux

Ont prodigué *le parfait de leur mieux*,

Dans son beau jour ... (ibid., V)

たくみ、自然……そして神々が彼らの有する最良にして完璧なものを彼女の美しい眼に惜しみなくそそぎこんだの意。1578月の訂正で大げさな *le parfait de leur mieux* が除かれている。*le parfait de son mieux, au comble de son mieulx* などの誇張的な言いまわしが当時流行していたらしく、H. Estienne はそれを非難している<sup>7</sup>。なお、*le parfait* 自体も意味的には最上級に類似したものと言えよう。

Là, *du vray beau j'adore le parfait*, (ibid., CLXXIV)

Là は天上界を指す。天上界において完璧な真の美を崇めるのだの意。

更に進んでは, ... *un cuœur si plein d'affection*,

*Pour le parfait d'une perfection*, (ibid., XXI)

と *le parfait, perfection* と同根の語を繰返す奇抜な誇張的表現が見られる。1560年、この1例は *Pour la beauté d'une perfection* と訂正され、奇抜さが姿を消し、意味の明確な、穏やかな表現になっている。このように同根の語ではなく、《*roi des rois*》式の表現に見られる同一の語を繰返す誇張的表現も見られる。

... *un autre object ne se presente à moy*,

*Si non le beau de leur beau que j'adore*, (ibid., XXIII)

... *son esprit, qui n'estime*

*Que le divin des divines vertuz*, (ibid., LXXIII)

前者は1560年の訂正で *Sinon, Belleau, leur beauté que j'honore* となり、後者は84年に *Que le parfait des plus rares vertus* に訂正され、いずれも同語の反復が除かれている。

*parfait* の反対 *imparfait* も名詞的に使用されている。

*Je veus brusler pour m'en voler aux cieux*,

*Tout l'imparfait de ceste escorce humaine*, (ibid., CXXXIX)

天上に飛び上らんがため、この不完全な肉体を焼きつくしてしまいたい<sup>7</sup>の意。

*Je t'en ren grace, heureux trait de ces yeulx*,

*Qui m'ont parfait l'imparfait de mon ame*. (ibid., CLXXIV).

*parfaire l'imparfait* は対立めいた奇抜な表現である。1560年、2行目の最初の部分が *Qui m'a poly* と訂正されて対立の一方の項 *parfaire* が除かれ、更に78年には2行全体が *L'hon-*

7. Huguet: Dictionnaire de la langue française du seizième siècle による。

neur en soit au trait de ces beaux yeux, Qui m'ont poli l'imparfait de mon ame に改められ、意味も明確になり、引き締った表現になっている。

... *l'incertain* d'une idole gaillarde,

Fut doucement mon dormir affolant, (ibid., CLIX)

愛する女のおぼろげな姿が夢にそっと現われ、わが眠りを狂おしくする。この *l'incertain* には捨てがたい味がある。この語にはいま一つ用例がある。

Tu bastiras sur *l'incertain* du sable,

Et vainement tu peindras dans les cieulx: (ibid., XIX)

現在分詞から来た形容詞が名詞的に用いられた例もある。

Entre mes bras je rembrasse et retaste

*Son ondoyant* en cent formes trompeur: (ibid., CLVIII)

(夢の中では)、彼女を繰返し抱擁し、さわることもできるが、彼女の幻の姿はさまざまにゆらぐ波のようにしかと定まらない。前の *l'incertain* 同様味のある *son ondoyant* が、1567年、平板な *son vain portrait* に置き換えられている。

Soyt pour jamais ce souspir engravé,

Dans *l'immortel* du temple de Memoyre, (ibid., CLXXXII)

この2行は「恋愛詩集」巻末のソネの最後の2行である。Ronsardは「恋愛詩集」を閉じるにあたって、この詩集で洩らした *souspir* が永遠に人々の記憶に刻まれることを *Muses* に念じているのである。

「続恋愛詩集」においては、「恋愛詩集」で数多く用いられていた形容詞の最上級の名詞的用法は1例も見当たらない。その代り形容詞の比較級の名詞的用法が見られる。

Toutesfois quaud je pense un peu dans mon courage

Que je ne suis tout seul des femmes abusé,

Et que *de plus rusés* en ont reçu dommage, (Continuation, XVI)

それでも心 (*courage*) の中で、女にだまされたのは自分だけではなく、自分よりもっと抜け目のない男でもその害を被ったのだと考えると意。

Comme *sage* et *plus vieil*, donne moi quelque adresse,

Pour eviter ce mal qui ma raison détruit. (ibid., IV)

賢者、先輩として、わが理性を狂わすこのわずらいを逃れるため、何か処方を受けてもらいたい意。

... ma douce *inhumaine*

Avecques elle, en s'en allant, enmaine

Mon cœur captif de ses beaux yeux blessé. (ibid., XXXVIII)

Wartburgによれば、inhumaineの名詞的用法はRonsardに始まると言う。Ronsardが恋人を *ma douce guerriere* と呼んでいることは既に述べたが、*ma douce inhumaine* もそれに類する対立的表現であり、「続恋愛詩集」にはいま一つ *ma douce contraire* (ibid., LV)が見られる。

Vous estes le seul but où vise mon courage,

Et seulement en vous tout *mon rond* se parfait (ibid., XV)

円は完全・完成を意味する。御身はわが心の目ざす唯一の目標であり、御身においてのみ自分は完全なものとなるの意である。「続恋愛詩集」における形容詞の名詞的用法はその数が少なく、しかもごくありきたりのものばかりで、上に掲げた以外にあげるべきものはない。

「エレーヌ」においては、形容詞の最上級の名詞的用法は3例見られる。

... toujours *le fort le plus foible* surmonte, (Helene, Livre 1, XVII)

J'avois desja passé *le meilleur* de ma vie, (ibid., XXX)

Voy son corps, des beautez le portrait et l'exemple,

Qui ressemble une Aurore *au plus beau* d'un matin: (ibid., Livre 2, III)

この3例はなるほど最上級には相違ないが、第1例は強者が弱者に打ち勝つを意味し、二者間の比較であり、第2例も特に強調、誇張的な表現ではなく、「恋愛詩集」で見られたような表現は結局第3例のみである。

これ以外に、「エレーヌ」における形容詞の名詞的用法で特にあげなければならないものと言えば、次の1例くらいであろう。

Entre *l'aigre et le doux*, l'esperance et la peur, (ibid., LIII)

複合形容詞 *aigre-doux* については既に述べたが、ここでは *aigre* と *doux* を切り離し、相方を名詞化して使用している。

以上でRonsardの3恋愛詩集における形容詞の名詞的用法の概観を終るが、初期の「恋愛詩集」においては、この用法は総数72の多くをかぞえ、その中で特に目立つのは最上級に置かれた形容詞の名詞的用法で72例中20数例を占めている。ところが最上級の名詞的用法は後の訂正でその多くが削られている。Ronsardは初期の強度な、あるいは誇張的な表現を緩和しようとしたものと思われる。「続恋愛詩集」では、この最上級の名詞的用法は1例も見られず、「エレーヌ」では1例のみと著しい減少を示めしている。最上級の名詞的用法のみならず、一般に形容詞の名詞的用法そのものも、「続恋愛詩集」では総数17、「エレーヌ」で



は22と、「恋愛詩集」の72例に比して、これまた著しい減少を示しているのである。

### III 形容詞の副詞的用法

不定法の名詞的用法、形容詞の名詞的用法につづいて、Du Bellay は形容詞を副詞的に用いるべきことを勧めている。<sup>1</sup>《Ilz combattent *obstinez.*》, 《Il vole *leger.*》の如く、副詞 *obstinément*, *legerement* に代って形容詞 *obstinez*, *leger* を用いるようにと言うのである。言うまでもなくこの用法は、*ment* に終る副詞を用いるよりは、はるかに簡潔で引き締まった感じを与える。Brunotによれば、古代の詩人たちの言いまわしを模倣したこの用法は、既に Lemaire de Belges に、あるいは Maurice Scève に見られる。しかしこの用法にあっては、その形容詞がはたして副詞的に使用されたものかどうかを決定することは必ずしも容易ではない。たとえば、

Lors (l'Aurore) ses cheveux *vergongneuse* arracha, (Les Amours, LXXVIII)

*vergongneuse* は主語 l'Aurore に対して同格的に置かれているが、恥ずかしく思った彼女はと真に形容詞として用いられているのか、それとも *vergongneusement* の代りに副詞的に用いられているのか定め難い。Ronsard が「恋愛詩集」で使用している形容詞の副詞的用法は、このように形容詞・副詞いずれとも定め難いものから、*galope bien fort*<sup>2</sup> (LIX), *Là deux rubiz<sup>3</sup> hault eslevez rougissent* (CLX) の *fort*, *hault* などごく普通のものまで含めて、約28例ほど見られる。

Ny le Soleil ne rayonne si *beau*, (ibid., LIV)

Chamard もあげている例であるが、

En lieu d'un Aigle, un soing ...

Ronge *goulu* ma poitrine immortelle, (ibid., XIII)

鷲にあらずして、苦悩がががつとわが不死の胸をかじるの意。

Comme à son bord la marine salée,

Qui *lente* va, *lente* revient ausi, (ibid., CLX)

岸辺にゆったりと寄せてはかえす波のようにの意である。

... ma vie est heureuse

De s'escouler doucement *langoureuse*, (ibid., LXXXIII)

*langoureuse* は副詞 *doucement* で限定されているが、*langoureuse* 自体ここでは副詞的に

1. Du Bellay : La Deffence et illustration, Livre 2, IX, S. T. F. M., p. 161.

2. *galope* は命令形。

3. 乳首を指す。

用いられている。

「続恋愛詩集」には、この語法は約13用いられている。

Il me tira *premier* une fleche acerée

*Droict* au cœur, ... (Continuation, II).

Il は愛の神を指す。premier, droict のようにごく一般的なものから、

Mais je ne change pas l'amour d'une maistresse,

Qui, dans mon cuœur colée, *eternelle* me suit. (ibid., IV)

光蔭は矢の如く過ぎ、わが若さも日に日に失われていく。この2行はそれを受けて、しかし変らないのは彼女に対するわが愛、その愛はわが心にくっつき、かたときも離れずわれにつき従う。この *eternelle* など、Pléiade 派の言う形容詞の副詞的用法の典型とも言えよう。<sup>4</sup>

Une fille d'Anjou me detient en servage,

A laquelle baisant maintenant le tetin,

Et maintenant les yeus endormis au matin,

Je vy (comme l'on dit) trop *plus heureux* que sage (ibid., III)

これは Du Bellay に贈ったもので、ローマに滞在し、ラテン語の詩をも書いている Du Bellay にひきかえ、Anjou の小娘にかまけている自分をうたったのである。

「エレーヌ」においては、

Je te regarday *ferme*, ... (Helene, Livre 1, XI)

Regarde la marcher toute *pensive* ... (ibid., Livre 2, III)

Mainte herbe vous cueillez en la saison plus tendre

Pour me les envoyer, et pour *soigneuse* apprendre

Leurs noms et qualitez, especes et valeurs, (ibid., Livre 1, XXXV)

など、およそ8例が見られる。

「恋愛詩集」の28例に対し、「続恋愛詩集」の13例、「エレーヌ」の8例と次第に減少している。

#### IV . *périphrase* 的 表 現

前述のように、Du Bellay は「擁護と顕揚」の中で、詩においては換喩法 (*antonomase*) なる技法を用いるよう勧めていた。彼は言う。換喩法とはあるものの名をそれに固有な性質

4. これに似た用例に、Je crois que je mouroi' si ce n'estoit la Muse Qui deçà et delà *fidelle* m'accompaigne. (ibid., XXII).

によって示すもので、そこに優雅さがある。たとえば、Jupiter の代りに le Pere foudroyant, Bacchus の代りに le Dieu deux fois né, Dyane の代りに la Vierge chasseresse と言うが如き場合である。この技法は古代の詩人たちによって頻繁に用いられたが、フランス人はそれをほとんど用いず、と言うよりそれを知らないのだ。だから、それをしばしば用いるよう勧めたい。それに類するものに、《Depuis ceux qui voyent premiers rougir l'Aurore, jusques la ou Thetis recoit en ses undes le filz d'Hyperion》式の表現がある。これは《Depuis l'Orient jusques à l'Occident》の代りに用いられたもので、趣のある表現である<sup>1</sup>。

これに対し、Barthélemy Aneau は「擁護と顕揚」攻撃のパンフレット Quintil Horatian において、御身の挙げている例は antonomase ではなく、périphrase であると非難している<sup>2</sup>。では、antonomase とは何か。Henri Morier<sup>3</sup>、あるいは Paul Robert<sup>4</sup> によれば、

a) ある人物（固有名詞）を、その性格を要約する普通名詞または périphrase によって示すこと。例：キケロの代りに l'orateur romain とする場合。

b) 逆に、普通名詞の代りに固有名詞を用いること。例：C'est un homme cruel の代りに C'est un Néron と言うが如き場合。

だとすれば、Du Bellay の挙げている例は、Aneau の言うように、単に périphrase と呼ぶ方が適当なものが多いのかも知れない。Louis Humbert も同様のことを言っている<sup>5</sup>。Pléiade 派の詩人たちには、直截な表現よりは périphrase の方が「より暗示的」で詩に趣をそえるものと思われたのであろう。以下、Du Bellay が antonomase と称するものを含めて、Ronsard の3恋愛詩集に見られる périphrase 的表現を眺めることにする。

《Depuis l'Orient jusques à l'Occident》を意味する「最初に人びとが暁のしらむのを見る所から……」式の表現としては、「恋愛詩集」に、

Des l'onde Ibere où nostre jour s'abreuve

Jusques au lict de son premier reveil, (Les Amours, LXII).

D'un Océan qui nostre jour limite

1. Du Bellay: La Deffence et illustration, S. T. F. M., Livre 2, IX.
2. Le Quintil Horatian ou la critique de la Deffence de J. du Bellay. (Person 編の「フランス語の擁護と顕揚」に appendice として収録されている。) このパンフレットは1550年匿名で出された。長い間 Charles Fontaine がその著者と考えられていたが、今日では Barthélemy Aneau (1505?—1561) がその筆者であることは確認されている。Aneau は詩人、歴史家にして、Lyon の Collège de la Trinité の校長。
3. Henri Morier: Dictionnaire de poétique et de rhétorique.
4. Paul Robert: Dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française.
5. Du Bellay: La Déffense et Illustration de la langue française, par Louis Humbert, p. 473.
6. Chamard: Histoire de la Pléiade, Tome 4, p. 85.

Jusques à l'autre, ...

(ibid., CLXII)

の2例が見出される。第1例は、1567年、Des l'onde Ibere où le Soleil s'abreuve, Jusqu' à l'autre onde où il pert le sommeil と訂正され、第2例も、1578年、Du bord d'Espagne, où le jour se limite, Jusques à l'Inde と訂正され、意味が多少明瞭になったが、本質的には何の変化もない。

これに類する表現として、

Quand le soleil à chef renversé plonge

Son char doré dans le sein du vieillard, (ibid., XLVIII)

le vieillard は海神ネプトゥヌスを指す。Muret によれば、Ronsard がネプトゥヌスを vieillard と称したのは、海の泡が白髪に似ているからか、むしろ古代人が水を万物の本源と考えていたがためであろうと言う。そこで、le sein du vieillard とは海を指す *périphrase* であり、この *périphrase* が日没を意味する更に大きい *périphrase* 「太陽がまっさかさまに金色の馬車を海に沈める時」の中に含まれているのである。

Quand le grand œil dans les Jumeaux arrive, (ibid., CLXV)

le grand œil (太陽) が双児宮に到着する時、即ち5月18日を意味する<sup>7</sup>。これと対になって、

... quand sa (du grand œil) fuite obliquement tardive,

Par le sentier qui roule de travers,

Atteint l'Archer, ...

(ibid., CLXV)

太陽が、斜めに走る小径(黄道帯)を通過して、ゆっくり斜めに遠ざかり、人馬宮に到達する時、即ち11月18日を指す<sup>7</sup>。また、

Et soit Phebus attelé pour marcher

Devers le Cancre, ou bien devers l'Archer, (ibid., XCIV)

太陽が巨蟹宮に向って、あるいは人馬宮に向って歩むため繋駕される時でも、即ち太陽が巨蟹宮に入るのは6月17日であり、人馬宮に入るのは11月18日であるから、この2行は夏であれ、冬であれ<sup>8</sup>の意になる。

「続恋愛詩集」, 「エレヌ」の両詩集には、これに類する悠長な表現は見られない。ただし「エレヌ」には、「日の出」を意味する *Quand le Soleil attache à ses chevaux la bride* (Helene, Livre 1, LV) という表現が見られる。

7. Muret の注参照, Oeuvres complètes de Ronsard, par Vaganay, Tome 1, p. 212.

8. ibid., p. 140. および cf. Ronsard: Oeuvres Complètes, S. T. F. M., Tome 4, p. 94, Note de Laumonier.

「恋愛詩集」における *périphrase* 的な表現を眺める時、まず目につくのは古代神話をふまえた例の多いことである。

*Le pourpre esclos du sang Adonien, (Les Amours, CLXII)*

アドニスの血から生じた赤い花、アネモネを指す。

*Du faux et vray la prompte messagere, (ibid., XV)*

虚偽と真実の足ばやの伝達者、噂の女神 (*Renommée*) を意味する。

... *le filz d'Alcméne,*

*Qui tout en feu s'assit entre les Dieux, (ibid., CXXXIX)*

アルクメネを母として生れ、オイタ山上でわが身を焼こうとしたヘラクレスを指す。

*Vieil enchanteur des vieulx rochers de Thrace, (ibid., LXIV)*

竖琴の妙なる音によって岩をも動かしたというトラキヤのオルフェウスを指す。

... *toy qui scays des herbes le pouvoyr,*

*Et qui la playe au cuœur m'a faict avoyr, (ibid., LVIII)*

薬草の効能に通じ、しかもわが心臓に傷をおわせた御身と言って、Ronsard は恋人 *Cassandra* と、アポロンから予言と医療の能力を与えられたカッサンドラ、ソネ 176 番の冒頭で *Sœur de Paris, la fille au roy d'Asie* と呼びかけているトロイの王プリアモスの娘、パリスのきょうだいであるカッサンドラ (*Cassandra*) とを完全に同一視しているのである。両 *Cassandra* は「恋愛詩集」でしばしば同一視されている。

次の例においては、上に掲げた例に比して、古代神話の利用が巧みになり、それだけに難解になっていると言えよう。

*Dieu medecin, si en toy vit encore*

*L'antique feu du Thessale arbrisseau, (ibid., CLXI)*

Muret は、1553年「恋愛詩集」の再版に付した注において、この2行に関し、*Dieu medecin*: 「最初に医術を発明したアポロンを指す」、*Du Thessale arbrisseau*: 「月桂樹に変えられたテッサリアの娘ダフネ」と、これだけの解説を加えている。アポロンよ、御身の裡に今なお月桂樹に変えられたテッサリアの *nymphé* ダフネに対する昔の思いが消えずに残っているならの意。

難解と言えば、次に、*périphrase* 的な表現ではないが、古代神話に対する晦渋な *allusion* の例を掲げよう。

*Et (je) veulx encor de ma palle couleur,*

*Dessus le Loyr enfanter une fleur,*

*Qui de mon nom et de mon mal soit peinte, (ibid., XVI)*

なおまた私は、ロワール川のほとりに、この蒼白い顔から一もとの花—私の名前と苦悩とが描かれている花を咲かせたいの意である。ソネ 162 番に、*Le triste ai ai du Telamonien* という 1 行が見られる。テラモンの息子アイアスはアキレウスの武具を獲得できず自刃したが、その血のしたたった所に一輪の花が咲き、花びらには AI の二字が書かれていた。AI はアイアスの最初の 2 字であり、同時にギリシャ語で Hélas を意味する。上の *Qui de mon nom et de mon mal soit peinte* はこのアイアスの話をふまえているのである。

次の例になると、晦渋さが一段と加わる。

*Nombril de qui l'honneur merite bien,*

*Qu' une grand' ville on lui bastisse encore: (ibid., LXVII)*

nombril に呼びかけている。御身の栄誉ゆえに、(その名を冠した) 大きな町が建てられるに価する nombril よと。このソネ 67 番は、Weber も言うように、女体に対する一種の Blason なのだ。Muret の注によれば、ユピテルが生れた時、彼の nombril (ギリシャ語では omphalos) がその地に落ちたところから、クレータの一平原が Omphalion と呼ばれたというカリマコス<sup>9</sup>の伝える話をふまえているのである。Ronsard は古代神話の濫用による晦渋さを非難されたのも当然と言わねばならない。

その他、le fils de Rhée (ibid., XXXII, サトゥルヌスとレアの子ユピテルを指す)、le Duc Grec (ibid., LXXI, アキレウスを指す。duc: chef militaire)、あるいは l'escrivain de la mutine armée (ibid., LXXI, ホメロスのこと) など古代神話をふまえた簡単な périphrase なら、その数は多い。

次に、古代神話と関係のない、普通の périphrase 的表現にふれておく。

*Ce ris plus doux que l'œuvre d'une abeille, (ibid., CX)*

*l'œuvre d'une abeille* は言うまでもなく蜂蜜を意味する。

*Heureux ceulx là dont la terre a les oz,*

*Heureux vous rien, que la nuit du Chaos*

*Presse au giron de sa masse brutalle! (ibid., XLVII)*

第 1 行の *ceulx là dont la terre a les oz* も、第 2 行の *vous rien, que la nuit du Chaos* ... も死者を意味することは言うまでもない。

*Soubz les toysons d'un hyver éternel, (ibid., CXXXVIII)*

9. Muret の注参照, ibid., p. 209, p. 20.

10. Ronsard: Les Amours, par Weber.

雪の下にの意である。1584年に、*Du faix negeux d'un hyver éternel* と訂正され、視覚的な表現の面白さが失われている。

*Ces doubles liz doublement argentez,*

*Ces diamantz à double ranc plantez*

*Dans le coral de sa bouche vermeille, (ibid., CX).*

第1行、第2行とも歯を指しているが、これらも一種の *périphrase* 的表現と見なすことができよう。

「続恋愛詩集」においては、*périphrase* 的表現はその数が著しく減じ、ほとんどの場合古代神話と結びついていて、しかも簡単な表現ばかりである。

*Des presens des neuf Seurs soit en toute saison*

*Pleine toute ma chambre, et pleine ma maison, (Continuation, XXII)*

neuf Seurs (ミューズ) の贈り物即ち詩を意味する。

*É, di, ne crains-tu point la troupe vengeresse*

*Des Sœurs, qui puniront ton crime apres la mort? (ibid., XLIX)*

復讐の3女神アレクト、メガイラ、ティシポネを指す。

その他、*la Déesse Qui tient Cypre en ses mains (ibid., LII, キュプロスで崇拝されていた Vénus を指す)*, *celle-là qui d'Amour est la mere (ibid., LXVII, 愛の神クピードの母即ち Vénus)*, *l'enfant de Cytherée (ibid., II, Vénus の子クピード)*<sup>11</sup> などきわめて簡単なもので、「続恋愛詩集」における *périphrase* 的表現は上に掲げた数例につきよう。

なお「続恋愛詩集」には次のような一種の *antonomase* 的な表現が見られる。

*Es tu quelque Busire, ou Cacus inhumain,*

*Pour te souler ainsi du pauvre sang humain? (ibid., XLIX)*

御身は人間のあわれな血をかくの如く腹一杯吸うとは、ブーシリス<sup>12</sup>あるいは怪物カークスの<sup>13</sup>如くむごい人なのかの意。

前述のように、「続恋愛詩集」における *périphrase* 的表現のほとんどが古代神話に結びついているが、同詩集では、「恋愛詩集」に比して、古代神話の使用が著しい減少を示して

11. Vénus は Cythera 島で崇拝されたところから、ローマ人は Vénus を Cytherea (Cytherée) と呼んだ。

(Laumonier の注参照)

12. ブーシリスはギリシャ神話中のエジプト王、彼は饑饉を祓うため、毎年外国人一人をゼウスの祭壇に犠牲として捧げた。

13. カークスはローマの Aventinus の丘の洞窟に住む怪物で、三つの頭を持ち、三つの口から火を吹いた。(高津春繁: ギリシア・ローマ神話辞典)。

いる。Laumonier は、*Pithon vous fait la vois à nulle autre pareille* (ibid., X, 説得の女神ペイトーは御身に比類なき声を与えた) に注を付して「少女あがりの田舎娘に、いやたとえ町の娘であっても、この詩句が理解できたか疑わしい」と言っているが、<sup>14</sup> 田舎娘 Marie をうたった「続恋愛詩集」において古代神話の使用が減少を示しているのは当然であろう。しかし、同詩集に収められた詩篇がことごとく Marie をうたったものではない。Cassandre, その他友人たちに宛てられた詩も少なくない。同詩集の全ソネ作品70篇のうち、古代神話を使用しているソネは、Vénus の名が1度出るだけのものも含めて、26篇である。この中で、明らかに Cassandre に宛てたものが4篇、Belleau, Jodelle など友人に宛てたものが6篇、1557年に削除されたソネ1篇、78年に削除されたもの4篇。残る11篇のうちで明らかに Marie に宛てたものは4篇である。これら4篇においては、古代神話の使用は愛の神と矢といったいずれも簡単なものばかりである。したがって、「続恋愛詩集」が Marie だけにしぼられていたなら、神話の使用が更に減少していたであろう。

「エレーヌへのソネ」における *périphrase* 的表現に移ろう。前述のように、日の出を意味するやや長い *périphrase* «*Quand le Soleil attache à ses chevaux la bride*» (Sonets pour Helene, Livre 1, LV), あるいは «*la Lune ocieuse Tourne si lentement son char tout à l'entour,*» (ibid., Livre 2, XXIII) などが時に見られるが、「エレーヌ」においては、«*Dés l'aube jusqu' au soir que le Soleil se plonge* (ibid., Livre 1, XXVII) のように、たとえ余計な遺物 *que le Soleil se plonge* がついてはいても、表現が一般に直截になっていると言えよう。したがって、*périphrase* 的表現の数も少く、簡単なものばかりである。

«*ceste voix sans corps*» (Livre 1, XVIII, Echo の意), «*celle qui a Mars des sienes allaité*» (Livre 1, LV, マールスを自分の乳房で育てた女即ちマールスの母ユーノを指す), «*la Deesse de Gnide* (ibid., 小アジアのクニドスで崇拝されている Vénus), その他、神話と関係のない普通の *périphrase* としては、«*vos troupeaux frisez de blanche laine*» (livre 2, L, 羊の群を言う) などが見られる。なお、次の1行は一種の *antonomase* と言えないだろうか。

Je suis ton Prométhée, et tu es mon Vautour. (Livre 1, XLVIII)

Ronsard は自分を苦しめる恋人 Héléne を秃鷹に、自分をその秃鷹の犠牲者プロメテウスになぞらえているのである。

高い教養を身につけた Héléne をうたった「エレーヌへのソネ」においては、田舎娘 Marie をうたった「続恋愛詩集」におけるよりも、古代神話の使用が多く、複雑になっている。

14. Ronsard: Oeuvres complètes, S. T. F. M., Tome 7, p. 127, Note de Laumonier.



るのは言うまでもない。「エレーヌ」には、次のような一見それと分らないさりげない古代神話への allusion が見られる。

Mon souhait n'advindra, puis qu'en vivant je voy

Que mon amour me trompe, et qu' il n'a point de frère. (Livre 1, V)

Weber によれば, frère de l'Amour とは Antéros を指し, 「相愛」のシンボルであると言う。もっとも「恋愛詩集」にも, un Amour sans frere ne croyst point (Les Amours, LXXXIII) という表現が見られる。

なお Ronsard は, 「恋愛詩集」で恋人 Cassandre をトロイの王女カッサンドラと同一視したように, 「エレーヌ」においては Hélène をトロイ戦争の原因となったギリシヤのヘレネーと全く同一視している。

Nom (Helene), malheur des Troyens, sujet de mon souci, (Livre 1, III)

前述のように「エレーヌ」における古代神話の使用は「続恋愛詩集」におけるより多いとはいえ, 「恋愛詩集」のそれに比すれば, 遙かにその数は少なく, 「恋愛詩集」におけるほど晦渋な古代神話への allusion は見られない。

## 結 論

Ronsard は死後 Malherbe, Boileau によって徹底的に叩かれた。彼はそうした非難に価するだろうか。今日の Ronsard 研究は概ね, 前述の如く, Ronsard に対する17世紀の非難を不当とし, 両者間のギャップを否定する方向にある。また両者間の連続を実証的に論証する試みも見られる。かかる論証の多くは, Ronsard の初期作品「オード4部集」, 「恋愛詩集」に作者自身後に加えた訂正を探り, そこに Ronsard の17世紀的方向への発展を捉えようとしている。この方法は初期の作品に見られる大胆な用語やイマージュ, 晦渋な表現などが後の訂正でどう改められているかを問題にする。Ronsard の初期の作品には大胆な造語が数多く用いられていると言われるが, はたして初期の作品に大胆な造語がどのように用いられているかが組織的に調査されているであろうか。なるほど Lexique de Ronsard, La Langue de la Pléiade などの語彙集はあるが, 各作品に即して用語の実態が明らかにされているようには思えない。用語の問題は Ronsard 派の運動において大きな比重を占め, しかもそれは17世紀の Ronsard に対する非難の主要目標の一つであった。

そこで筆者はまず Ronsard の用語の実態, 殊に初期の作品におけるそれを明らかにする必要があると考えた。それを明らかにすることは, 単に17世紀の Ronsard 非難の当・不当を考えるためのみならず, Ronsard 研究全般にとっても必要なのは言うまでもない。しかし

小論においては、狭く前者に問題をしぼり、初期の作品には17世紀から非難されてしかるべきどんな語が用いられているかを調べ、同時に *variantes* のみならず、それらの語ないしはそれに類する語が中期、後期の作にも同様に使用されているか否かを調査することにした。幸い恋愛詩集には初期、中期、後期に属する「恋愛詩集」、「続恋愛詩集」、「エレーヌへのソネ」があり、ジャンルが同じで相互を比較するにも好都合であるから、それらの3詩集を取上げた。ではある語が17世紀から非難されてしかるべきか否かを何を基準に判断すればよいか。小論の始めに述べた理由により、*Académie* の辞書の初版を基準として取上げ、それに出ていない語は一応17世紀から非難される可能性があるものと考え、まず3恋愛詩集に*Académie* がない語がどれだけ用いられているかを調べた。*Académie* がない語の数は前期の「恋愛詩集」に比し「続恋愛詩集」では約半分近い値を示し、「エレーヌ」では更にそれより減じていた。ついで3詩集に使用されている *Académie* がない語をできる限り原文に即して具体的に検討を加えた。

その結果、3恋愛詩集で使用されているそれらの語はほとんど頻度1で、そうむやみに使用されてはいないこと。後の訂正で削除された語も多いこと。それらの語の大半は、既に *Ronsard* 以前に誰かが用いていて、*Ronsard* の造語と考えられる語はごく限られた数であること。各項目に掲げた型に属する語は中期、後期と時代が下がるにつれ著しく減じているか、あるいは皆無になっていることなどが明らかになった。それらの語が「続恋愛詩集」において激減していることは調査を待つまでもないかも知れないが、「恋愛詩集」と同じく *Petrarca* 詩風に立つ「エレーヌ」において「続恋愛詩集」より更に減じている事実は注目に値する。

初期の「恋愛詩集」にあっても、文字通り大胆な造語はごく僅かしか見られないが、それでも見方によっては *Ronsard* は非難に値すると思われるかも知れない。非難するのは各自の自由であるが、非難するに当たっては、*Académie* がない奇妙な語は中期から後期へと激減している事実を考慮しなければならない。この事実は、少なくとも恋愛詩に関する限り、後期へと時代が進むにしたがい、用語の面では17世紀との差が著しく減じて来ている、つまり *Ronsard* が17世紀に接近していることを示している。

言うまでもなく、恋愛詩だけにとどまらず、*Ronsard* の他の作品においても同様の事実が認められるかどうか調査しなければならない。また、*Ronsard* に対する17世紀の非難の当・不当を判断するためには、*Ronsard* の用語のみではなく、イマージュ、言いまわしその他広く彼の文体を探らなければならない。小論においては、*Du Bellay* の説く文体の高揚に関する項目をも取上げているが、それはあくまでも *Ronsard* の用語に関連する面においてのみ

文体の一部を問題にしているのもあって、Ronsard の文体を広く取上げているのではない。<sup>1</sup>  
小論では第一段階として用語の問題が中心になっている。用語の調査を恋愛詩集以外に拡げることおよび Ronsard の文体に関する調査は今後に残された課題としたい。

---

1. Du Bellay の項目にあるから参考のため付随的に *périphrase* 的表現を取上げたが、これは専ら文体に関することがらである。

## Introduction à l'étude de Ronsard

par Itaru HONJO

Ronsard, après sa mort, au XVII<sup>e</sup> siècle, blâmé durement par des législateurs du classicisme français, Malherbe, Boileau etc., a été condamné à l'oubli, ou plutôt à une méconnaissance presque complète pendant plus de deux siècles. Sur la foi de ces reproches, on a cru longtemps que Malherbe ne devait rien à la Pléiade et à ses successeurs, et qu'il n'y avait rien de commun entre la poésie classique française et celle du XVI<sup>e</sup> siècle. Ronsard mérite-t-il vraiment ces reproches? Comme le fameux passage de Boileau l'indique, les reproches lancés contre Ronsard par le XVII<sup>e</sup> siècle porte avant toutes choses sur son vocabulaire.

Ronsard a sans cesse remanié ses oeuvres. Quelques érudits ont essayé de démontrer, par un examen minutieux des corrections apportées par Ronsard à ses oeuvres, que Ronsard, dans les remaniements de ses oeuvres, marchait sans le savoir vers la réforme de Malherbe. Dans ses remaniements, Ronsard a retranché, dit-on, bien des mots hardis qu'il avait employés dans ses premières oeuvres. Alors, quels sont ces mots hardis qu'il a employés et qui justifient ces reproches? Je ne crois pas que des recherches systématiques et approfondies sur ce domaine ait été faites. Nous avons, en effet, le "Lexique de Ronsard" par Mellerio et "La Langue de la Pléiade" par Marty-Laveaux, mais ces livres sont défectueux, selon les mots de Chamard, parce que celui de Mellerio fondé sur le texte peu sûr de l'édition de Blanchemain et ceux de Marty-Laveaux sur le dernier texte de chacun des poètes, ne tiennent pas compte, en général, des leçons primitives. Au moyen de ces livres, il est impossible de juger du véritable emploi des mots dans les premières oeuvres de Ronsard.

Je me suis donc proposé d'établir un inventaire fidèle des mots de Ronsard fondé sur son texte original. Dans ce mémoire, pourtant, j'ai borné mes recherches à trois oeuvres d'Amour (Les Amours, 1552; Continuation des Amours, 1555; Sonets pour Helene, 1578) et j'ai montré d'abord quels mots blâmables Ronsard avait employés dans l'une de ses premières oeuvres (Les Amours), et ensuite, quel emploi il en avait fait dans son oeuvre de l'âge mûr (Continuation) et dans celle de sa vieillesse (Helene). Et alors, comment distinguer les mots qui méritent les reproches de XVII<sup>e</sup> siècle? J'ai donc fait appel à la première édition du Dictionnaire de l'Académie française (1694). "Ce dictionnaire n'est pas parfait et présente bien des défauts assez graves." Mais, puisqu'il avait pour but d'établir le bel usage en écartant les archaïsmes, les néologismes, et les mots vulgaires, il est évident que les mots étranges et blâmables n'y sont pas admis. On peut donc supposer que les mots qui figurent dans ce dictionnaire avaient au XVII<sup>e</sup> siècle, pour ainsi dire, le droit de citoyenneté, et qu'ils n'avaient pas à être blâmés par

le XVII<sup>e</sup> siècle.

On trouve, dans “Les Amours”, 252 mots non admis contre 2168 mots admis, dans “Continuation” 84 mots contre 1379 mots, et dans “Helene” 91 mots contre 1801 mots. Les Amours :  $\frac{252 \text{ mots}}{2168 \text{ mots}} = 0.116$  ; Continuation :  $\frac{84 \text{ mots}}{1379 \text{ mots}} = 0.060$  ; Helene :  $\frac{91 \text{ mots}}{1801 \text{ mots}} = 0.050$ . La proportion des mots non admis par rapport à ceux admis, dans “Continuation”, est moins de la moitié de celle des “Amours”. Celle de “Helene” est encore moins importante que celle de “Continuation”. Ce fait montre que les mots employés par Ronsard se sont rapprochés, avec l’âge, de ceux du XVII<sup>e</sup> siècle.

Dans la deuxième partie de ce mémoire, en examinant chacun des mots non admis de ces trois Amours, j’ai montré que Ronsard, au moins dans ces trois oeuvres, n’abusait pas de mots hardis, et que la plupart de ces mots étaient déjà employés longtemps avant lui.